

岩 波 文 庫

32-066-1

インド古典説話集

カター・サリット・サーガラ

(一)

岩 本 裕 訳



岩 波 書 店

## はしがき

わが國には古くから、佛教を媒介にして、いくつかのインドの説話が傳えられた。そして、わが物語文學の發達に大きな役割を演じた。インドの説話は、また、中國の説話文學に大きな影響を及ぼしたといわれる。古くからインドの文化を直接に受容した東南アジアでは、イスラム教に教化された今日でも、なお民衆の娛しむ説話は凡てインドの説話にイスラム教の衣を着せたものである。このように、インドの説話はアジアの東にある國々に流傳して、それぞれの文學に寄與したのであったが、また西に流れてアラビアからヨーロッパに傳わつて、ヨーロッパ人の情緒を養つた。九五六年に死んだアラビアの作家マスードイ Masudi が、「シンドバードの書」 Kitab al Sindbad はインドに由來する、と述べているが、この書は本質的にはペルシア文學の「シンドバード・ナーメ」 Sindbad-namēh シリア文學の「シンドバン」 Sindban (フライ文學の「サンダバル」 Sandabar フラビオの「千一夜物語」の多くの寫本に見られる「七人のヴェジール(大臣)の物語」、ギリシア語で傳わる「シモンティマス」 Symonides 更にヨーロッパの諸國で「七賢人の物語」 Historia septem sapientium 或は「トロパトス」 Dolopatos の名で知られている物語集と同一である。また、「千一夜物語」に含まれて、われわれになじみの深い「シンドバッドの航海」のいくつかのモテイーフはインドの古典説話文學に見られる。「千一夜物語」

に含まれる数多くの物語がインドに起源を有することは疑いえない事實であり、しかもこの偉大な物語集の粹物語のモティーフもインドに起源を有する。そして、この文學の形式はヨーロッパに伝えられて、ボッカチオ Giovanni Boccaccio (1313—1375) の「デカメロン」D. Decamerone ナヴァルの女王マルグリット Marguerite (1492—1549) の「ヘプタメロン」またハウフ Wilhelm Hauff (1802—1827) の「巖窟」Die Karawane などに影響を及ぼした。また、インドの寓話集「パンチャ・タントラ」は中世ベルシア語、シリア語、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語と傳譯せられて、ヨーロッパの民衆の間に生き、ラ・フォンテーヌ La Fontaine (1621—1695) はそのいくつかを取上げて自らの「寓話」Fables を豊かにした。また、中世のカトリック教會にもはやされた聖者傳説「バルラムとヨサファットの物語」は佛陀の傳記の翻案である。かくして、インドの説話はヨーロッパ及びアジアの大部分に流傳して、種々の形で民衆に影響を及ぼし、その文學に貢獻した。この事實を考えると、インドの説話文學は世界の文學史に於いてのみならず、文化史の上に於いても重要な意義を持つものといふべきである。

しかも、インドの説話文學は、その量に於いても、その歴史に於いても、他の文化民族を遙かに凌駕している。今日、われわれが容易に接しうる作品を擧げてみて。

一「マハーバーラタ」及び「ラーマヤナ」の二大敘事詩に含まれる挿話。

二佛教徒の「ジャータカ」(本生譚)、アヴァダーナ(譬喻譚)及びジャイナ教徒の物語集。

三 政略或は世間的智識を教える目的の寓話集「パンチャ・タントラ」及びその改刪本。

四 純粹の物語集として「プリハット・カタール」の諸傳本、更には單行の「ジュカ・サブダティ」(鷄鷄七十物語)、「ヴェーダーラ・パンチャジンジャティカー」(惡魔鬼廿五物語)など。

五 「ダシヤ・クマール・チャリタ」(十王子の冒險)などの文藝作品。

などがある。しかも、これらの多くには別行の傳本があり、それらにはまた他の傳本に見られぬ説話が含まれるなど、インドの説話とそのモティーフは枚擧に遑ないというのが事實である。

次に、歴史的に見ても、インド最古の聖典「リグ・ヴェーダ」に含まれる神話・傳説は暫く措くとしても、ヴェーダの「聖書」のブラーフマナ文獻に見られる神話・傳説はインド民族最古の説話文學の形態を傳えていて、古淡な雅趣の掬すべきものがある。そして、この時代にはこれらの物語を誦唱した一群の人々のあったことが知られる。また、當時には説話文學としてアーキヤーナ、イティハース、ブラーナの名が傳えられ、これらが「マハーバーラタ」或は「ラーマヤナ」に於ける挿話に素材を提供した。西曆紀元前四世紀より更に遙か以前のことである。そして、これらは後世のブラーナ文獻に於ける神話・傳説となって展開し、インド古典文學に重要なモティーフを提供したのである。これらのアーキヤーナやイティハースが後世の物語文學(カタール)に直結するか、或はそれぞれの愛好せられた社會が異なっていたかについては異論があるが、寓話は既に「マハーバーラタ」に見られ、西紀前三世紀に寓話のあったことはバルフートの塔に見られる浮彫から知られる。カタールの名を有する最古の作品はグナーディアヤの「プリハット・カタ

」であるが、これは現在原典は傳わらない。しかし、西曆二、三世紀の頃に成立したことがいくつかの傍證から知られる。ジャイナ教徒の物語集はかなり後代に屬するが、佛教徒の「ジャータカ」は、古いものは西紀前三世紀に溯り、新しいものでもその文化像は相當に古い。かくして、インドの説話は西紀前數世紀にはその大體の形式の整つていたことが知られる。かくて、その歴史と量の點に於いても、インドの説話文學は世界文學に冠絶するものである。

インドの説話文學の特徴は、その構想の自由で奔放であるということである。説話に登場する神も、半神も、精靈も、人間も、動物も、自由自在に姿を變え、天空といわず地中といわず自由に闊歩する。これはインド人の世界觀に基づくものであつて、凡ゆる形の被造物はその本質に於いて同一であり、それらに本質的な差違があるのではなく、階層の差があるのみであるという考によるものである。しかも、すべての被造物は輪廻轉生をまぬかれず、その經過に於いて或は半神となり或は動物となり、或は天界に生れて天樂を享受するかと思へば、地上に生れて苦惱の生涯を送るのである。それは生前の行爲の善惡によつて定められ、從つて他人の呪詛は大きく人間の運命に影響する。かかる思想乃至は世界觀に基ついて、説話文學の構想は雄大となり奔放自在となつた。今日の讀者の眼には荒唐無稽と思われることも、いささかの躊躇もなく物語られる。しかも、其處には婆羅門の社會的優越、シヴァ神の絶對的君臨など、インド独自の雰圍氣がある。しかし、なお、其處には人世に對する深い洞察があり、政略とか世才とかを尊重する傾向が見られ、この意味に於いて現代的意識を見ることが出来るのである。由來、インド人は一方に於いて

は出家遁世を獎勵し、瞑想を重んじ苦行を讚美するが、他面に於いては現實を肯定し、現世社會の事象に強い關心を示した。従つて、現實の生活に必要な技術なり實際的な知識を教ふる綱要書が著わされたのである。「パンチャ・タントラ」のごとき寓話集はその目的を説話文學によつて達成しようとしたものであり、われわれの「カター・サリット・サーガラ」のごとき純粹の説話文學と雖も、この世界觀から免れるものではない。かくして、インドの説話文學は現實の世界と空想の世界が渾然と一體をなして織り出す華麗な繡織であり、この意味に於いて世界文學に獨特なジャンルをもつものと言ひうる。

われわれの「カター・サリット・サーガラ」は、「解題」に於いて述べたように、かなり後代の作品であるが、インドの説話文學として最も完成された作品であり、また文藝作品としてもインド文學史上に傑出する作品である。かかる作品を茲にわが讀書界に提供することが出来るのは譯者としてこの上ない光榮である。ただ、遺憾なのは、種々の事情に制約されて、抜萃譯に終ることである。しかし、十八篇二萬頌に餘る全篇を邦譯することはいささか冗長の嫌いもあり、むしろその率を拾つて、讀者諸賢にインド説話文學の醍醐味を賞玩して頂くのが賢明であると考えられる。更に、この邦譯に關し、原典は全篇詩形を以て書かれているが、本書に於いては平易な口語體を用いた。原文が格調のある韻律を踏んでいる以上、如何に平易とはいへ、また散文に極めて近いとはいへ、口語譯が原典の面影を傳えないことは言うまでもない。しかし、現在の譯者に與えられている別の課題は、わが讀書界に殆んど知られていないインドの文學作品に、一人

でも多く觸れて頂くことである。従つて、この書は讀物として誰にでも親まれるものではなくてはならぬ。この意味に於いて、譯者は口語體を選んだ。しかも、原文が詩形であるだけに、韻律の關係上、呼びかけの言葉や譯出に際しては不用あるいは冗長と思われる語句が少くない。これらを一々そのまま邦語化するときには、文脈を無益に冗長ならしめる怖れがある。従つて、譯出にあたっては、これらを適宜按配し、また省略して、邦文として讀み易いことに努めた。しかし、なお、非議すべきいくつかの點のあらうことは、これ實に譯筆の拙きためであつて、■者の寛恕を乞わねばならないとともに、識者の叱正をまつ所以である。

終りに、本譯書の刊行に關し、數々の高慮に與つた高津泰繁氏、岩波書店の波木居齊二氏に謹んで謝意を表わさなければならぬ。

昭和廿八年七月

譯者

## 目次

はしがき……………

三

### ウダヤナ王行狀記

一 サハスラーニールカ王物語ーウダヤナの誕生……………

一三

ニ サハスラーニールカ王物語 (續)……………

三三

(挿話一) 婆羅門シュリータッタとムリガンカヴァタイの物語……………

三三

三 ヴァツァ王の逸樂……………

三三

(挿話二) チヤンダ・マハーセーナ王行狀記……………

四

四 ヴァツァ王捕わるーヴァーサヴァダッタ姫との戀愛ー大臣ヤウ……………

四

ガンダラーヤナの決意……………

五

(挿話三) 遊女ルービニカーとその情夫ローハジャンガの物語……………

五

## 五 ヴァツァ王の逃亡

(挿話四) 貞女デーヴァスミターの物語

(挿話五) 狡猾なシッディカリの物語

六 カウシャームビーへの還御—ヴァツァ王とヴァーサヴァダッターの結婚—ヴァツァ王の顔色

(挿話六) 毒蛇に憤慨して無毒の水蛇を殺そうとしたルルの物語

七 ヤウガンダラーヤナの智謀

(挿話七) 王の危急を救うた賢明な醫師の物語

(挿話八) 偽善者であつた言行者の物語

(挿話九) 戀の焰に焼かれて死んだデーヴァセーナ王の物語

(挿話十) 大臣の智謀によつて國を回復したブニヤセーナ王の物語

ナラダ仙の豫言

(挿話十一) 戀の虜となつたスンダとウバスンダの物語

ハラーヴァーナーカ行幸—ヴァーサヴァダッター妃薨死の噂—バドマー

ヴァティー姫の許に身を寄せたヴァーサヴァダッター

(挿話十二) ドウルヴァーサス仙に苦しまれたクンタイー姫の物語

ヴァツァ王とバドマーヴァティー姫との結婚—ヴァツァ王とヴァーサヴァダッター妃の再會	二七
九 (挿話三) ブルラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語	二三
(挿話四) 大臣の謀で生命の助かつたヴィヒタセーナ王の物語	二六
(挿話五) 人間の妻となつた天女ソーマブラバーの物語	二九
(挿話六) インドラ神とガウタマ仙の妻アハリヤーの邂逅の物語	三三
一〇 カウシャームビーへの還御—黄金の王座の獲得	四〇
二 シヴァ神の宥慰	四七
(挿話七) 商人デーヴァダーサの物語	四九
ヴァツァ王の四方征討	五〇
三 (挿話七) 婆羅門バラブーティの物語	五八
(挿話八) 王妃クヴァラヤーヴァリーが神通力をえた物語	六〇
(挿話九) 軍神カールツタイケーヤの誕生物語	六四
(挿話十) スンダラカと魔女カーラトリの物語	六九
ヴァツァ王御子寶座に登る	七〇

解 題

一「カター・サリット・サーガラ」の内容	一六
二作者ソーマ・デーヴァとその時代	一六
三「アリハット・カター」とその改題本	一六
四「カター・サリット・サーガラ」のテキスト並びに訳語	一六
五「ウダヤナ王行狀記」について	一六

ウダヤナ王行狀記

カイラーサ山に於いて頭髮の纏れた神(シツァ<sup>ツ</sup>)から勝れたガナ(シツァ<sup>ツ</sup>の眷屬)のブシュバダンタが聴き、ダラルチとなつて地上に權化した彼からカーナブーティが聴き、カーナブーティからグナーディヤが聴き、グナーディヤからサータヴァーハナ王が聴いたという、グイディヤーダラ族に傳わる不可思議な物語を聴きたまえ。

創造主が天國の勢を粉碎するために地上の競争者として造りたもうたかのようなヴァツァ<sup>ツ</sup>という有名な土地があります。カウシャームビーという大都城がその真中であつて、繁榮の女神のお氣に入りの住地で、いわば大地の耳飾りでありました。この都に、シヤターニーカというバーンダヴァ王家の王がありました。彼はジャナメージャヤの子、バリークシットの孫、アビマヌの曾孫で、祖先はトゥリ・ブラの敵(シツァ<sup>ツ</sup>)との格闘の際に腕の強さが世に知られたアルジュナでありました。大地はシヤターニーカ王の妃で、グイシュヌマティーがこの王の皇后でありました。ひとりの妃は寶玉を生み出しましたが、他のひとは皇子を生みませんでした。あるとき、王が狩獵に夢中になってさまようていましたとき、森林でシャーンディリヤ仙と知己になりました。この勝れた聖仙は王が王子を欲しがっていることを知り、カウシャームビーに赴いて、呪願で清

めた供物を皇后に授けました。やがて、サハスラーニーカという王子が生れ、あたかも徳が謙遜によつて光を増すように、父王はこの王子によつて一段と光輝を加えたのでありました。時経て、王子が長じますと、シヤターニーカ王は王子を太子として國政を委ね、自らは在位のままで逸樂をこととしました。すると、神々とアスラ族との間に戦が起り、天帝インドラはこの王に援軍をもとめるために使者マータリを遣わしました。王は王子と王國を首相ユガンダラと將軍スプラティーカの手に委ねて、アスラ族と戦つて彼等を滅ぼそうと、マータリとともにインドラ神の許に赴きました。王はインドラ神の面前でヤマダンシュトラなどの多くのアスラを殺しましたが、遂にその戦で戦死しました。王の屍をマータリが持ち歸りますと、皇后グイシュヌマティーは王に殉死しましたので、王位は王子サハスラーニーカに傳えられました。不思議なことに、彼が父祖傳來の獅子座に登りますと、彼の版圖の至るところで諸王の頭は重さのために自然と下つたという事です。

そこで、インドラ神はマータリを遣わして親友の子サハスラーニーカを敵に對する勝利の祝宴に招待して、天國に連れてこさせました。天國に於いて神々が愛人とともにナンダナ園で遊び戯むれているのを見まして、サハスラーニーカは自分に相應らしい妻が欲しくなり、少し悲しくなりました。すると、彼の心の中を知つて、インドラ神が彼に

「王よ、失望するではない。そなたの望は遂げさせてあげよう。何故なれば、そなたに相應らしい妻として運命づけられた女子が地上に既に生れているからだ。余が今そなたに話す一部始終



をよく聴くがよい。

嘗て余が梵天に會うためにその宮廷に赴いたことがある。そのとき、ヴィドゥーマというダラス(神の眷属)が余に隨行した。われわれが其處にいたとき、アラムブシャーというアブサラス(天の女)が梵天に會いに來た。すると、風のために彼女の衣服の裾が亂れた。彼女を見て、かのダラスは戀の虜となった。彼女もまた忽ちに彼の姿に見惚れてしまった。それを見て、蓮華生(天)は余の顔を見つめたので余はその心中を覺り、怒にまかせて彼等二人を呪詛して『汝等恥知らずめ、汝等は人間界に生れて夫婦となれ。』と、言つた。かのダラスがシアターニールカ王の子となり、月種族の裝飾たるそなたサハスラーニールカ王として生れたのである。そして、かのアブサラスはアヨーディヤールのクリタヴァアルマン王の王女ムリガーヴァティとして生れた。彼女がそなたの妻となるであらう。」

と、語りました。インドラ神のこの言葉を聴きますと、その言葉はあたかも風のようにサハスラーニールカ王の心の中に戀の焰をあおり、その焰は油を注がれたように忽ちに燃え上りました。そして、王はインドラ神から厚く款待せられた後、マータリに送られて一緒にインド神の車に乗って自分の都城にむけて出發しました。

その途中、ティロットタマーという天女が王を見染め、王に

「王さま、あなたにお話し申上げたいことがございます。暫くお待ち下さいませ。」と、話しかけました。王はムリガーヴァティのことばかり思っていましたので、その言葉が耳

に運入りませんでした。すると、ティロットタマーは羞かしめられたと思つて怒り、

「王よ、あなたがわたしの言葉も耳に入らないほどに心を奪われている女と、あなたは十年のあいだ別れて暮すがよい。」

と、王を呪詛しました。マータリはその言葉を聞きましたが、愛しい人に心を奪われていました王にはそれが聞こえませんでした。王は車に乗ってカウシャームビーに還りましたが、心はアヨーディヤールに行つていました。そして、王は戀しい思いでインドラ神から聴いたムリガーヴァティのことをユガンダラを始めとして大臣たちに話しましたが、待つことが出来なくなつて彼女の父クリタヴァアルマン王に王女を懇請するために、アヨーディヤールに使者を派遣しました。クリタヴァアルマン王は使者から使命の趣を聴きますと、喜んでそのことを皇后カラーヴァティに語りました。すると、皇后も

「王さま、ムリガーヴァティはいずれにもせよサハスラーニールカ王に嫁がさねばなりません。いつか、夢の中で、ひとりの婆羅門がわたしにそのことを話したのを覚えています。」と、話しました。そこで、大いに喜んだ王は使者にムリガーヴァティが無罪や歌などに巧みなことや並ぶ者もなく美しいことを見せました。そして、クリタヴァアルマン王は、優雅な技藝の權化のように並ぶ者なく、また月の化身のように輝かしい王女を、かのサハスラーニールカ王に與えました。サハスラーニールカ王とムリガーヴァティ姫との結婚は、お互いの美徳が互いに他を補

い合つて、あたかも學識と智慧の結合のようでありました。

さて、その後間もなく、サハスラーニールカ王の大臣たちに息子が生れました。宰相ニガンダラにはヤウガンダラーヤナという息子が生れ、將軍スブラタニールカにはルマンヴァットという息子が生れました。また、王のお伽役にはヴァサンタカという子が生れました。こうして、日を経て、ムリガーヴァティ妃の顔は青白くなり、サハスラーニールカ王の種を宿しました。王妃は自分を飽かず眺めて暮す夫に、妊娠中の異常嗜好から血の満ちた桶の中で浴みしたい、と懇願しました。王妃の望を満たせるために、有徳な王は（生類を殺してその血をとるに忍びず）臍脂などの赤色の液を桶に満しましたので、あたかも血を満したかのように見えました。王妃がその中で浴していますと、臍脂などで眞赤になっている王妃を生肉と思って、ガルダ鳥が突然に舞い下りて王妃を攫ってしまいました。鳥に何處とも知れず攫われていった王妃の後を追うかのように、サハスラーニールカ王の自制心も何處かに飛び去って、王の心は千々に亂れました。王の心は愛妃に惹きつけられていましただけに、まこと王の心も鳥のために選びられましたので、王はそのために意識を失って地上に倒れてしまいました。王がやがて意識を回復しますと、神通力でそれを知りましたマータリは直ちに天空を驅って王のところに天下ってきました。マータリは王を慰めて、ティロッタマーの呪詛とその終る時期について嘗て耳にした通りに物語った後に、去ってゆきました。王は悲しみにさいなまれて

「嗚呼、愛しい妃よ、あの性惡なティロッタマーは望を遂げたのだ。」

などと、繰り言を繰返しました。王は呪詛について一部始終を知りましたし、また大臣たちから

諫められましたので、愛妃との再會を唯一の望にして辛うじて生命を承らえました。

さて、王妃ムリガーヴァティを連れ去った鳥王は彼女が生きているのを知って東方の山に捨てましたが、これは運命のしからしめるところでありました。王妃を捨てて鳥が飛び去りますと、彼女は悲しみと恐怖におののきながら、自分が誰も頼りにする人もなく人跡未到の山の傾斜にのこされていることを知りました。森の中で唯ひとり一枚の贅物を身にまとっただけで泣いていますと、大蛇が出てきて彼女を呑もうとしました。すると、天上の丈夫が出現して蛇を殺し、未來の幸福を運命づけられているムリガーヴァティを救ったのですが、その丈夫は姿を現わした途端に姿を消してしまいました。彼女は死を蒙んで野象の前に身を投げ出しましたが、象は彼女を憐れむかのように彼女の生命を奪いませんでした。また、野獸の棲む地に身を横たえていたけれども、野獸は不思議にも彼女を害いませんでした。いや、それは少しも不思議ではありません。シヴァ神の望にして達せられないことがありましようか。

胎兒の重さに動作の鈍くなっていました若いムリガーヴァティは斷崖から身を投じようと思いました。夫のことが思い出されて、大聲をあげて泣きました。その泣聲を聞いて、その森に木の根や實を採りにきていました聖仙の息子が、悲しみの權化のように泣き悲しんでいる彼女に近づいてきました。彼はムリガーヴァティに一部始終をたずね、色々と彼女を慰めました。そして、憐愍の優しい心根の彼は王妃をジャマダグニ仙の庵に連れて行きました。彼女は其處で慰めの權化のような聖仙に會いましたが、この聖仙の威光は東方の山を照らして、あたかも昇天の太

■ 陽がその上にかかっているかのようでありました。ムリガーヴァティーが聖仙の足許にひれ伏しますと、救を求める人に憐れみ深く、神のごとき眼識をもつ聖仙は、夫との別離を嘆き悲しむ彼女に

「娘よ、そなたは此處で父の家を繼ぐべき息子を生むのだ。そなたの夫との再會は必定じや。嘆き悲しむではない。」

と語りました。ジャマダグニ仙からこのように言われますと、貞淑なムリガーヴァティーは愛する夫との再會を唯一つの頼りにして、聖仙の庵にとどまりました。こうして、日數を経て、無垢な彼女は善人との交際が善行を生ずるようになり、彼女に相應わしい立派な玉の子を生みました。すると、そのとき天から

「ウダヤナという名摩高き吉祥王が生れた。彼の子は一切のヴィディヤードラ族の君主となるであらう。」

という聲が聞こえてきました。この聲は永く忘れていました喜びをムリガーヴァティーの心に生じさせました。ウダヤナ少年は善良な性質を遊び友達としてゐるかのようになり、心身ともに勝れてこの苦行林で育つてゆきました。そして、この勇敢な少年はジャマダグニ仙から王族に相應わしい凡ての聖禮を授けられ、また學問及び射術の教授を受けました。彼の母ムリガーヴァティーは愛情からサハスラーニカの名を刻んだ腕輪を自分の腕からはずして、この子の腕にはめさせました。

あるとき、ウダヤナが鹿を逐うて歩き廻っていましたとき、森の中でシャヴァラ族の一人の男にしっかりと捕えられた蛇を見ました。彼はこの美しい蛇を憐れんで、

「わたしを喜ばすためにこの蛇を放してやつてお呉れ。」と、シャヴァラに言いました。すると、そのシャヴァラが答えました。

「旦那さま、これはわたくしの生計のもとなのでございます。わたくしは貧乏で、いつも蛇を飼らせて生計をたてております。以前に持っていました蛇が死にましたので、この大森林の中を探し廻つて漸く見つけ、呪文の力で捕えましたので、ございます。」

と言ふのを聴きまして、寛大なウダヤナは母から貰つた腕輪をシャヴァラに與え、蛇を放たせました。腕輪を受取つてシャヴァラが立ち去りますと、蛇は彼の前に進んで恭しく禮をして、

「わたしはヴァスネーミと申しまして、蛇王ヴァースキの長兄であります。あなたに助けて頂いたお禮に、絃の音美しく音階の正しいこの琵琶と、菫醬と、調れることのない花環の作り方と、永久に消えない印を額につける技術とを、お受け下さい。」

と、語りました。ウダヤナはそれらを快く受け、蛇と別れてジャマダグニ仙の庵に歸りました。彼の母は彼の行爲を喜んで、眼に甘露のような涙を浮べました。

さて、話かわつて、森を歩き廻つて、運命の命するままにウダヤナから腕環を買いましたシャヴァラは、王の名を刻んだ腕環を市場で賣ろうとして警吏に捕えられ、王廷に引き立てられました。サハスラーニカ王は悲しみながら

「お前はこの腕輪を何處で得たのだ。」

と、親ら訊問しました。シャヴァラは自分が東方の山中で蛇を捕えたことから始めて腕輪を手に入れるに至った一部始終を王に物語りました。サハスラーニカ王はシャヴァラ族から話を聴きましたけれども、愛妃の腕輪を見て、疑惑の鞆に乘ったのでした。すると、

「王よ、汝にかけられた呪詛は終った。汝の妃ムリガーヴァティは息子とともに東方の山中にあるジャマダグニ仙の庵にいます。」

と、天から聲が聞えてきましたので、あたかも雨滴が暑さに響く孔雀を悦ばすように、その聲は愛妃との別離の恰に苦惱する王を悦ばしました。

そして、思慕のためにいつもより永く感ぜられたその日も暮れて、その翌朝になりますと、サハスラーニカ王はかのシャヴァラを道案内として、愛妃と一刻も早く再會しようと、軍勢を引きつけて、東方の山のジャマダグニ仙の庵に向けて出發しました。

## 二

さて、王は長い道程を進んで、その日は或る森の湖水の岸に宿營しました。夜となって、疲れて臥床につきました王は、お伽のために隨行してました構欄師のサンガタカを召して、

「何か余の心を娛しませる物語を話して貰いたい。ムリガーヴァティの望華の顔を見る喜び

が待遠しくて、余は落着かないのだ。」

と、申しました。すると、サンガタカは王に語りました。

「陛下、何故にそのような無駄なことに心を悩まされますか。陛下にかけられた呪詛も終って、お妃さまとの御再會も間もないことではございませんか。人間は度々再會したり別離したり致します。このことについて一つの物語をお話し申し上げます。陛下、お聴き下さい。」

### 〔婆羅門シュリーダッタとムリガンカヴァティの物語〕

むかし、マールヴァにヤジュナソーマという一人の婆羅門がいました。この善良な人に二人の息子が生まれましたが、二人とも人から愛せられました。その一人はカーラネーミと言ひ、他はヴィガタバヤと呼ばれました。彼等の父が天國に行きますと、二人とも最早子供ではありませんでしたので、學問を得るためにパターボトラの都に行きました。その地で彼等が學問を成就しますと、先生のデーヴァシャルマンは學問の化身ながらの、自分の二人の娘を彼等に與えました。

さて、カーラネーミは他の家長たちが裕福なのを見て嫉妬を起し、誓盟して、燒供を捧げてシュニリー（吉祥と尊の女神）を祀りました。女神は満足せられて、肉身を現じて彼に告げられました。

「汝は多くの財産と大地を支配する息子とを得るであらう。しかし、結局汝は盗人のごとくに

殺されるであらう。汝が怒にまかせて饗供を擯げたからである。」

と宣示せられますと、ラクシミー(シュリー女 神の別名)は姿を消しました。カラネーミはその後次第に非常に裕福となりましたが、間もなく息子も生まれました。この父は望が達せられましたので、シュリーの恩寵によって授けられた(タック)息子とて、この子にシュリーダッタという名をつけました。シュリーダッタは次第に成長しましたが、婆羅門であるにも拘わらず、武器を持たせても、また闘技に於いても、この世に並ぶ者がなくなりました。

さて、カラネーミの弟のヴィガタバヤは、妻が蛇に噛まれて死んだのを悲しんで、霊場めぐりを望み、他國に行きました。

シュリーダッタは徳を知るヴァツラハ・シャクティ王によって王子ヴィクラマ・シャクティの友に選ばれました。こうして、シュリーダッタは、あたかもビーマが若いとき兇暴なドルヨードナと一緒に暮しましたように、この高慢な王子と一緒に暮すことになりました。すると、アドアンテイ生れのパーフシャリンとヴァジラムシュティという二人の刹帝利がこの婆羅門の友人になりました。また、南方生れの大臣の息子たちも、闘技でシュリーダッタに負けたのでしたが、他人の美點をよく知る人々でありましたので、自ら勸んで彼の友人となり、彼の許に寄り集りました。また、マハーハラ、ジャググラバタ、ウベーンドラバラなどという人々、更にはニシュトウラカという男も彼の友人になりました。

幾年が経ちました或るとき、シュリーダッタは王子の同伴をして、ガンジス河の岸で遊ぶため

に、友人たちを連れて出かけました。そのとき、王子の召使たちは王子を王さまにしましたが、シュリーダッタもそのとき友人たちから王さまにされました。このことが王子を怒らせ、傲慢な王子はこの婆羅門の英雄に闘技を挑みました。しかし、王子はシュリーダッタのために打負かされ、恥かしめを受けましたので、この昇天の勢の男を殺そうと心中深く決心しました。王子の意中を知りましたシュリーダッタは、驚き怖れて、友人たちと一緒に王子の側から去りました。一行が歩いていきますと、海に泳ぐ吉祥の女神さながらに、一人の女がガンジス河の真中で流れに曳きこまれていたのを見ました。そこで、シュリーダッタはパーフシャリン等六人の友人を岸に残して、その女を救おうとして河にとびこみました。彼は女の髪を捉えたのですが、その女は水中深く沈んでゆきましたので、彼も女の後を追うて水中深く潜ってゆきました。潜ってゆきますと、シュリーダッタは突然にシヴァ神の壯麗な神殿を見ました。其處には水もなければ、女もいませんでした。その素晴らしい光景を眺めると、シュリーダッタは雄牛を紋章とせられる神(シヴァ神)を恭しく禮拜し、疲れていたので美しい庭園の中でその夜を過ごしました。

その翌朝、女としての凡ゆる美點を具え、輝くはかりの美しさの化身のような彼女が、シヴァ神に拜禮するために、やって来るのを見ました。月に似た顔容の彼女は、シヴァ神を禮拜しますと、自分の宮殿に歸ってゆきました。シュリーダッタは早速彼女の後をつけてゆきますと、神の都城にも似た彼女の宮殿が見えました。彼が後をつけて来るのに驚き慌てました彼女は、いくらか彼を侮蔑するかのような態度で、急いで其處に遁入ってゆきました。美しい容姿の彼女は、彼

に一言の挨拶もしないで、建物の奥深くの椅子に數千の女に侍ずかれて坐りました。シュリーダッタも其處へ這入って、彼女の傍に坐りました。すると突然に、この淑やかな女は泣きはじめ、彼女の流す涙の滴りは彼女の兩乳房の間を流れ落ちました。それを見ますと、シュリーダッタは心の中で彼女が可愛そうになりましたので、

「貴女はどなたですか。また、何が悲しいのですか。美しい方よ。わたしはあなたの悲しみの原因を取りのぞくことが出来そうです。話して下さい。」と訊ねました。すると、彼女はためらいながら話しました。

「わたしはダイティヤ族の王バリの千人の孫娘です。わたしはその長女で、グイデユットブラバーと申します。わたくしたちの祖父はグイシュヌ神に連行され、長期に亘る監禁に處せられました。また、父もシャウリ(グイシュヌの別名)と格闘して殺されました。かの神はわたくしたちの父を殺したのち、わたくしたちを都から追い出し、わたくしたちが遁入るのを防ぐために、都城の入口を獅子に番をさせました。獅子が其處を占領していますのが、わたくしたちの心を悲しませるのです。かの獅子はヤクシャで、クベーラ(財寶の神)の呪詛によって獅子となったものです。彼にかけられた呪詛は、彼が人間に征服せられるときに終る、と、ずっと以前に豫示されています。わたくしたちが都城に歸る手段を敷設して訊ねましたとき、グイシュヌ神はこのように宣示されました。ですから、わたくしたちの敵であるあの獅子を征服して下さいませ。そうして頂こうと、勇氣ある方よ、わたしはあなたを此處までお誘い申上げたのです。あなたがあの獅子を征服

なさいましたならば、あなたは彼からムリガンカという剣を受けられ、その威力によってあなたは世界を征服なされて王者となられましょう。」

と、グイデユットブラバーから聴きましたシュリーダッタはこの冒険を受けました。その日も終って、翌朝ダイティヤ族の乙女たちに案内せられて、彼女たちの都に行きました。そして、獅子と格闘し、傲慢な彼を打負かしますと、彼は呪詛から解放されて、人間の妻になりました。彼は喜んで、呪詛を終らして呉れましたシュリーダッタに自分の■を與えてアスラの娘の悲しみを背負うて姿を消しました。シュリーダッタは、妹たちを連れたいダイティヤの娘グイデユットブラバーとともに、龍神アナンタ\*が地下から頭をもたげたような華麗な都城に這入りました。ダイティヤの娘は彼にお禮として毒を消す指環を贈りました。こうして、この若者は其處に留っていましたが、彼女を戀するに至りました。すると、それを察しました彼女は、策略を用いて彼に

「この池で水浴をなさいませ。罌の危険を防ぐために、この剣を持って水浴をなさいませ。」と申しました。シュリーダッタがその言葉に同意して池に這入りますと、彼が最初に水に飛びこんだ、あのガンジス河の岸のところに浮び上りました。手に剣と指環を持っているのを見まして、地下界から上ってききましたシュリーダッタは驚きました。アスラの娘に囁かれたことに失望しました。そこで、彼は友人たちの後を追うて、自分の家に向つて足を進めました。すると、その途中で、友人の一人のニシュトゥラカに出會いました。ニシュトゥラカは、彼に近づいて挨拶をしますと、急いで彼を一隅に連れてゆき、問われるままに、彼の身内の者の消息を語りました。

「あなたがガンジス河に飛びこんだとき、われわれは幾日もあなたを探したのですが見つからず、われわれは悲しさのあまり自分たちの頭を刎ねて死のうとしました。すると、天から『わが子たちよ、早まったことをするな。お前たちの友は生きて歸るであらう。』という聲が聞えてきまして、われわれに思い止まらせました。そこで、われわれがあなたの父上の許に行きかけますと、その途中で一人の男がやってきまして、このように語りました。『今、あなた方は都城にお遣入りになってはいけません。ヴァツラバ・シャクティ王が死にましたので、大臣たちは一致してダイクラマ・シャクティ王子を王位に即けました。彼が王位に即きますと、その翌日カーラネーミの家に行き、『お前の仲シユリーダッタは何處だ。』と、憤怒のさまも物凄くたずねました。彼が『存じません。』と、答えますと、怒った王は彼が息子を隠しているのだと邪推し、彼に盗人の汚名を着せて刺し殺してしまいました。彼の妻はそれを見て、心臓が破裂して死にました。殘酷な所行をする人々は惡事に惡事を重ねるものであります。ダイクラマ・シャクティはなおシユリーダッタを殺そうとして搜索しています。あなた方はシユリーダッタの友人ですから、早く此處を立去りなさい。』と、その人から聴きますと、バーフシャーリンたち五人は悲しみまして、相談の結果ウヰジャイニーの自分の家に歸ってゆきました。そして、わたしを隠れさせて、あなたを待たせたのです。ですから、兎に角われわれはかの地の友人のところへ行きましょう。』と、ニシュトウラカから聴きまして、シユリーダッタは兩親の死を深く悼み、劍をしげしげと眺めて、あたかもそれに復讐の望を托するかのようでありました。この勇者は時期を待つことにし、

友人たちに會うためにニシュトウラカを連れてウヰジャイニーの都城にむけて出發しました。

シユリーダッタが、ガンジス河の流れに飛びこんだときからの一部始終を、友人に話しながら歩いていきますと、道傍に泣いている一人の女を見ました。その女が

「妾はマールダアのウヰジャイニーに行きたいのですが、道に迷ったのです。」

と、言ひのを聴きまして、シユリーダッタは可愛そうに思い同行することにしました。彼とニシュトウラカとは、隣れんで同行した女と一緒に、その夜は、とある寂しい町に宿りました。その夜中に不圖眼を覺したシユリーダッタは、その女がニシュトウラカを殺して、その肉を貪り食うているのを見ました。そこで、彼は劍ふりガンカを抜いて立上りました。すると、その女はラークシャシーの怖ろしい本来の姿となりました。シユリーダッタが女の頭髮を掴んで、この夜間にうろつく奴を殺そうとしますと、その瞬間に彼女は神々しい姿となって、彼に語りました。

「妾を殺さないで下さい。大勇ある方よ、妾を離して下さい。妾はラークシャシーではありません。カウシカ仙の呪詛で、妾はこのようなものになったのです。嘗てかの仙が財寶の神の位を得ようとして苦行をしましたとき、かの神がそれを妨げるために妾を遣わされました。妾の妖艶な姿でもカウシカ仙を誘惑することが出来ませんでしたので、當惑しました妾はカウシカ仙を脅かそうとして怖ろしい姿を現しました。それを見て、かの仙は『悪い女め、お前はラークシャシーとなって人間を殺せ。』と、そのときの妾に相戀わしい呪詛をかけられました。そして、あなたが妾の髪を掴まれたときに、妾にかけられた呪詛が終る、と定められました。こうして、妾は

この嫌らしいライクシャシーの境遇となり、この都城の住民を食いつくしました。妾にかけられた呪詛を、今日漸くにしてあなたが終らせて下さったのです。ですから、今、何が贈物を受けて下さる。」

という彼女の言葉を聴きまして、シュリーダッタは悲しく彼女に言いました。

「わたしの友人を生きかえらして下さい。その他に何を望みましょう。」

「そのように致しましょう。」

と、彼女はシュリーダッタに恩寵を授けたのも、姿を消しました。すると、ニシュトウラカは身體に傷ひとつ負わずに再び生命を得て立ち上りました。悦び且つ驚嘆しました彼は、その翌朝、ニシュトウラカと一緒にその地を出發し、漸くにしてウツジャイニーに到着しました。彼の安否を氣遣っていました友人たちの心は、彼が現われましたので、あたかも空に涙りはじめた雲が（暑さに喘ぎ水を欲しがる）孔雀を喜ばすように、元氣づいたのでした。シュリーダッタがそれまでに経験しました一部始終を残らず物語りますと、バーフシャーリンは款待の禮式に則って挨拶をし、彼を自分の家に案内しました。こうして、シュリーダッタはバーフシャーリンの両親に迎えられ、自分の家にいるのと同じように安樂に、友人たちと共に其處で暮しました。

さて、春の大祭がきまして、或る日シュリーダッタは友人たちと一緒に遊園地で行われる祭の行列を見物に出かけました。そこで、彼は春光の女神の權化のような一人の娘を見かけました。彼女は勢威赫々たるビムバキ王の王女で、ムリガンカヴァティーという名でした。彼女は、彼

女を見つめて見張った眼の隙間から忍びこんだかのように、忽ちに彼の心に這入りこみました。彼女の情熱的なまなざしも愛のきざしを示して、彼を見つめたまま侍女のように行ったり来たりしました。彼女が樹の繁みに這入りますと、シュリーダッタは彼女が見えなくなりましたので、自分が何處に居るのか判らないほどに放心してしまいました。女の表情に通曉していました友人のバーフシャーリンから

「友よ、君の心はわたしによく判っている。君は自分の情熱を否定してはならない。さあ、來なさい。王女が居る場處へ行こう。」

と言われて、シュリーダッタは同意して、友人と一緒に彼女に近づきました。そのとき、

「王女さまが蛇に噛まれた。」

という叫び聲が起りましたので、シュリーダッタの心は潰れる思いでした。バーフシャーリンは直ぐ王女のお伴の廷臣のところへ行き、

「わたしの友人が毒消しの指環を持っておりますし、また呪文を知っています。」

と言いましたので、廷臣はすぐさまシュリーダッタに近づいて恭しく彼の足に禮拜して、彼を王女の傍に急いで案内しました。彼が指環を王女の指にはめて呪文を唱えますと、王女は再び息を吹きかえましたので、侍臣たちは悦んでシュリーダッタを賞讃しました。ビムバキ王がそのことを聞いて其處へ來られましたので、シュリーダッタは指環を返して貰わないで友人たちと一緒にバーフシャーリンの家に歸りました。悦ばれた王はシュリーダッタに黄金などの贈物をしまし



たが、彼はそれらをすべてバーフシャーリンの父に與えてしまいました。シュリーダッタは美しい王女のことのみを考えて思ひ憫んでいましたので、彼の友人たちはどうしてよいのか判らないほどに困りはてました。すると、バーヴァニカーという、王女の氣入り入りの友が指環を返すという口實で、シュリーダッタのところに来まして、

「勝れた御方よ、わたしの友はあなたさまが夫とられて生命を救うて下さるか、さもなくば死を選ぶと決心しています。」

と、彼に言いました。バーヴァニカーがこのように言うのを聴きますと、シュリーダッタとバーフシャーリンとその他の者たちはみなバーヴァニカーと額をあつめて相談をしました。

「われわれは策略を用いて王女を通れ出し、ひそかにこの地を去ってマトクラー\*に行つて住むことにしよう。」

と、相談をし、それを實行するために各自の爲すべきことを定めて、バーヴァニカーは歸つてゆきました。

その翌日、バーフシャーリンは三人の友人を通して、商用と伴つてマトクラーに向けて出發し、その途中の要所要所に王女を連れ去るための早馬をひそかに用意しました。シュリーダッタは夜になると、娘のある一人の女に酒を飲ませて酔いつぶし、王女の館に連れて行きました。すると、バーヴァニカーは館に燈火をともしという口實で王女の宮殿に火を放ち、ひそかに王女を外に通れ出しました。館の外で待つていましたシュリーダッタはすぐさま王女を迎えて、二人の友人と

バーヴァニカーに附添わせて、朝出發したバーフシャーリンの許に王女を送らせました。そして、酔い潰れた女は娘とともに王女の宮殿で焼死したので、世間の人々は王女がバーヴァニカーと一緒に焼け死んだと思ひました。その翌朝、シュリーダッタは以前と同じように入々の前に姿を現わしました。そして、第二夜になりますと、シュリーダッタは寶剣ムリガンカを携えて、先行した愛人の後を追いました。一生懸命に後を追いましたので、シュリーダッタはその夜の中にかかなりの距離を進み、翌朝第一刻(午前九時)の頃にはヴィンディヤ山の森に到着しました。其處まで來ますと、彼はまず惡事の豫感がしましたが、果して間もなく友人たちのすべてがバーヴァニカーとともに傷を負うて路上に倒れているのを見ました。この有様を見ましてシュリーダッタは途方に暮れましたが、彼の妻をみとめた彼等が

「今日、騎馬の大軍に襲われて掠奪された。われわれがこのような状態になると、一人の騎馬の男が怖れおのく王女を馬に乗せて連れ去ってしまった。まだ遠くへ行かないうちに、この方向に早く行きなさい。われわれのところに戻つてはいけません。君にとっては、王女は何物にも代えがたい筈だ。」

と語りました。このように友人たちから促がされて、シュリーダッタは度々友人たちの方をふりかえりながら、大急ぎで王女の後を追いました。かなりの距離を走りますと、騎馬隊を見つけました。その真中に、一人の若い武士が王女を馬に乗せて連れて行くのをみとめ、彼はゆっくりとその若い武士に近づきました。穏やかな言葉で王女を返すように要求しましたが肯んじませぬの

で、シュリーダッタはその男を馬から蹴落し、岩に叩きつけて粉碎してしまいました。その男を殺しますと、他の騎馬者たちが怒って襲いかかってきました。シュリーダッタは馬に跨ったままで大勢の者を殺しましたので、生き残った者たちはこの勇士の勇気が人間業でないことを見て、怖れて逃走しました。

シュリーダッタは王女ムリガンカヴァティと一緒に馬に乗り、友人たちを探しに引返ししましたが、少し行くと戦間に重傷を負っていた馬が■かなくなりましたので、彼と彼の妻は馬から下りました。すると、馬は倒れて、そのまま死んでしまいました。しかも、そのとき、彼の愛妻も恐怖と難儀とに疲れ果てて喉が渇いて堪えられなくなりました。シュリーダッタは彼女をその場にのこして、あちらこちらと遠くまで水を探している間に太陽は没してしまい、水を探したときには道を迷っていました。彼はチャクラヴァーカ鳥のように妻を戀い焦れてさまよいながら、その夜を森の中で過しました。夜が明けますと、王女をのこしておいた場所は馬の屍で直ぐ判りましたが、其處へ歸ってみますと王女の姿は何處にも見られませんでした。そこで、シュリーダッタは樹の頂に登ってあちらこちらと彼女を探そうと思い、うつかりと剣を地上に置いたまま樹に登りました。

そのとき、一人のシャジャアラ族の酋長がその道を通りかかり、寶劍ムリガンカが樹の根元にあるのを見まして、それを取り上げました。愛する妻の姿が見えず、歎き悲しんでいましたシュリーダッタは、その男を見て、樹から下りて妻の消息をたずねました。すると、

「あなたは此處からわたしの村に行かれるがよい。あなたの探していられるひとはきつと其處に行っていますよ。わたしが其處へ歸ったとき、この剣をあなたにお返ししましょう。」

と、シャジャアラ族の酋長が彼に勧めましたので、焦っていましたがシュリーダッタはその酋長の部下たちと一緒に、その村に行きました。其處に到着しますと、部下の者たちが、

「兎も角、疲れを回復しなさい。」

と言いましたので、疲れていましたシュリーダッタは酋長の宅に■くや否やぐっすりと寝こんでしまいました。その翌朝、彼が眼を覚ますと、自分の兩足が鎖で縛られているのを知りましたが、あたかも彼が愛する妻を取り戻そうとしてそれまでに盡した努力がすべて失敗してしまつたことを示唆しているかのようでありました。こうして、シュリーダッタは、あたかも運命の成行のように、あるときには彼に喜びを與えながらも、次の瞬間にはそれを粉碎してしまつた愛する妻に戀い焦れながら、どうすることも出来ず、其處にいました。

あるとき、モーチアニカーという侍女が來まして、彼に言葉をかけました。

「勝れた方よ、あなたは知らず識らずに、死ぬために、此處に來られたのです。酋長は用件を果すために何處かに行っていますが、歸ってくればあなたをチャンディカー女神(チャンディカーの別名)への生贄にするでしょう。そのために酋長はあなたを誑してジンディヤ山腹の森から此處へ連れてきて、すぐさま鎖で繋いでしまったのです。あなたが此處で現在食物にも着物にも不自由せられないのは、あなたを神さまに犠牲として捧げようとしているからなのです。しかし、あなた

が承知せられますならば、あなたの逃げられる一つの方便があります。と言いますのは、あの酋長にスンダリーという娘があります。彼女があなたを見て、ひどくあなたに執心なのです。わたしの友人である彼女と結婚なさいませ。そうすれば、あなたは身の安全を得られましょう。」と、モーチヤニカーから聴きますと、身體の自由になることを切望していましたシュリーダッタはその言葉に同意し、ひそかにガーンダルヴァ式の結婚でスンダリーを妻としました。スンダリーは毎夜彼の鎖をはずしました。そして、間もなく、彼女は妊娠しました。スンダリーの母はモーチヤニカーの口からすべてを聞き知りまして、娘の婿に對する愛情から自らシュリーダッタのところに行って、申しました。

「伴よ、スンダリーの父親のシュリーチャンダは怖ろしい人ですよ。女婿のそなたとて容赦はしません。だから、早く此處を立去りなさい。でも、スンダリーを忘れてはいけませんよ。」と、妻の母親は言いまして鎖を解いてくれましたので、シュリーダッタはスンダリーに彼女の父シュリーチャンダが手にいれた剣は自分のものだと言ひつけて、其處を出發しました。

シュリーダッタはムリガンガヴァティーへの思慕に頼られ、彼女の足跡を探ねようとしてまして、嘗て彼女を探しまわったあの森に再び進入してゆきました。すると、瑞兆が見られましたので、嘗て彼の馬が死に、また妻が行方不明になった地點へ行きました。そのとき、遠くから彼の方に近づいてくる獵師が見えたので、その男に會つて、鹿のような眼をしたムリガンガヴァティーの消息をたずねました。すると、獵師が

「あんたはシュリーダッタさんかね。」

と言いましたので、彼は消息をつきながら

「その不幸な男こそ、わたしなんだ。」

と言いますと、獵師が言いました。

「友よ、では、お話しよう。お聴きなさい。あなたの奥さんが泣きながらあちらこちらとあなたを探してられるのを、わたしが見たのです。おたずねして、一部始終を伺い、お慰めしたのですが、氣の毒になつて、この森からわたしの村にお連れしました。しかし、わたしの村で、布林ダ族の若い男を見て怖ろしくなり、マトウラー近くのナーガスタラ村にお連れしました。其處に住むヴィシュヴァダッタという老年の婆羅門のお宅に懇にお預けしておきました。わたしはあの方の口からあなたの名を伺い、此處へやつて來たのです。ですから、あの方を探しに、早くナーガスタラにお行きなさい。」

と、獵師から聴きますと、シュリーダッタは直ちに出發し、その翌日の夕方にナーガスタラ村に到着しました。ヴィシュヴァダッタの邸に赴き、この老婆羅門に會ひ、

「獵師がお預けしておいたわたしの妻を何卒お返し下さい。」

と申しました。この言葉を聴きますと、ヴィシュヴァダッタがシュリーダッタに語りました。

「マトウラーに、わたしの友人で、有徳な人々の敬愛する婆羅門がいます。この人はまたシュローラセーナ王の教師で、大臣ですが、この人の手にあなたの奥さんをわたしは預けました。この

村は邊鄙な土地で、あなたの奥さんをお護りすることが出来ないからです。ですから、明日其處に行きなさい。今日は此處で休息しなさい。」

と、グイシュヴァダッタから聴きますと、シュリーダッタはその夜を其處で過ごし、翌朝出發しまして、次の日にマトウラーに到着しました。長途の旅行に汚れていましたし、また疲れていましたので、シュリーダッタは都城の郊外にある朔の清らかな水で水浴をしました。すると、水中から盗人が隠しておいた衣服が出てきましたが、その襦袢に頸飾りが縫いこんで隠されていました。シュリーダッタは身のために身に災難がふりかかるとも思わず、また愛する妻に會いたい一心からその頸飾りにも気づかないで、その清物を着てマトウラーの市街に還入りました。すると、巡警たちがその衣服が盗品であることを認め、頸飾りが出てきましたので、シュリーダッタを盗人として逮捕し連行しました。盗品の衣服を着たまふ彼は、長官の前に連行され、長官はその旨を國王に報告しましたので、國王は彼に死刑を宣告しました。

そのとき、背後で太鼓を鳴らしながら刑場に連行されてゆくシュリーダッタを、ムリガンカヴァティーが遠くから見ました。彼女は驚き慌てて、彼女が逗留している首席宰相の館に歸り、宰相に

「あそこわたしの夫が處刑のために連行されています。」

と申しました。大臣は刑吏たちに處刑を止めさせ、國王に奏上してシュリーダッタを死刑から免れさせました。そして、自分の館に連れ歸りました。シュリーダッタが大臣の館に参りまして、

大臣に會いますと、自分の叔父であることが判り、

「これはまた何ということでしょう。むかし、外國に行かれたわたしの叔父上が、今日茲に、運命のしからしめるところ、勢威並ぶ者もない大臣の廟職に昇っていられますとは。」

と、大臣の足許にひれ伏しました。大臣もシュリーダッタが兄の子であることを知りまして驚き、彼を抱きしめて再會を悦び、仔細をのこらず訊ねました。そこで、シュリーダッタは叔父に父の殺されたことを始めとして、自分に振りがかった一部始終を物語りました。大臣は涙を流して悦び、ひそかに甥に言いました。

「もう決して心配するではない。伴よ、嘗てわたしは神通力によってヤタシニー<sup>\*</sup>を征服した。

彼女はわたしに息子がなにも拘わらず、五千頭の駿馬と七千萬金とを與れた。この財産は残らずそなたのものだ。」

と言いました。叔父はシュリーダッタに愛する妻ムリガンカヴァティーを渡しました。シュリーダッタは財産をえました上に、彼女と結婚しました。こうして、彼は愛するムリガンカヴァティーと、あたかも夜間に花を開く白蓮が夜に囁くたように再び結ばれて、楽しく其處に逗留しました。しかし、彼は幸福の絶頂にあっても、あたかも月の面を曇らす陰影のように、バーフーシャリーンたちに對する心配が彼の心に暗い影を投げかけていました。

ある日、叔父がシュリーダッタにひそかに

「伴よ、シュトラセーナ王に娘がある。わたしは王の命令でこの王女を結婚のためにアヴァン

ティ國に連れてゆくことになっている。だから、その口實で王女を連れ出し、彼女をそなたに與えよう。そうすれば、そなたはわたしの財産と王女に附隨する威力とをえて、嘗て吉祥の女神がそなたに約した王國を、そなたは間もなく得るであらう。」

と言いました。シュリーダッタと彼の叔父とはこのように決心し、軍勢や從者たちをとめない、王女を連れて出發しました。すると、彼等の一行がヴィンディヤ山の森林地帯に到着するやいなや、不意に盜賊の大集團が矢の雨を降らせて襲撃してきました。盜賊たちはシュリーダッタの軍勢をうち破り、財産をすべて強奪し、傷ついた彼を捕縛して自分たちの村に運行しました。そして、彼等は彼をチャンディカー女神の怖ろしい神殿に生贄にするために、其處へ行きました。彼等の打鳴らす鐃鈸の音とともに、あたかも死の神がシュリーダッタを召喚したかのようでありました。すると、そのとき、嘗て彼の妻であった酋長の娘スンドリーが、彼との間に出来た子を連れて、女神を參詣しに其處に来ていまして、彼を見ました。彼女は非常に悦んで、彼女が彼の側に近づくのをばんでいる匪賊どもを追かせました。シュリーダッタは彼女と一緒に彼女の館に遣入りました。そして、直ちに、彼は、スンドリーの父が男子なくして死に、彼女に譲られていました酋長の位に即きました。シュリーダッタはこうして嘗ての妻と再び會い、寶劍ムリガーンカを取り戻し、また盜賊にうち負かされた叔父や從者たちを救出しました。シュリーダッタは其の地でシュラセーナ王の王女とも結婚し、其の地を都城として大王の位に即きました。こうして、彼がビムバキ王とシュラセーナ王の二人の男に使節を派遣しますと、娘に對する愛情の

深い彼等は悦んで彼を親族と認めましたばかりでなく、全軍を率いて彼のところへ來ました。また、別れたままでいましたバーフジャーリンたちの友人も、そのことを知り、傷も癒え元氣になつていましたので、彼の許に來ました。そこで、この英雄は男とともに父を殺したヴィクラマダジャクティ王に軍を進め、かの王を彼の憤怒の焰に投ずる供物にしました。こうして、シュリーダッタは四方の海に圍まれた大地を統治し、別離の悲しみを克服してムリガンカヴァティとの楽しい生活を送りました。

「壁下、このように決意の堅い人々は長い別離の慘境たる海を渡って、幸福な生活を得るのであります。」

と、サンガタカから物語を聴きまして、サハスラーニカ王は愛妃を戀い焦れながら、旅の一夜を其處で過しました。そして、サハスラーニカ王は思慕の情に心を奪われ、心をいやたけに逸らせながら、その翌朝愛妃の許に向つて出發しました。數日ならずして、王は鹿さえも愛慕の戯れを慎しむというジャマダグニ仙の寂靜な庵に到着しました。そして、其處に、苦行の權化のように神聖な風貌をしたジャマダグニ仙が■ろに出迎えているのを見まして、仙に恭しく禮をしました。かの仙は王にあたかも喜びを湛えた寂靜のような王妃ムリガヴァティを、息子とともに、久しぶりに渡しました。そして、夫と妻とが互に見つめ合いましたとき、かの呪詛は解け、再會の喜悅の涙の溢れた眼に甘露が降りそそぐかようでありました。王は始めて見るわが子ウ

ダヤナを抱きしめ、あたかも喜悅に逆立つ彼の頭髮によつて二人の身體が縛り合わされたかのように、離れることが出来ませんでした。こうして、サハスラーニールカ王は王妃ムリガーヴァティを連れ、ウダヤナを伴つて、ジャマダグニ仙に別れを告げ、この静かな庵から自分の都城に向つて出發しました。鹿さへ眼に涙を湛えて苦行林の境まで見送つてきました。愛妃から別離の間の一部始終を聴き、またその間の自分の身の上を語りながら、サハスラーニールカ王は遂にアーチや旌旗に飾られた都城カウシャームビーに到着しました。王が王妃と王子と一緒に都城に進入しますと、都城の人々の鬚毛の端をあげた眼は彼等の姿をむさぼるかのようでありました。王子ウダヤナの勝れた資質を見まして、王は直ちに彼に灌頂して皇太子とし、自分の大臣の息子のヴァサンタカとルマンヅアット並びにヤウガンダラーヤナを太子の大臣としました。そのとき、天から

「これらの勝れた大臣の輔弼によつて、太子は全世界を征服すべし。」  
 という神々しい聲が聞え、同時に花の雨が降つてきました。

こうして、サハスラーニールカ王はウダヤナ太子に國政を委ね、自らは妃ムリガーヴァティと一緒に永い間望んでいました俗世の幸福を享樂しました。そして、王の耳の根元に寂靜の使者たる老齡が到着しますと、世俗的な享樂の欲望は忽ちにそれを見て、怒つて王から遠くに逃げてしまいました。サハスラーニールカ王は世界の繁榮のために臣下の敬愛して止まぬ勝れた王子ウダヤナを王位に即け、自らは大臣を連れ、愛妃を伴つて、人生の最後の大旅行のためにヒマラーヤ山

に赴きました。

### 三

こうして、ウダヤナは父から委ねられましたヴァツァ王國を得て、カウシャームビーに都を定め、臣下の者たちを正しく統御しました。しかし、漸くにして、王は國政をヤウガンダラーヤナを始め大臣たちに委ねて、自らは快樂に耽るに至りました。彼は絶えず狩獵を事とし、また嘗て龍王ヴァースキから贈られた琵琶ゴーシヤヴァティーを日夜奏でていました。また、この琵琶の絃の美しい音色に魅せられた野性の兎象を馴らしては連れ歸るのを常としていました。ヴァツァ王ウダヤナは美女の月の顔容の影を映した酒を飲みましたが、また同時に大臣たちの顔の美しい色艶を飲んでしまったのです。王は

「わが家柄と容姿にふさわしい妻は何處にも見あたらない。ヴァーサダッタという娘がわが妻たるにふさわしいと人々は言うが、如何にすれば彼女を得ることが出来ようか。」とばかり考えていました。丁度その頃、ウツジャイニのチャンダ・マハーセーナ王も考えました。

「わが娘ヴァーサダッタにふさわしい夫はこの世間にはない。ただウダヤナという王がいるが、彼はこれまでわが敵であった。如何にして彼をわが女婿とし、われに隷屬せしめようか。

だが、唯一つの方策がある。彼は森林の中を歩き廻って象を捕えるのに夢中になっており、狩獵の惡徳に耽る王者だ。この弱點を利用し、策略を用いて彼を捕縛して連れてこよう。彼は音楽に長じているから、娘を彼の弟子にしよう。そうすれば、彼の眼が娘に魅了せられることは必定だ。このようにして、彼はわが婿となり、隸屬するようになることは確かだ。他に方策はない。この手段によれば、彼をわが意に従わせられないということはない。」

と考えて、この計畫の成功のためにチャンディカー女神の神殿に赴き、女神を禮拜し、■願して、祈願しました。すると、

「王よ、そなたの希望は間もなく遂げられるであろう。」

という、姿の見えない■が聞えてきました。チャンダ・マハーセーナ王は満足して歸館し、大臣ブッダダッタにそのことについて相談をしました。

「かのヴァツァ國王ウダヤナは矜持高く、無慾恬淡、臣下の親愛厚く、威光は大である。従つて、商賈などの尋常の手段では成功は望みがたい。ともあれ、まず談判を試みてみようではないか。」

と相談しまして、使節に

「ヴァツァ國に赴いて、國王に『わが娘ヴァーサヴァダッタは貴方に音楽を習いたいと希望しています。もしわれわれに親愛の情を有せられるならば、此の地にお出で下さつて娘に音楽を教えて頂きたい。』という當方の口上を傳えよ。』

と命じ、使節をヴァツァ國に派遣しました。使節はカウシャームビーに赴いて、命ぜられた通りにヴァツァ王に傳えました。ヴァツァ王は使節の口からこの奇妙な口上を聴きますと、大臣ヤウガンダラーヤナと秘かに相談をしました。

「何故にかの王は余にかかる失敬なことを申出たのであろうか。かかる申出をした惡辣な輩の目的は果して何であらうか。」

と、ヴァツァ王から聴きまして、そのとき君主のためを思う忠誠心の厚い大宰相ヤウガンダラーヤナは王に語りました。

「陛下の不行跡の噂は世間に蔓草のように擴がっています。大王よ、これはその噂の避く苦い果實なのです。かのチャンダ・マハーセーナは陛下が情熱の虜になり易い男と考えて、寶玉のごとき娘で陛下を虜にし、自分の意志に従わせよう欲しているのです。ですから、何卒道樂を止めて頂きたいと思ひます。道樂に耽る王者は、象が穴に陥入つて捕えられるように、容易に敵に捕えられるものです。」

と、大臣からこのように言われますと、決斷力あるヴァツァ王は答禮の使節を派遣して、

「もし貴方の姫君が余の弟子たることを欲せられるならば、姫君こそこの地に來られたい。」と申し送りしました。このような返答を申し送りましたのち、ヴァツァ王は大臣たちに

「余はチャンダ・マハーセーナ王に對して軍を進め、かの王を捕縛してここに連れてこよう。」と語りました。この言葉を聴きまして、首相ヤウガンダラーヤナが王に言いました。

「陛下それは不可能であり、またあなたに相應わしくないことです。と申しますのは、かの王は威勢ある君主で、陛下の征服しうる王ではありません。如何なる故でそうであるか、その由緒をお聴き下さい。お話し申し上げます。」

### 「チャング・マハーセーナ王行狀記」

この世界に、ウツジャイニという都城があります。大地の裝飾ともいふべき都で、その白堊の殿堂の輪奐の美は神の都アマラーヴァティを笑い嘲るかのようであります。萬物の主たるハラ(シヴァ神の別名)がカイラーサ山に住む樂しみを思いどまられたときには、マハーカラーの姿で親しくこの都城に住みたものであります。むかし、この都に、王者の中で最も勝れたマヘンドラヴァルマンという王があり、この王にジャヤセーナという、父王に似た王子がありました。このジャヤセーナ王に、臂力に於いて並ぶ者がない王子マハーセーナが生まれましたが、このマハーセーナ王はまこと諸王の中の象でありました。

さて、この王は自分の王國を守護しながら考えました。

「余に相應わしい寶劍がなく、また余の家柄に相應わしい良家の生れの妻もない。」

と考えました王は、チャンディカー女神(シヴァ神の別名)の神殿に赴きまして、永い間斷食して女神を祀りました。更に、王は自分の肉を切りとって聖火に投じ、女神に供物として捧げました。

すると、満足せられた女神が姿を現わされ、

「妾は満足しや。吾子よ、この勝れたる寶劍を受取るがよい。その神威力により、そなたは敵を征服すべし。また、アスラのアンガラーカの娘にして三界一の美女なるスンドリーなる娘を、間もなく妻とすべし。そなたは此處にて劇しき(チャ)苦行を行いたれば、爾後チャング・マハーセーナと稱すべし。」

と、宣示せられました。女神は王に寶劍を授けて、姿を消しました。王は所期の希望を達成するをえて、大きな歡喜をえました。陛下、かの王は現在この寶劍とナダーギリという巨象とを所有しています。この二つは、かの王にとっては、インドラ神が神器ヴァジラと神象アイラーヴァナとを所持していられるのと同じであります。この二つの神威力に満悦したチャング・マハーセーナ王が、あるとき大森林に狩獵に出かけました。そして、一足の巨大な、怖ろしい野猪を見つけました。その野猪はあたかも夜の闇が突然に日中に塊となったかのようにでありました。王の矢は鋭かったのですが、野猪は傷も受けずに王の車を破壊して、洞穴の中に這入ってゆきました。王は怒って車を捨てて野猪の後を追ひ、弓だけを携えて、その洞穴の中に這入ってゆきました。かなりの距離を進みますと、素晴らしく勝れた巨大な都城が見られました。王は驚き怪しみながら、その都城の中にある湖水の岸に腰を下ろしました。すると、數百人の侍女を連れ一人の娘が散歩しているのをみとめました。彼女は、猛き者をもひしぐ戀の神の箭のように、愛の甘露を雨露と降らす目で、あたかも彼を繰返し浴させるかのように、靜かに彼に近づいてきました。彼



女が

「あなたはどなたですか。また、如何なる譯で、今ここにお道入りになったのですか。」と訊ねましたので、彼は事の次第をありのままに語りました。それを聴きますと、その娘は情熱的な兩眼から涙をさめざめと流し、また心からは自制心をすっかりなくしてしまいました。

「貴女はどなたですか。何故に泣くのですか。」

と、王がたずねますと、戀の神の命令に従順な彼女は、彼にこのように答えました。

「此處に這入ってきた野豬はアンガーラカというダイティヤ(アスラ)でございます。そして、王さま、妾は彼の娘でアンガーラジァティと申します。金剛石のように堅い體軀の父は、これら百人の王女を諸王の宮殿から擡つてきて、妾の侍女にしました。そして、この偉大なアスラは呪詛のためにラークシャサとなったのですが、今日は渴と疲勞とで困憊していましたので、あなたに會つてもあなたを見逃したのです。今では彼は野豬の姿を捨てて休息していますが、眼を覺ましたならば必ずやあなたに危害を加えるであります。そのような譯で、此處ではあなたに幸福は望めませぬゆえ、わたしの生命が悲しみの火に煮られるかのように思われまして、涙の雫がこのように滴り落ちるのです。」

とアンガーラジァティの言葉を聴きますと、王は彼女に言いました。

「わたしに對して貴女に愛情があるならば、わたしの言葉の通りにして下さい。あなたのお父上が眼を覺されたとき、あなたは父上の前に行つてお泣きなさい。そうなされば、父上は必ず

あなたに何故に悲しいのかと譯を訊ねるでしょう。そのとき、あなたは『もし誰かが父上を殺すようなことがあれば、わたしはどうなるのでしょうか。それを使うと、わたしは悲しいのです。』と、言いなさい。あなたがこのようになさりさえすれば、あなたにも、わたしにも、幸福が訪れて参りましょう。」

と、王から言われますと、彼女は

「そのようにしましょう。」

と、彼の言葉に同意しました。不幸な結末を怖れましたアスラ族の乙女は王を匿しました。そして睡っている父の側にゆき、かのダイティヤが眼を覺めますと、泣きはじめました。

「娘よ、そなたは何故に泣くのか。」

と、彼女に言葉をかけましたので、彼女が

「父上さま、もしも誰かがあなたを殺すようなことがありましたら、わたしはどうなりましょう。」

と、悲しみを装うて言いますと、彼は笑つて言いました。

「娘よ、誰がわたしを殺すことが出来ようか。わたしは全身金剛づくりだからね。ただわたしの左手に急所があるのだが、弓で獲られているのだ。」

と、娘を慰めました。王はひそかにこのことを残らず聴きました。

すると、かのダーナヴァ(アスラ)はそう言うやうに直ぐに立上り、水浴をしましたのち、沈黙の行を

守ってハラ神を祀りはじめました。そのとき、王は弓を番えて姿を現わし、ダイティヤに突進して戦を挑みました。沈黙の行を守っていました彼は左手を舉げて、「暫く待て」と、合闘をしました。王は勝れた射手でありましたので、忽ちにダイティヤの急所を巧で射しました。かの偉大なアスラのアンガーラカは急所を射られて、大地に倒れ、息をひきとりながら叫びました。

「喉の渴いたわたしを殺した男がわたしに供物の水を供えないときは、その男の五人の大臣を殺してくれようぞ。」

と言って、かのダイティヤは息絶えました。王はその娘アンガーラヴァティイを連れて、ウツジャイニーに歸還しました。

チャンダ・マハーセーナ王はこのダイティヤの娘と結婚し、二人の息子が生まれました。長子をゴーベーラカといい、次子をバーラカと習いました。この二人の王子が生まれましたとき、王は彼等のためにインドラ神を祀る大祭を舉行しました。すると、王を嘉したもうたヴァーサヴァ(インダの別)は夢の中で

「余の恩寵によって、汝は比類なき娘を得るであらう。」

と、王に告げました。こうして、時を経て、王に容姿すぐれた王女が生まれました。この王女は創造主がつくられた月輪の第二の新らしい姿のようでありました。すると、そのとき、

「この王女の子は、愛の神の穠化であり、ヴィディヤーダーラ族の王者たるべし。」  
という聲が天から聞えてきました。王は

「姫は余に満足せられたヴァーサヴァから授けられたのだ。」

とて、王女にヴァーサヴァダッター(ヴァーサヴァから授けられた女)という名をつけました。そして、彼女はあるたかも大海が攪拌せられない以前に大海の洞窟に坐したもうたカマラー(女神の)のように、未だ嫁がずに父の家に留っています。

「このように威力あるチャンダ・マハーセーナ王は、陛下、まこと征服することは出来ません。それに、彼の王國は進撃することの困難な土地です。しかも、陛下、かの王はあなたに娘を嫁入りさせたいと常に思っています。しかし、かの王は自尊心たかく、自分の側の勝利を願っています。でも、あなたがヴァーサヴァダッターと結婚せられることは間違いない、と、わたしは確信しています。」

と、大臣ヤウガンダラーヤナから聴きますと、ヴァツァ王は忽ちにヴァーサヴァダッターに心を奪われてしまいました。

#### 四

さて、話かわって、ヴァツァ王の答禮の使節はチャンダ・マハーセーナ王の許に赴き、ヴァツァ王の返答を伝えましたので、チャンダ・マハーセーナ王はその言葉聴いて、熟考しました。

「ともあれ、自尊心の高いヴァツァ王が此處に來ないことは必定である。と言って、娘をかの地へ遣わすことは出来ない。かかることは無思慮である。従つて、策略を用いて彼を捕えて、此處へ連れてこよう。」

と考へ、大臣たちと相談して、自らの所有する象ナダーギリに似た巨大な人工の象を造らせました。そして、その中に勇士を隠して、王はこの人工の象をヴィンディヤ山の森林の中に置きました。すると、象の捕獲の娛しみに耽るヴァツァ王の派遣していた密偵たちがそれを遠くから見えて、急遽ヴァツァ王の許に歸つて

「王さま、ヴィンディヤ山の森林を一面だけで歩き廻っている象をみつめました。この象と同じ大きさのものはこの地上では何處にも見られません。その圖體は天に達し、ヴィンディヤ山が動くようであります。」

と、報告をしました。密偵の言葉を聴きましたヴァツァ王は悦び、彼等に褒賞として十萬金を與えました。王は

「ナダーギリの好敵手たる、かの巨象を手に入れることが出来るならば、チャンダ・マハーセーナが余に服屬する者となることは確かだ。そうなれば、ヴァーサヴァダッターを喜んで余に與えよう。」

と考えながら、その夜を過しました。そして、その翌朝、象の捕獲に夢中になっていました王は、大臣たちの言葉に耳を繕さず、密偵たちを先導としてヴィンディヤ山の森林に向つて出發しまし

た。王の出發に際して、占星者たちが「王は捕縛せられるけれども、娘を獲る。」という前兆を語りましたが、王はそれにも注意を拂いませんでした。

ヴァツァ王はヴィンディヤ山の森林に到着しますと、象を愕かすことを怖れて、軍勢を遠くにとどめ、密偵のみを連れ、琵琶ゴーシャヴァティを手にして、彼自らの道樂のように奥深い大森林に這入っていききました。ヴィンディヤ山の南側の傾斜に本當の象のように見えるかの巨象を、密偵たちから指さされて、王は見ました。王はただひとりで琵琶を彈じ美しい聲で歌をうたつて、象を捕獲する方法を考えながら徐々に象に近づいてゆきました。王は音楽に夢中になっていましたし、また夜のとばりがあたりに立ちこめはじめていましたので、彼はこの野象が眞の象であることに気がつきませんでした。象は歌を樂しむかのように耳をあげて動かし、王の方に近づいた。王が近づけば後退したりして、王を遠くまで誘ひ寄せたのでした。そして、突然に、その人工の象から武裝した兵士が飛び出して、ヴァツァ王を取囲みました。王はそれを見て怒り、劍を抜いて、前にいる兵士たちと戦いましたが、背後から忍び寄った他の兵士たちのために捕えられてしまいました。これらの兵士たちは、豫め打合せておいた合圖によって現われた他の者たちと一緒に、ヴァツァ王をチャンダ・マハーセーナ王の前に連行しました。チャンダ・マハーセーナ王は親しく出迎えて、ヴァツァ王とともに都城ウツジャイニーに道入りました。

都の人々は、新らしく到着したヴァツァ王の顔は屈辱にゆがめられていましたとはいへ、彼の客妾が月輪のように眼を鎮しませるのを見まして、彼の徳を敬慕し、彼が死刑に處せられるかも

知れないと危惧し、それを阻止しようとして全市民は集つて自殺を決意しました。チャンド・マハーセーナ王は

「余はヴァツァ王を殺す意志はない。彼と同盟しようと思うのだ。」

と告げて、市民たちの動搖を防いだのでした。こうして、王は直ちに音楽を習わせるために王女ヴァーサヴァダッターをヴァツァ王に委ね、ヴァツァ王に

「王よ、この娘に音楽を教えて頂きたい。そうして下さるならば、貴方は幸福となられよう。失望せられるな。」

と語りました。ヴァツァ王が彼女を一見しますと、彼の心は彼女に對する戀情にずぶ濡れとなり、彼のまなざしから憤怒の色は消えしました。彼女の眼も心も、また、ともに彼に吸いよせられました。彼女は羞らいから眼をそらしましたけれども、心は決して彼から離れませんでした。そして、ヴァツァ王はチャンド・マハーセーナ王の音楽堂に住んで、ヴァーサヴァダッターに歌を教えました。彼の眼はいつも彼女に惹きつけられていました。彼の膝にはいつも名器ギーシャヴァティーがあり、彼の喉には歌のほまれがあり、彼の前にはヴァーサヴァダッターが居て、彼の心を悦ばせるのでした。ヴァーサヴァダッターも彼に夢中になつて、あたかも吉祥の女神が侍ずくように、専心彼にかしずき、彼は捕れの身でありましたけれども彼女は彼の傍を一時も離れませんでした。

話かわつて、ヴァツァ王の屬從者たちがカウシャームビーに還つて、王の捕えられたことが知

れ渡り、王國は動搖しました。憤激した臣下の者たちはヴァツァ王に對する愛情から直ちにウツジャイニーに四方から攻撃を加えようとした。すると、將軍ルマンヴァットが、

「チャンド・マハーセーナは偉大な王者であるから、力で征服することは出来ない。また、そのような企てはヴァツァ王の身の安全を危殆に陥れるであらう。従つて、攻撃を行うべきではない。われわれは智慧によつて目的を遂げるべきである。」

と、動搖した臣下の者たちをとどめました。冷静で決斷力のあるヤウガンダラーヤナは、王國の人々が王に愛着をもち忠誠心を抱いていることを見て、ルマンヴァットたちに語りました。

「卿等はみな憫宥することなくこの地に留まられたい。そして、この王國を護られよ。もし機至れば、各々の武勇を發揮せられたい。余はヴァサンタカのみを連れてかの地に赴き、自らの智慧によつて必ずやヴァツァ王を救出し、連れ歸るであらう。わが王はまこと冷静で決斷力のある方である故、王の智慧はあたかも稲妻の閃きが暴雨の際にひときわ輝くように、逆運に際して輝きわたるであらう。余は壁を破り、足枷を解く呪文を知っており、また必要の時に用いる隱身のための處方を知っている。」

と言つて、ヤウガンダラーヤナはルマンヴァットに臣下をゆだね、自らはヴァサンタカのみを連れてカウシャームビーを出發しました。そして、彼自身の智慧のように生命の充満し、また彼自身の策略のように錯雜して人跡未到のグインディアヤ山の大森林に遁入りました。ヤウガンダラーヤナはこの地で、ヴァツァ王の盟友で、グインディアヤ山の傾斜に住むブリンダ族の王ブリンダカ

の許に赴きました。大軍を率いたこの王を、ヴァツァ王がその地を過って歸還する際の、王の保護のための備えとした後、ヤウガンダラーヤナは更にヴァサントカを連れて遂にウッジャイニーのマハーカール焼屍場に着きました。彼等二人が其處に進入しますと、其處には、夜の闇のように黒く、腐肉の臭のするヴェーターラ(屍體に憑)が、屍を焼く薪の煙の渦巻とまごうばかりに、此處彼處に集くうていました。すると、ヨーゲーシュヴァラという鬼靈が彼に會うのを喜んで忽ちにやってきましたので、彼を仲間としました。ヤウガンダラーヤナはこの者に教えられた呪文によって、忽ちに自分の姿を變えました。彼はこの呪文によって忽ちに僂僂の老人の醜い姿となり、狂人を装いましたので、彼を見た人々に大笑いをさせました。彼はまたその呪文によってヴァサントカの姿を變えさせ、彼を血管の浮き出た、太鼓腹の、齒が突き出て醜惡な顔の男にしました。こうして、まずヴァサントカを先設させて王宮の門に行かせ、ヤウガンダラーヤナは獨り述べたような姿でウッジャイニーに進入り、鐵羅門の少年たちに圍まれて歌ったり踊ったりしながら、好奇心を起した衆人環視の中を王宮の方に赴きました。彼は其處で王の後宮の人々の好奇心を唆りました。すると、その噂は遂にヴァーサヴァダッターに聞えました。彼女は急いで侍女を遣わして、彼を音樂堂に連れてこさせました。まこと、若さは歡樂と變生兒であります。ヤウガンダラーヤナは音樂堂に進入って繋がれているヴァツァ王を見ますと、狂人を装うていながらも、涙を禁じえませんでした。彼はヴァツァ王に合圖をしましたので、彼が姿をやつていましたけれども、王は直ちに彼であることを認めました。そこで、ヤウガンダラーヤナは隱身の呪文の威力

によって、ヴァーサヴァダッターや召使の女たちに、自分の姿を見えないようにしました。しかし、王にだけは彼の姿は見えただけです。ヴァツァ王は面前に彼が見えるに拘わらず、彼女等が驚いて

「あの狂人は突然に何處かへ行ってしまった。」

と語るのを聞きまして、それが呪文の力によることを知り、ヴァーサヴァダッターを救いて

「姫よ、あちらに行つて、サラスヴァティ女神(音樂を司る女神)をお祀りする祭具を持ってきて下さい。」

と言いました。王の言葉を聽きますと、ヴァーサヴァダッターは

「そう致します。」

と答えて、侍女たちを連れてゆきました。

そこで、ヤウガンダラーヤナはヴァツァ王に近づいて、足枷を解く呪文を定められた通りに教え、またヴァーサヴァダッターの心を得るための呪文を髣髴の紋にこめて王に授けました。そして、

「陛下、ヴァサントカも此處にやつてきてまして、姿を變えて門に立っています。あの鐵羅門を近くにお召し下さい。ヴァーサヴァダッター姫があなたさまに頼るようになりますならば、わたくしの申上げるとおりに下さいませ。暫くの間は此處にお留り下さい。」

と言つて、ヤウガンダラーヤナは急いで退出しました。すると、そのとき、ヴァーサヴァダッター

「が祭具を持って引き歸してきたので、王は彼女に

「門外に婆羅門が立っています。サラスヴァティー女神を祀るために、その人を此處に招し入れて、布施しましょう。」

と語りました。ヴァーサヴァダッターは承知して、醜い姿をしたヴァサンタカを門のところから連れてこさせました。彼が案内せられてきましてヴァツァ王を見ますと、悲しみのために涙を流しました。そこで、王は祕密がばれないようにするために、

「婆羅門よ、病氣のために起ったあなたの醜い姿を余はすべて癒してあげよう。泣くのではない。余の側に留るがよい。」

と言いました。ヴァサンタカは

「王さま、有難き仕合せに存じます。」

と答えましたが、ヴァツァ王は彼の醜い姿を見て、嘔き出さずにはいられませんでした。ヴァサンタカは王の笑い出したのを見まして、王の心中を察して笑い出したので、その醜い顔は一層醜くなりました。彼が人形のように笑うのを見まして、ヴァーサヴァダッターも笑い出し、悦び樂しました。すると、この若い姫は戯れてヴァサンタカに

「婆羅門よ、あなたは如何なる學藝に通曉していられますか、話して下さい。」

と訊ねました。彼が、

「姫君、物語を話すことを存じております。」

と答えますと、彼女は

「では、物語を何か話して頂きたい。」

と言いました。そこで、ヴァサンタカは王女に滑稽さと筋の變化で非常に面白い物語を語りました。

### 「遊女ルービニカーとその情夫ローハジャンガの物語」

この世に、惡魔カンサの敵(クリシ)の生誕の地で、マトウラーという都があります。その地にルービニカーという有名な遊女がいました。彼女にはマカラ・ダムシュトラという女將の老母がありました。この母親はルービニカーの美しさに心を惹かれる若者たちの眼には毒の塊のように見えました。ある日、ルービニカーが禮拜の時間に自分の務を果すために神殿に赴きましたとき、遠方に一人の男を見ました。彼女が眉目秀麗なこの男を見ますと、母親の教えた誓めも忘れてしまうほどに、この男の姿が彼女の心に焼きつけられてしまいました。彼女は召使の女に言いつけました。

「早く行って、あの方に『今夜、あなたさまは何卒妾の宅までお出かけ下さいませ。』と、言なやう。」

「はう。」

と答えて、召使の女は行って、その旨をその男に告げました。すると、その男は暫く考えたのち、申しました。

「わたしはローハジャンガという波羅門ですが、財産はありません。金持の男だけが揚げるこの出来るルービニカーの家で、貧乏なわたしのごときはどういふ人間でしょうか。」

「わたくしの主人はあなたさまからお金は頂戴致しません。」

と言われて、ローハジャンガは

「では、そうしましょう。」

と、彼女の言葉に同意しました。

ルービニカーは召使の女の口からローハジャンガの同意したことを聴きますと、嬉しさに心を踊らせながら自宅に歸り、彼の来る道を見下ろして待っていました。間もなく、ローハジャンガが彼女の館にやって来ました。女將マカラ・ダンシュトラーは彼を見て

「この男は何處から来たのかしら。」

と、怪しました。ルービニカーは彼の来たのを見まして、立上って自ら鄭重に出迎え、嬉しさのあまり彼の頸にかじりついて、自分の肩間に案内しました。彼女はローハジャンガの手練手管に魅せられてしまい、この世に於ける他の果報を考えませんでした。こうして、彼女は他の男の相手をすることを拒み、この若者は彼女の館に安樂に彼女と暮しました。この有様を見まして、多くの遊女たちを仕込んできました母親のマカラ・ダンシュトラーも困りはて、ルービニカーに

ひそかに申しました。

「娘や、お前は何故あの金のない男にいれこむのだね。腕ききの遊女は貧乏な男を抱くくらいなら、いっそのこと死體を抱くものなんだよ。愛情なんて、遊女の方際にとって、何かって言うんだ。お前はそれを忘れたのかい。男にいれあげる遊女なんて、娘や、西に沈む太陽の赤い色のように、一時輝くだけなんだよ。遊女というものは、踊子と同じに、金儲けのために伴りの愛情を示せばいいんだよ。だから、あの貧乏人を追い出しておしまい。自分を害うようなことをするんではないよ。」

と言う母親の言葉を聞きますと、ルービニカーは怒って

「そんなことを言わないで下さい。あの方は妾にとつては生命よりも大切な愛しい方なんですから。お金は妾が澤山持っています。他のものなんか、妾は何も欲しくありません。ですから、おっかさん、そのようなことを後生ですから罷わないで下さい。」

と言いました。この言葉を聴いて憤慨しましたマカラ・ダンシュトラーは、ローハジャンガを追いつ出す手段を、色々と考えました。すると、財産をなくした浪人が武器を携えた家來の者たちを連れて、街の通を歩いてくるのを見ました。マカラ・ダンシュトラーは急いでこの男に近づき、片隅に連れて行って、言いました。

「わたしの家が貧乏な情夫に占領せられてしまったんだよ。だから、あなたが行って、その男をわたしの家から追い出すようにしておくれよ。そして、わたしの娘を抱きよ。」

「よろし。」

と、その浪人は彼女の家に這入りました。そのとき、ルービニカーは神殿に出かけていました。また、ローハジャンガもそのとき何處かに外出していましたが、浪人が館に乗りこんだ直後に、何の疑惑もたずに歸ってきました。浪人の家来たちは忽ちに彼に飛びかかって、彼の手といわず足といわず散々に蹴つたり殴つたりした上に、汚物の充ちた溝の中に彼を投げこみました。ローハジャンガは漸くのこと其處から逃げだしました。ルービニカーは歸ってきてそのことを知り、彼女は悲嘆の涙にぐれました。浪人はそれを見ておとなしく歸ってゆきました。

ローハジャンガは女將からひどい仕打ちを受けた上に、愛しい女から引裂かれた悲しみから靈場に赴いて生命を捨てようとして巡に出かけました。途中、彼の心は女將に對する怒に燃えさかり、また彼の皮膚は夏の暑い太陽に焼かれて、樹蔭に憩もうと欲しましたが樹木が見つからず、偶然に■の屍體を見つめました。それは尻から鬚が這入りこんで肉を喰いつくして皮だけが残っていたものでした。ローハジャンガは、風が吹きこんで涼しい、その中に這入りこみましたが、疲れていたので熟睡してしまいました。すると、突然に翼が四方から湧き上って、忽ちに簾つく雨が降りはじめました。そのために、象の皮は收縮して出口がなくなりました。すると、突然に、その道路に物凄い洪水がやってきましたので、象の皮はそのために押し流されてガンジス河に流れこみ、水嵩を増した河水に流されて海まで運ばれました。ガルダ族の生れの鳥がこの象の皮を見て鴈肉と思い、それを海に向うまで運んでゆきました。そして、この象の皮を嘴で引き

裂くと、人間が中にいるのを見まして、鳥は逃げてゆきました。そこで、鳥のつつく音に眼を覺ましたローハジャンガは、鳥が嘴であけた穴から外へ出ましたが、自分が海に向う側(セイビ)にいることを知って驚き、すべてが白晝夢のように思われたのでした。そのとき、彼は怖ろしいラークシャサが二人いるのを見て怖れおののきましたが、このラークシャサたちも遠くから彼を見て怖れました。嘗てラーマが海を渡ってきた彼等をうち負かしたことを思い出し、ローハジャンガがラーマと同じように海を渡ってきた人間であることを知って、心中に激しく恐怖を抱いたのです。彼等は互に相談をして、その一人が直ちにグイビシーヤナ王の許に行つて、見たまを逐一報告しました。グイビシーヤナ王はラーマの武勇を知っていましたので、この王も人間の來たのを怖れて、ラークシャサに語りました。

「おい親友、お前は直ぐ行つて『わたしたちの家に御光來を賜わりとう存じます。』と、わたしの言葉を尊重に傳えてくれ。」

「承知しました。」

と、そのラークシャサは引返し、おやおずとローハジャンガに近づき、彼に自分たちの君主の懇請の言葉を傳えました。娑羅門ローハジャンガは心の平靜を取戻し、その招待を受け入れて、ラークシャサを連れてランカー(セイロンの古名)城に這入りました。ローハジャンガは、この都城に這入つて、數多くの大夏高樓が黄金で造られているのを見て驚嘆しました。彼は王宮に這入つて、グイビシーヤナ王に會いました。



王はローハジャンガを恭しく迎えました。彼が祝福の言葉をかえしますと、王は彼に「婆羅門よ、御身は如何にしてこの土地に到着せられましたか。」と訊ねました。すると、狡猾なローハジャンガは王に語りました。

「わたしはマトウラに住むローハジャンガという婆羅門です。貧乏に悩まされて、わたしは神殿に赴き、ナラーヤナ(ヴィシ)の面前で斷食して苦行を行いました。すると、尊きハリ(ヴィシ)が夢の中で『ヴィビーシヤナ王の許に行け。彼は余の信奉者なれば、汝に財寶を贈與せん。』と、告げられました。わたしが『ヴィビーシヤナはわたしの行けないところにいます。』と言いますと、わが主は再び『行け、今日ヴィビーシヤナに會わせよう。』と告げられました。わが主からこのように告げられました途端に眼が覺めたのですが、海の向うまで来ているのが判りました。その他のことは知りません。』

と、ローハジャンガから聴きますと、ヴィビーシヤナ王は、ランカーが到達し難い土地であることを考えて、

「たしかに、この人は神通力を有している。」と考えました。

「此處に御逗留下さい。あなたに財寶を奉上げましょう。」

と、この婆羅門に言いました。王はラクシャサどもを遣わして、その地のスヴァルナ・ムーラという山からガルダ族の生れの若鳥を連れてこさせ、マトウラまで歸るローハジャンガの乗物

として馴らすために、直ちに彼に與えました。ローハジャンガはそれに乗ってランカーを飛び廻り、暫くの間ヴィビーシヤナの厚いもてなしを受けて、その地に留りました。

暫くして、ローハジャンガがマトウラに歸ろうとしますと、ヴィビーシヤナ王は彼に多くの高價な寶玉を贈りました。また、ヴィビーシヤナはマトウラに住むハリ神に對する信心から、この神に奉獻する品として、黄金造りの蓮華、梔棒、螺貝及び輪寶をローハジャンガの手に委ねました。ローハジャンガはこれらの品を残らず受取り、ヴィビーシヤナ王が彼のために用意した十萬由旬を飛びうる鳥に乗り、ランカーから飛翔し、天空を驅って海を渡り、造作なくマトウラに歸りました。彼は郊外にある人影のない僧院の天空に下り、持って歸りました夥しい財寶を其處に置いて、その鳥をつなぎました。それから彼は市場に行き、■石の一つを賣り、衣服、麝香、食物を購いました。僧院に歸って食事をして、鳥にも食べさせ、衣服、麝香、花などで身支度を整えました。夜になると、彼は螺貝、チャクラ及び棒を手にして鳥に乗り、ルービニカーの家に行きました。彼女の家のある場所をよく知っていましたので、彼は彼女の家の上空を旋回しながら、盤居している愛人に聞かせるために鈍い音をたてました。ルービニカーはその音を聞くやいなや外に出て、夜空にナラーヤナに似た姿が寶玉を擦めかせながら徘徊しているのを見ました。ローハジャンガが

「余はハリジャ、そなたのために此處に来たのだ。」

と申しますと、彼女は平伏して

「神さまに於かれましては何卒妾にお恵みを垂れさせたまえ。」

と言いました。そこで、ローハジャンガは下りて鳥をつなぎ、愛する女とともに彼女の部屋に這入りました。彼女と逢瀬を樂しむと、間もなく彼は其處を出て、來たときと同じように鳥に乗って空中を飛び去りました。翌朝になると、ルービニカーは

「妾はヴィシヌ神の妃である。人間どもとは口をきかない。」

と、沈黙の行を守っていました。彼女の母親マカラ・ダンシュトラーが

「娘や、お前は何故そのように振舞うのかい。譯をお話しよ。」

と訊ねました。執拗に訊ねますと、ルービニカーは母親との間に暮を下ろして、沈黙の原因である前夜の出来事を母親に語りました。母親はそれを聴いて内心疑いましたが、間もなく夜になるとローハジャンガが鳥に乗って来るのを見ました。翌朝になりますと、暮の内に居ますルービニカーのところに秘かに行つて、女将マカラ・ダンシュトラーは恭しく拜禮をして懇願しました。

「娘や、お前は神さまの御恵みで此の世で女神になりました。妾はお前の生みの親なのだから、お前を生んだ褒美を授けておくれ。この年老いた身體のままで天國に行けるように、神さまにお願いしておくれ。妾に恵みを垂れて下さいよ。」

と申しますと、ルービニカーは同意しまして、その夜ヴィシヌ神に變装したローハジャンガが再び來ますと、そのことを懇願しました。すると、神を裝うたローハジャンガは愛人に語りました。

「そなたの母親は悪人である。従つて、あの女を公然と天國に連れてゆくのは適當でない。今から十一日目の朝に天國の扉が開かれ、シヴァ神の眷屬のガナたちが眞先きに這入る。彼等の中にまじつて、彼等と同じ姿をして、そなたの母親は這入るのがよからう。だから、そなたは母親の頭を剃つて五條の髻髪をのこし、頸には銅鑲の頸飾をかけ、衣服を脱がせて半身に油煙を塗り、半身を赤鉛で塗り。このようにすれば、ガナに似た彼女を余は易々と天國に連れてゆくことが出来るよう。」

と言つて、ローハジャンガは少時彼女の許にいて歸りました。翌朝、ルービニカーは母親を言われた通りの姿にしました。母親自身も一心不亂に天國を願っていました。夕方になつて、ローハジャンガが再び現われますと、ルービニカーは母親を彼に委ねました。そこで、彼は裸になつて姿を變えた女將を連れて鳥に乗り、空中に素速く飛び上りました。天空に上ると、ローハジャンガは頂に輪寶を飾つた高い石柱が神殿の前に建っているのを見まして、女將をその頂のチャクラにぶらさがらせましたので、女將はあたかも彼女の意地悪い仕打に對する彼の復讐を誇示する旗のようにぶらさがりました。彼は

「余が大地に近づいて大地を幸いならしめる間、しばらく此處に居よ。」

と言つて、彼女の視界から去ってしまいました。こうして、ローハジャンガは神殿の前に人々が祭禮の行列に参加するために集つて徹夜しているのを見まして、彼等に天から聲をかけました。

「おい、世間の人々よ、今日此處で、汝等の上に、一切を滅ぼし盡すマリー（死神の）が落ちる

ぞ。されば、ハリに助けを求めよ。」

と、天上からの聲を聞きますと、其處に居ましたマトウラーの人々はみな怖れおのき、神の保護を懇願して災害を免れるように祈禱をしつづけました。ローハジャンガは天から下り、神の服裝を脱いで、人知れず彼等の間にまぎってお祈りをしていました。

柱の頂上にのこされた女將は

「神さまはまだ歸ってこられないし、妾は天國にまだ行くことが出来ない。」

と考えました。しかし、柱の頂上に最早ぶら下っていることが出来なくなり、怖ろしくなった彼女は下に居る人々に聞こえるように

「ああ、ああ、落ちる。」

と叫びました。その聲を聞きますと、神前に集った人々はマリーが天降ったのであるかと思ひ、驚き慌て

「女神さま、何卒、何卒、天降られませぬように。」

と言いました。こうして、マトウラーの人々は、若い者も、老人も、マリーが天降るのを怖れながら、漸くのことのでその夜を過しました。朝になって、擲に述べたような姿で柱の頂にぶら下っている女將を見て、市民たちも、王も、みな彼女が誰であるかが判りました。すべての人々は昨夜の恐怖もすっかり忘れて、大笑いしました。ルービニカーもその様事を聞いて其處に來ましたが、その有様を見て恥ずかしくなり、其處に居ました人々の助けをえて、直ちに自分の母親を

柱の頂上から下りました。そこで、人々は好奇心から女將に訊ねましたので、彼女は仕方なく有りのままを物語りました。王も、婆羅門も、商人たちも、すべての人々はこの事件が魔法使いか或はそれに類する人の仕業であると考へて、

「多くの色男を誑したこの女將をたぶらかした人は現われ出られよ。その人の頭に、今、此處で、賞讃の飾布をわれわれは贈ろう。」

と語りました。その言葉を聞きまして、ローハジャンガはその場に名乗りでて、問われるままに事の次第を最初からすべて物語りました。そして、彼はヴィビニシャナ王が彼に委ねた蝶貝やチャクラなどの神器を供えて、人々を驚かせました。

そこで、マトウラーの人々はみな悦んで、直ちに彼に賞讃の飾布を被らせ、また王命によってルービニカーを自由の身としました。こうして、ローハジャンガは女將の意地悪い仕打に對する怒を報復し、ランカーから持ち歸った莫大な數々の寶玉によって大金持となり、愛する女と一緒に楽しくその地で暮しました。

と、變装したジャサンタカの口から、この物語を聴きまして、驚かれたジャマツア王の側に坐っていました。ジャマツア王は非常な喜びを感じました。

## 五

さて、ヴァーサヴァダッターは次第にヴァツァ王に激しい愛情を抱くようになり、遂に父の意に逆うようになりました。そこで、ヤウガンダラーヤナが他の誰にも姿を見せないで再びヴァツァ王の側に來て、ヴァサンタカの居るところで、祕かに王に告げました。

「陛下、あなたはチャンド・マハーセーナ王のために策略で捕えられました。しかも、かの王はあなたを鄭重に待遇して、自由の身とし、娘を嫁がせようと望んでいます。ですから、われわれはヴァーサヴァダッターを攫って逃げましょう。このようにして、われわれはかの高慢な王に報復しましょう。そうすれば、世間の人々はわれわれに勇氣がないとは決して考えないでしょう。さて、陛下、かの王は王女ヴァーサヴァダッターにバドラヴァティという雌象を與えましたが、ナダーギリを除いては速さの點でこの雌象に迫いつくうるものは他にいません。しかも、ナダーギリがこの雌象を見ましても、戦を挑むことは決してありません。この雌象の御者はアーシャーダカという男ですが、わたしはこの男に澤山の財貨を與えて買収してあります。あなたは夜間に祕かにヴァーサヴァダッターを連れ、武裝して、この象に乗って此處を立去って下さい。そして、此處の象長官は象の動作に通曉していますから、何も氣づかれぬように酒で酔わしておかねばなりません。わたしは先發しまして味方のプリンダカの許に行き、かの王があなたの通過せられる

道筋を守護するように致させます。」

と言ひまして、ヤウガンダラーヤナは出發しました。

ヴァツァ王は自分のなすべきことをすべて心の奥に秘めたのでした。そして、ヴァーサヴァダッターが彼の側に來ましたとき、彼女とあれこれの打解けた話をしました後に、ヤウガンダラーヤナの語ったことを彼女に話しました。彼女は王の言葉に同意して王と同行することを決心し、アーシャーダカを呼び寄せて、象に乗る用意をさせました。そして、神殿參拜という口實で、象長官並びにすべての象使いに酒を飲ませて酔わせてしまつたのでした。こうして、夕方になって、稻妻が閃き雷鳴の轟き渡る響が天を蔽うと、アーシャーダカが象の用意を調べて引き出しました。すると、支度をしています間に、この雌象が叫び聲をあげました。象の聲に通曉する象長官がその聲を聞いて、

「象は今日六十三由旬行けるでしょう、と言っている。」

と、酔っているためにはつきり聞きとれない聲で言いました。しかし、彼は酔っていましたので、彼の心はそれが何故であるかを考えることが出来ませんでしたし、また象使いたちも酔うていたので彼の言葉さえ聞きとれません。そこで、ヴァツァ王はヤウガンダラーヤナから教えられた呪文で鎖を切断し、自分の靴をもち、ヴァーサヴァダッターが自らすすんで持つてきました剣を手にして、ヴァサンタカと一緒に雌象に乗りました。また、ヴァーサヴァダッターも、腹心の侍女カインチャナマラーと一緒に、その象に乗りました。こうして、ヴァツァ王は、象

使いのアーシャーダカを加えて五人で、夜闇にまぎれてウッジャイニーを出發し、愛情期の象が踏みしだいて出来た道を進みました。その道筋には、グイーラバーワ及びタラバタという二人の勇敢な公子が警護にあたっていました。が、グアツァ王はこの二人を殺してしまいました。こうして、アーシャーダカが鉤で驅る象に愛人とともに乗って、グアツァ王は心いさんで出發しました。

ウッジャイニーに於いては、都城の警吏が二人の衛兵の殺されているのを見まして、驚いて、夜中にも拘わらず、王に報告しました。チャンダ・マハーセーナ王は取調べて、漸くにしてグアツァ王がグアーサグアダッターを擧げて逃げたことを知りました。城内は上へ下への大騒ぎとなりました。王子バーラカがナダーギリに乗って、グアツァ王の後を追いました。グアツァ王は後を追うてきました。バーラカを逃えて矢で戦いましたが、ナダーギリはかの雌象を見ると進撃しなくなりしました。そのとき、父の所行を心にかけていました兄のゴーパーラカ王子が追うてきました。バーラカをとどめましたので、道理ある言葉を知る彼はグアツァ王を追うのを思いとどまりました。

グアツァ王は大膽に旅行を續けました。その途中、次第に夜が明けて、その日の晝頃にはグインディヤ山の森林に到着しました。王の乗った象は六十三由旬の道程を旅しましたので、渴をおぼえました。そこで、グアツァ王は妃とともに象から下りて、象に水を飲ませましたが、水が悪かったために雌象はその場で死んでしまいました。グアツァ王とグアーサグアダッターとは途方

に暮れましたが、そのとき天上から聲が聞こえてきました。

「王よ、わたしはマーヤーヴァティというグインディヤの女です。呪詛のために、長い間、雌象でいました。グアツァ王よ、今日、わたしはあなたをお助けしました。更にまた、將來生れるべきあなたの王子をお助けいたします。あなたに妃グアーサグアダッターは人間ではありません。或る理由で地上に化身した女神です。」

と、こうして、元氣づきましたグアツァ王はグアサンタカをグインディヤ山の墓地に派遣して、味方のプリンダカに自分の到着を告げさせました。自らは愛妃を連れて徒歩で旅を續けていますと、待伏せていた匪賊に取圍まれました。グアツァ王は只だけでその百五人の者をグアーサグアダッターの面前で殺しました。そのとき、盟友プリンダカがヤウガンダラーヤナと一緒に、グアサンタカに案内させて、やって来ました。ピッラ族の王プリンダカは匪賊どもを抑え、グアツァ王に平伏して、王を愛妃とともに自分の村に案内しました。グアツァ王はその夜を森の草の葉で足を傷めたグアーサグアダッターと一緒に其處で休みました。その翌朝になりました。豫めヤウガンダラーヤナからの使者で王の脱出を知りました將軍ルマンヴァットが到着しました。そして、ルマンヴァットとともに四方を廻めぐすほどの全軍も到着しましたが、そのためにグインディヤ山の森林は情伏を享樂しているかのようでありました。グアツァ王は自己の軍勢の幕営に移って、この森林でウッジャイニーからの情報待ちました。そのとき、ヤウガンダラーヤナの友人の商人がウッジャイニーから來まして、その地に留まっていたグアツァ王に次のように報告

しました。

「王さま、チャンド・マハーセーナ王はあなたさまを女婿にしたことを非常に悦ばれ、あなたさまの許に使節を派遣しました。使節は途中少し後方に宿りましたので、わたしは先廻りして、王さまに一時も早くお知らせしようと思ひ、祝かに急いで参りました。」

と、商人から聴きますと、ヴァツア王は非常に悦び、すべてをヴァーサヴァダッターに話したので、彼女も非常に喜びました。自分の肉身の者たちを振り捨てて、結婚式のことを心配していませんでした。彼女は、そのことを聞きますと、恥ずかしく思うとともに、また心の中で何とはなしに不安でした。そこで、自分の氣持を紛らせるために、側に侍坐するヴァサンタカに

「何か物語を話さない。」

と言いました。すると、賢明なヴァサンタカはそのとき美しい體の彼女が夫に對して愛情を増さずには措かないような次の物語を物語りました。

### 「貞女デーヴァスミターの物語」

この世に、タムラリプティ<sup>\*</sup>という有名な都城があります。其處にダナダッタという、非常に富裕な商人がいました。彼には息子がありませんでしたので、多くの婆羅門を集めて、恭しく彼等に

「わたしが間もなく息子をえられるようにして頂きたい。」  
と言いました。すると、婆羅門たちが彼に言いました。

「それは決して難かしいことではない。何故なれば、この世に於いて、婆羅門は聖典に定められた儀式によって一切を成就するからである。嘗て、息子を持たぬ或る王があった。この王の後宮には百五人の妃妾がいた。息子を得る供儀によってこの王にジャントウという王子が生れたが、この王子はすべての妃妾たちの眼には新月の昇天のごとくに見えた。あるとき、この兒が匍い廻っていたとき、蟻がその臀部を咬んだので、彼は慄いて大聲をあげて泣いた。そのため、後宮は大騒ぎとなり、王さえ普通の人と同じように『坊よ、坊よ。』と、叫んだ。間もなく蟻は取除かれ、王子は泣き止んだが、王は子が一人しかいないことが不幸の唯一の原因であることを苦にして、それを悲しむあまりに『余が多くの子を得る方便があるか。』と、婆羅門たちに諮問した。彼等は『王よ、この點に關して手段がある。あなたの息子を殺して、その肉を残らず聖火に捧げなさい。その臭を嗅いで、正の妃妾たちはすべてあなたの子を生むであらう。』と、答えた。その言葉を聞いて、王はすべて言われた通りにした。そして、彼は妃妾と同数の息子をえた。従つて、あなたのために、われわれは焼供によつて息子を得るをえよう。」

と、ダナダッタに物語つて、彼が布施の品をとのえますと、婆羅門たちは焼供を捧げて祭式を行いました。こうして、この商人に息子が生れました。ダハセーナと名づけられた息子は次第に大きくなりましたので、父のダナダッタは彼のために嫁を探しました。

そこで、父は息子とともに商用に名を借りて鯨鯨しに海の向うの島(セイロ)に出かけました。その地で、ダルマガブタという大商人に、娘のデーヴァスミターを息子のグハセーナの嫁に呉れるように頼みましたが、娘を熱愛していましたダルマガブタはタームラリブティイが速いことを考えて、この縁談に同意しませんでした。しかし、デーヴァスミターはそのときグハセーナに會つて、一目で彼の徳に心を惹かれ、身内の者を捨てる決心をしました。そこで、信頼する侍女を通じて彼と約束をし、夜に紛れて愛人と一緒にその島から去りました。そして、タームラリブティイに着きますと、彼等二人は結婚をしました。夫婦の心は互いに愛情の絆で結ばれて仲睦ししく暮しました。父ダナダッタが死にますと、グハセーナは商用のためにカタール・ドヴィーバに行くことを親戚の者たちから慫慂されました。しかし、そのとき、妻のデーヴァスミターは夫が旅行中に他の女にたわむれることを恐れ、嫉妬心から彼の旅行に同意しませんでした。このように、妻は彼の旅行を喜ばず、親族の者たちは催促するまでに、グハセーナは自分の義務の遂行を決心していましたものの心惑わざるをえませんでした。そこで、彼は神殿に赴き、

「神はまこと何等かの方便をわたしに示して下さいさるであらう。」

と考へて、斷食の行を行いました。デーヴァスミターもまた夫とともに戒行を行いました。すると、シヴァ神がこの夫婦の夢の中に現われ、彼等二人に赤い蓮華を與えて算示せられました。

「そなたたちはお互いにこの蓮華を持っていよ。そなたたちが別れている間に、いずれかが操を捨てることがあれば、他方の手にある蓮華が萎むであらう。そういうことがなければ、萎むこ

とはない。」

というシヴァ神の言葉を聞いて夫婦は眼を覺しましたが、お互いに手に赤い蓮華を持っているのを見まして、お互いに心の中を見たとように思いました。こうして、グハセーナは蓮華を持って出發しましたが、デーヴァスミターは家に留つて赤い蓮華をいつも眺めていました。グハセーナはカタールへ直行して、その地で諸の寶玉の賣買を始めました。彼がいつも手に握まない蓮華を持っていきますのを、その地の四人の若い商人が見て怪しみ、策略を用いて彼を彼等の家に連れてきて、酒をさせたか飲ませ、赤い蓮華について一部始終を訊ねました。彼は酔うていましたので、それを話してしまいました。そこで、四人の若い商人たちは、グハセーナが寶玉などの賣買には長い間を要すると考へ、愚者だった彼等は好奇心に驅られて彼の妻の良節をそそのかそうと思ひ、またそれに成功しようと願つて、相談して人知れずタームラリブティイに出かけました。この地に到着しました彼等は策略をめぐらしていましたが、佛教の靈場に住むヨーガカランディカーという尼僧と知合いになりました。彼等は彼女に

「尊尼よ、われわれの願があなたの援助で成就するならば、われわれはあなたに莫大な富を差上げましょう。」

と、懇に語りました。すると、彼女は

「お前さんがたは確かに此處で誰か女を欲しがっているのだね。お話しよ、望を適えさせて上げようよ。でも、わたしはお金を欲しがっているのではないのだよ。わたしの弟子にシッディ

カリリーという智慧をもつ女がいて、そのお蔭でわたしは量り知れないほどの財産を得たのだからね。」

と答えましたので、若い商人たちが

「あなたはどんなにしてお弟子のお蔭でそのような財産を得られたのですか。」  
と訊ねますと、尼僧は語りました。

「それが知りたいのなら、伴たちよ、よくお聴き。話してあげよう。」

### 「狡猾なシッディカリリーの物語」

「むかし、北方からこの土地に一人の商人がやって来た。この男が此處に逗留している間に、わたしの弟子のシッディカリリーが姿を變えて、策略を用いてこの男の家の下女になったのだ。その商人に信頼させておいて、シッディカリリーはその家から黄金の塊をみな盗み出して、夜の明けがたにこっそり脱け出した。都城を出て、追跡を恐れて急いでいるあの女を見て、太鼓を手にした一人のドムバ（賊）があの女から掠奪しようとして急いであの女の後を追うたのだ。城外の榕樹の根元に着いたとき、ドムバが近づいてくるのを見て、狡猾なシッディカリリーは訴えるように言ったんだよ。『わたしは夫と喧嘩して、死のうと思つて家を出てきたのです。だから、旦那、わたしが首をくくる繩をくくりつけて下さい。』とね。そのドムバは『この女が首をくくって死

んでも、俺が女を殺したことはない。』と考えて、其處の樹に繩をかけた。そこで、シッディカリリーは馬鹿を装うて、ドムバに言ったわけさ。『どんなにして首をくくるんですか。どうか教えて下さい。』とね。そこで、ドムバは太鼓を踏蹠にして、『こうするんだ。』と言つて、自分の頸に繩をかけた。すると、シッディカリリーはその途端に太鼓を足蹴にして毀したので、ドムバは繩にぶら下つて死んでしまった。そのとき、財産を残らず盗んで逃げたシッディカリリーを追うてきた商人が、遠くから、樹の下に彼女がいるのを見た。彼女もまた商人のやってきたのを見て、こっそりと樹に登った。樹に登つて、葉の繁みの中に身體を匿していた。下男を連れて商人が樹の下に來ると、首をくくつたドムバだけが見えて、シッディカリリーの姿は何處にも見られなかった。すると、下男の一人が『あの女は樹に登ったのでしよう。』と、樹に登った。シッディカリリーは『わたしはいつもあんたに惚れていたんですよ。あんたは此處に登つてきたのじゃないか。だから、色男さん、この財寶はあんたの意のままになるんだし、こっちへ來て抱いておくれよ。』と言つてさ、その男を抱いて、その口に接吻しながら齒でこの馬鹿者の舌を噛みきつたんだよ。この男は痛さに堪えかねて、口から血を吐き、ラッララと何か判らぬ言葉を言いながら樹から落ちた。それを見て、下男が悪魔に襲われたと思ひ、商人は怖れて伴の者たちを連れて、その場を逃げ出して自分の家に歸つてしまった。尼僧シッディカリリーも恐ろしくなつて樹から下りて、家に財産を持って歸つたのだ。わたしの弟子はこのように智慧分別のある女なんだよ。このように、伴たちよ、わたしは彼女のお蔭で財産を得たんだよ。』



と、尼僧は若い商人たちに語って、丁度そのときやってきました弟子のシッディカリに會わせました。そして、彼等に

「さて、伴たちよ、本當のことをお話しよ。お前さんがたはどの女を欲しがっているのかね。お前さんがたに早速その女を手にいれてあげようよ。」

と言いました。その言葉を聴きますと、彼等は

「デーヴァスミターという商人グハセーナの妻に會わせて貰いたい。」

と語りました。この言葉を聴きますと、尼僧のヨーガランディカーはそのように取計うことを約束し、若い商人たちを自分の家に逗留せました。彼女はそこでグハセーナの家にいる召使に食物などの贈物をして悦ばせておいて、弟子を連れて家に導入りました。そして、デーヴァスミターの私室に近づきますと、鎖に繋がれた牝犬が尼僧たちの導入るのを今までになく激しく吠えてさえぎりました。そこで、デーヴァスミターはそれを見て

「あの尼僧は何のために來たのだろうか。」

と、いぶかしく思いながらも、召使を遣わして彼女を親しく迎えて部屋に導入らせました。この性惡な尼僧は部屋に導入りますと、貞淑なデーヴァスミターに祝福の言葉を述べ、伴りの親密な態度で彼女に話しかけました。

「わたしはいつもあなたにお目にかかりたかったですのよ。今日あなたを夢の中で見ましたので、あなたにお會いしたくてたまらなくなつて、やって参りましたの。旦那さまと別れて暮し

ていらっしゃるあなたにお目にかかつて、わたしの心はとても悲しいのです。容姿も、若さも、愛する人の愛撫を受けない間に衰えてしましますからね。」

などと数々の言葉を述べて、長い間空闊を守っている貞淑なデーヴァスミターを慰めて、尼僧は別れの言葉を述べて自分の家に歸りました。

次の日、胡椒粉をまぶした肉片を持って、尼僧ヨーガランディカーは再びデーヴァスミターの家に行きました。そして、戸口にいる大にその肉片を與えますと、牝犬は胡椒のついた肉片を忽ちに食べました。すると、胡椒のために牝犬の眼から涙が流れ、鼻水が流れ出はじめました。惡者の尼僧は直ちにデーヴァスミターの部屋に導入って、■裏に出迎えました彼女の前で泣きはじめました。デーヴァスミターがその聲を聴ねますと、尼僧は咽びながら言いました。

「娘よ、部屋の外で涙を流している牝犬を御覧なさい。あれは今日わたしが前生に於いて仲間であったことを知って、涙を流しはじめたのです。ですから、可愛そうになつて、涙が流れたのです。」

と啼きまして、デーヴァスミターが部屋の外を見ますと、牝犬があたかも泣いているかのように涙を流していましたので、

「これは何という不思議なことだろう。」

と、一寸不思議に思いました。すると、尼僧が

「娘よ、前生に於いて、わたしとあの牝犬とは或る邊縁門の妻でした。そして、わたしたちの

夫は王命によって使節となつて度々遠い外國に旅行しました。夫が出かけています間、わたしは欲するままに男と交りましたので、わたしの五大と五感の聚りは享樂を紛らされるということにはなかつたのです。何故なれば、五大と五感とを適當に享樂せしめることは最高の義務と考えられているからです。ですから、娘よ、わたしは此の生に前生の思出をもつて生れてきたのです。それに反し、あの牝犬はそのとき無智なために貞操だけを守っていましたのです。その故に、彼女は牝犬の胎に墜ちて、此の世に牝犬となつて生れたのですが、それでもわたしを見て漸く前生を思い出したのです。」

と申しました。賢明なデーヴァスミターは

「どうしてこういうことが不變の正義であらうか。この人は惡だくみを企んでいるのに相違ない。」

と考えて、尼僧に

「尊尼さま、まことわたくしは長い間この義務について存じませんでした。誰か容姿勝れた男の方と會わせて下さいませ。」と申しました。すると、尼僧は

「外國から若い商人たちが來て、當地に逗留しています。その人たちをあなたのところへ連れてきましょう。」

と言つて、喜んで自分の家に歸りました。デーヴァスミターは召使の女たちに打明けて話しまし

た。

「その若い商人たちというのが誰か判らないが、惡者で、きつとわたしの夫が手にしている、あの周まぬ蓮華を見て好奇心を起し、お酒を飲んでゐる夫に仔細を訊ね、わたしを誘惑するために此處に來たのに相違ない。そして、あの悪い尼さんはその男たちに雇われたのだ。だから、急いでダットウーラの實を入れたお酒を持ってきたおくれ。それから、鐵で作った犬の足を造らせておくれ。」

と、デーヴァスミターから言われました召使の女たちは命ぜられた通りにしました。そして、デーヴァスミターの命令で、ひとりの召使の女がそのとき彼女の姿をしました。

さて、四人の若い商人たちは各自に

「自分がさきに行きたい。」

などと言いましたけれども、尼僧はその中の一人を連れて出かけました。その男に自分の弟子の衣裳を着せて、夕方になるとデーヴァスミターの家に遣入らせて、自分はひそかに脱け出して歸りました。そこで、デーヴァスミターの姿をしました召使の女が、この商人にダットウーラの實を入れた酒を飲ませました。この酒は、彼の不道德な所行と同様に、彼の意識を麻痺させてしましました。召使の女たちは彼の衣服などを脱がせて眞裸にし、しかもその頸に犬の足の烙印をつけ、夜の間に引きずり出して、汚物の充滿した溝の中に放りこみました。第五更になつて正氣を取戻しましたこの男は、自分が自らの惡行のために墜ちた阿鼻地獄にも似た溝の中に落ちこんで

いるのに気がつきました。彼は立上って身體を洗い、額の烙印をさすりながら、裸のままで尼僧の家に歸りました。彼は「自分だけが笑われたくない。」と考え、

「歸る途中で追刻に遭ったのだ。」

と、他の友だちに語り、朝になりますと、

「徹夜で飲みすぎたために頭痛がする。」

と言譯して、烙印をつけられた頭に布を巻いていました。そして、その日の夕方になりますと、他の若い商人が同じようにデーヴァスミターの家に行き、散々な目に遭いました。この男もまた裸で歸ってきました、

「石の額はあそこに置いてきたのだが、あの家を出てから追刻に取られてしまったんだ。」と語り、朝になると彼もまた頭痛を口實にして鉢巻をし、額に押された烙印をかくしていました。このようにして、若い商人たちはみな烙印をつけられて散々な目に遭いましたが、恥じて本當のことを隠していました。そして、

「あの尼もこんな目に遭うがよい。」

と考えて、自分たちが散々な目に遭ったことを尼僧に打明けないで、その地を去りました。さて、尼僧は

「わたしは約束を果たしたわい。」

と大喜びで、デーヴァスミターの家に弟子を連れて出かけました。デーヴァスミターは鄭重に迎

えて、尼僧の計らいに満足したような顔をして、ダットウーラ入の酒を持ってこさせて、尼僧に飲ませました。貞淑な妻は尼僧とその弟子とがこの酒に酔うて前後不覺になりますと、彼女等の耳と鼻とをそいで、汚物の滿ちた溝の中に投げこみました。デーヴァスミターは

「あの若い商人たちが歸って行って、夫を殺すようなことはないだろうか。」  
と思い惑って、姑のところへ行って一部始終を話しました。すると、姑は

「娘や、そなたは本當にうまくおやりだったね。でも、卒に何かよくないことが起るかも知れないよ。」

と申しましたので、■明なデーヴァスミターは

「わたしも彼地に行きまして、策略をめぐらせて夫を護ります。」

と、姑に言いました。そして、自分の召使の女たちと一緒に商人に變装し、商用を口實に乗船し、夫のいるカターハ・ドヴィーバに行きました。その地に着きました彼女は夫のグハセーナの姿を商人の中に見えました。彼女にとっては、夫の姿はまこと安堵がこの世に化身して姿を現わしたかのように見えました。グハセーナもまた男の■をしたデーヴァスミターを遠くから見まして、貪るようにその姿を眺めながら、

「愛しい妻によく似たあの商人は誰だろうか。」

と考えました。デーヴァスミターはその土地の王の許に赴いて、

「お願いの筋がございます。何卒、凡ての人を集めて下さい。」

と、願ひ出ました。王は好奇心を起して、市民を一人のこらず召集し、

「そなたの願ひとは何か。」

と、商人の妻をした彼女に申しました。そこで、デーヴァスミターが

「わたくしの四人の奴隷が逃げて、この人々の中にいます。王さまは何卒彼等をわたくしにお引渡し下さい。」

と申しましたので、王は彼女に

「市民はすべてここに集っている。だから、皆の顔を見て自分の奴隷を探し出し、連れ歸るがよい。」

と言いました。デーヴァスミターは早速に、自分の家で散々な目に遭わせたために、その時もお頭に頭布を巻いていました四人の若い商人を■まえました。すると、そのとき、其處にいました多勢の商人たちが怒って

「これらの人々は豪商の子だ。どうしてお前の奴隷などでありえよう。」

と、彼女に言いましたので、彼女は

「あなたがたがわたしの言うことをお信じになれないのでしたら、この人々の顔をお検べになつて下さい。そこに大の足の烙印をわたしは焼きつけておきましたから。」

と答えました。人々が

「よからう。」

と言って、四人の者の頭布をとり去りますと、其處に居ました人々はみな彼等の顔に大の足痕があるのを見ました。彼等は恥ずかしくなりました。王は驚いて、

「これはまた何としたことだ。」

と、デーヴァスミターに親しくたずねました。彼女が一部始終を物語りますと、皆の者は大笑いをしました。王が彼女に

「これらの者はまさしくそなたの奴隷である。」

と申しましたので、商人たちはこの四人の者を奴隷の境遇から救うために彼女に夥しい財貨を與え、また王の寶庫にも罰金を納めました。デーヴァスミターはこの財貨を受取り、また自分の夫を取戻し、皆の人々から尊敬せられて、故郷のタームラプタイーに歸りました。そして、その後二度と再び愛する夫と離れることはありませんでした。

「お妃さま、このように大家の生れの婦人は貞淑で、しかも斷乎たる行動によつて、いつも夫に仕え、他の男に眼もくれません。まこと、貞淑な婦人たちにとっては、夫は至高至上の神であるからです。」

と、旅の途中でヴァサンタカの口からこの氣高い物語を聴きました。ヴァーサヴァッターは、父の宮殿を、少し前に捨ててきたことを悔すかしく思いました。彼女の心は既に強い愛情で夫のヴァッサー王に結びつけられていましたが、改めて夫に對する信頼と愛情とが心に滿ち溢れるので

## 六

さて、ヴァツァ王がディンディア山中に逗留していましたが、チャンダ・マハーセーナ王の使節がヴァツァ王の許に到着しました。使節は到着しますと、王に敬禮して、次のように語りました。

「チャンダ・マハーセーナ王が陛下にこの口上を申し送られました。『あなたがヴァーサヴァダッターを自ら連れ去られたのはまことに好都合でした。余があなたをわが國にお連れしたのは、まことにそのためであったからです。あなたが捕われていられた間に、余が娘をあなたに嫁がせなかったのは、もしそうすればあなたがわれわれに好意を持たれないであらうと心配したからです。さて、王よ、余の娘の結婚式が正規の儀式に則って執り行われるまで、暫くの猶豫をせられたい。太子ゴーパーラカが間もなくあなたのところに参り、控に従って妹の結婚式を執り行うであります。』」

と、ヴァーサヴァダッターの父の口上をヴァツツ王に伝え、使節は更にヴァーサヴァダッターに色々のことを語りました。こうして、非常に喜びましたヴァツツ王は和みよろこぶヴァーサヴァダッターを連れて都城カウシャームビーへ歸還する決心をしました。大王は舅の家臣である使節

と盟友プリンダカとに

「卿等はゴーパーラカ太子の到着をこの地で待たれよ。太子とともに、後からカウシャームビーに來られよ。」

と語って、二人をその地にとどまらせました。こうして、雄々しき王はその翌日の朝ヴァーサヴァダッター妃と一緒に自分の都カウシャームビーに向けて出發しました。彼に従う象群はマダを滴らし、その動くさまはあたかもヴァツァ王に對する敬愛の情から彼の後を追うて動くディンディア山脈の頂に似ていました。馬の蹄や兵士の足音に轟く大地の響は、王の樂人の歌にも勝って彼を讃美するかのようでありました。軍勢の擧げる土埃は天に沖して、山が翼で天空を飛びたわむれるかとインドラ神を驚かすほどでありました。

こうして、王は二三日にして彼の國土に到着し、一夜をルマングアットの館で休息しました。

そして、その翌日、王は愛妃を伴うて、人々が顔を擧げて王の入城を待ち焦れているカウシャームビーに、久し振りに入城する悦びにひたりました。そのとき、都城はあたかも久しぶりに夫の歸宅したとき召使の女たちの手を借りて簪洗浴して裝飾品を身に飾る女のように輝き、市民はもはや憂いもなくなり、孔雀が稻妻をとまらぬ雨を喜ぶように、花嫁を伴うたヴァツァ王を仰ぎ見るのでした。都城の婦女子は高臺の端に立ちならんで、天上のガンガー河の岸に咲く黄金の蓮華さながらに、美しい顔容で空を翹めつきました。こうして、ヴァツァ王は王位の吉祥の女神の化身にも似たヴァーサヴァダッターと一緒に王宮に進入りました。そのとき、王宮にはヴァ

ツァ王に忠誠を示すために集った諸王侯が堂に滿ち、伶人の唱う歌聲に湧き立って、あたかもいま睡りからめざめたかのように輝きわたりました。

間もなく、ヴァーサヴァダッタの兄ゴーパーラカが使節とプリンダカの二人を連れて到着しました。王がゴーパーラカ太子を招じ入れますと、ヴァーサヴァダッタは喜びの眼をみはって、兄を喜悅の化身であるかのように迎えました。そのとき、彼女が兄をみつめていますと、彼女を羞かしがらせぬようにするかのうちに、彼女の兩眼に涙がにじみでてきました。父からの傳言の言葉とともに、兄に慰めはげまされ、身内の者と再會した今となって、彼女は此の世の望は滿されたと思うのでした。そして、その翌日、ゴーパーラカは心こめてヴァツァ王と妹の結婚の式典を旋に従って舉行し、ヴァツァ王は愛の墓草に新しく萌えてた美しい若芽のようなヴァーサヴァダッタの手をとりました。彼女も愛する夫の手を握る大きな喜びに眼をとじ、喜びにおののく全身は汗もしとどに身の毛をよだてていました。そのときの彼女は、花の弓を持つ神(總の神)に、喜びの困惑という風と水の矢で、絶え間なく射られているかのようにありました。彼女が聖火を右邊しましたとき、彼女の眼は煙のために赤くなりましたが、そのさまはあたかも酒と蜜とを飲みくらべて酔うているかのようでありました。そのとき、王庫はゴーパーラカが持参した寶玉と諸王の贈った慶祝の品で溢れ、ヴァツァ王は眞に王者中の王者となりました。結婚式が終りますと、花婿と花嫁の二人は人々の前に姿を現わし、その後自分たちの部屋に引きとりました。

さてヴァツァ王はこの目出度い日にゴーパーラカとプリンダカの兩人に寶冠などを贈って敬意を表しました。また、諸王侯や市民たちに適當に敬意を表することを大臣ヤウガンダラーヤナと將軍ルマンガットに委ねました。そこで、ヤウガンダラーヤナがルマンガットに相談しました。

「王はわれわれに離かしい仕事をまかせられた。世間の人々の心は把えがたい。われわれはこの服屬した人々をのこらず十分に慰めねばならない。」と語って、ヤウガンダラーヤナはルマンガットと一緒にヴァツァ王の祝典のこの當日に集って

きました人々にそれぞれ敬意を表しました。彼等兩人は王侯たちを十分に満足させましたので、王侯たちはみなそれぞれに

「この二人は余のみに傾倒している。」

と考えたほどでした。ヴァツァ王はこの兩人とヴァサンタカに親しく衣服、香油、裝飾品を贈り、村落を下賜して、彼等の勞を犒いました。

さて、結婚式の祝典を舉行して、ヴァーサヴァダッタと正式に結ばれましたヴァツァ王は彼の願望が滿たされたと考えました。二人の愛情は長い憧れの後に花が開いただけに深く、彼等の心はさながらいつも夜間には雌雄互いに離れて嘆き慰しむといわれるチャクラヴァーカ鳥が夜の明け方に抱く思にも似ていました。夫婦の間がなじめばなじむほど彼等の愛情はいやましに新らしくされるかのようにありました。そこで、ゴーパーラカは彼の結婚式の準備をしました父王が

らの命で、またヴァツァ王も怒悪しましたので歸途につきました。

さて、暫くして、ヴァツァ王は嘗て關係のあったヴィラターという後宮の侍女をひそかに寵愛しました。あるとき、王は誤って王妃を呼ぶのにこの女の名で呼びましたが、彼は王妃の足に纏って彼女をなだめ、彼女の涙を瀧がれて幸運という副王の位を得ました。また、王はバンドウマティーという王女ともひそかに通じたのでした。この王女はゴーパーラカが臂力に物言わせて奪い去り、贈物として王妃に贈った女でした。王妃はその名をマンジュリカーと改めて、美の大海から現われたラクシュミー(美の女神)の化身のような彼女を人の眼から隠していたのでした。王はヴァサンタカと一緒に散歩をしていましたときに彼女をみとめ、遊苑の中の墓に蔽われた四阿でガンダルヴァ式によってひそかに通じたのでありました。木蔭にかくれていましたヴァーサダグダッターはそれを見て怒り、ヴァサンタカを連行させて捕縛しました。そこで、王は王妃の親友で、彼女の父の宮廷から随行してきていましたサームクリティヤーヤニーという尼僧に頼ってとりなして貰いました。彼女が王妃をなだめましたので王妃も許し、バンドウマティーを王の妃妾の一人にしました。貞淑な婦人の心はまことに優しいからです。そこで、王妃はヴァサンタカの縄を解きました。彼は王妃の前に伺候して、笑いながら彼女に

「王妃さま、バンドウマティーはなるほどあなたさまのお心を損じましたけれど、わたしはあなたさまに何をしましたでしょうか。あなたさまは毒蛇に憤慨せられて、無毒の水蛇を殺すというものです。」

と言いましたので、王妃は好奇心を起して、

「その比喩をわたしに説明して頂きたい。」

と、ヴァサンタカに求めましたので、彼は言葉をつづけて、次の物語をしました。

### 「毒蛇に憤慨して無毒の水蛇を殺そうとしたルルの物語」

むかし、ルルという聖仙の子が思ひのままに隣國を遍歴していましたとき、素暗らしく美しい娘を見ました。彼女は天女メーナカーとグイディヤーダラ族の一人の男との間に生れた娘で、ストウラケーシャ仙が自分の隠棲處で育てたのでした。彼女はブラマドゥジャラーといい、ルルは彼女を一目見て彼女に心を奪われてしまいましたので、ストウラケーシャ仙の許に赴いて彼女との結婚を懇願しました。ストウラケーシャはこの娘を彼と婚約させました。そして、結婚式が間近にせまりましたとき、突然に彼女を毒蛇が噛みました。ルルは絶望しましたが、そのとき彼は

「婆羅門よ、壽命の終りたる彼女に汝の壽命の半分を與えて、彼女を生きかえらせよ。」

という天上の聲を聞きました。この言葉を聞きますと、彼は彼女に自分の壽命の半分を與え、彼女が蘇生しますと、直ちに彼女と結婚しました。そこで、蛇に對して怒をもちましたルルはいつも蛇を見るたびに

「こいつらがわたしの妻を喰んだのだ。」

と、どの蛇も殺したのでした。あるとき、彼が無毒の水蛇を殺そうとしますと、その水蛇は人間の言葉で彼に申しました。

「婆羅門よ、毒蛇に憤慨しているあなたが何故に無毒の水蛇を殺されるのですか。あなたの奥さんを咬んだのは毒蛇で、毒蛇と水蛇とは別種です。彼等はすべて有毒ですが、水蛇は無毒なのです。」

この言葉を聞きまして、彼がその返事に

「友よ、あなたは一體誰ですか。」

と言いますと、その水蛇は

「婆羅門よ、わたしは呪詛のためにこの境遇に墜された聖仙です。わたしにかけられたこの呪詛はあなたと話をするとき終ることになっていました。」

と言って、姿を消しました。その後、ルルは決して水蛇を殺しませんでした。

「王妃さま、わたしが諭え話で『あなたさまは毒蛇に憤慨せられて無毒の水蛇を殺すというものです。』と申上げたのはこのことなのです。」

ダフサンタカがこのように機智と諧謔に富んだ言葉を述べおわりますと、夫の側にいましたジャアサヴァダッターは彼に満足しました。好色なジャツァ國王ウダヤナはこのようにダフサン

タカが得意とする数々の面白く楽しい物語を用いて、王妃が怒りましたときには、いつも彼女の足許にひれ伏しながら、彼女の心を和げたのでした。この幸福な王の舌は美酒の香味をいつも味わい、彼の耳は琵琶の美しい音色をいつも楽しみ、彼の眼は愛妃の顔を絶えず眺めていました。

## 七

このようにして、ジャアサヴァダッター妃をえて、かのジャツァ王は漸く彼女との愛慾に溺れるようになりました。そして、國家の重寶は夜となく盡となく宰相ヤウガンダラーヤナと將軍ルマングアットを夜間に自邸に招いて、言いました。

「わがジャツァ王はバーンダヴァ族の出である。そして、全世界と都城ハステイナー・ブラとは代々世襲によってその領有したもうたところである。しかるに、王は征服を望みたまわず、これらの凡てを捨て去られ、かくて領土は世界の片隅に限られるに至った。王は女と酒と狩獵にのみ心を奪われて、王國の經營に關する凡てをわれわれに委ねられている。われわれは、われわれの存によって、王が世襲の權利を有せられる全世界を領有せられるように畫策すべきである。何となれば、われわれがこのように取りはからうとき、われわれは忠誠のまことを致し、宰相たるの實務を果すことにならう。萬事は智力によって成就せられる。まず、こういう話を聴かれ



【王の危急を救うた賢明な醫師の物語】

昔、マハーセーナという王があった。そして、この王は遙かに威勢のある他王から奪せられた。そのとき、大臣たちは集って、王の治績をまもるために王を脱いてその敵に貢物を贈らせた。しかし、王は貢物を贈った後、

「どうして自分は敵に屈服したのか」

と考えて、非常に心を悩ました。そして、この王はこの心痛のために體內に膿瘍が生ずるに至り、しかもこの膿瘍によって衰弱をきたして、まさに瀕死の状態となった。そのとき、一人の賢明な醫師がこの病は薬によっては治療しえられないと考えて、王にいつわって

「王さま、お妃さまが亡くなられました。」

と告げた。王はこの言葉をきくと急に卒倒してしまった。その衝動が非常に激しかったので、膿瘍は自然と潰えた。かくて、病の癒えた王は再び敵を征服して、妃とともに彼の冀っていた幸福をたのしんだ。

「この醫師がかく機智によって王のために計ったように、われわれも王のために計ろう。王の

ために、われわれは世界を征服しよう。さて、この場合、われわれの唯一の敵はマガダ國王プラディヨータである。何となれば、彼は常にわれわれの背後を襲う敵である。そこで、われわれはかの王が掌中の寶といしむ王女パドマーヴァティー姫をわれわれのグアツァ王の妃に懇請しよう。そして、計略を廻らして、われわれはグァーサヴァダッターを何處かに隠し、宮殿に火を放って、お妃は焼死したと諸方に言いふらそう。そうしなければ、マガダ王は姫をわが王に嫁がせないからである。と言うのは、嘗て私がかの王にそのように懇請したとき、彼は『私は娘を自分自身よりも愛している故に、グァツァ王には嫁がせない。それに、グァツァ王はグァーサヴァダッターに愛着しているから』と、答えた。それに、お妃が生きていられるかぎり、グァツァ王は他の誰とも結婚せられないであらう。しかし、お妃が焼死せられたという噂がひろがれば、萬事うまく運ぶであらう。そして、パドマーヴァティー姫がえられるならば、マガダ王はわが姻戚となり、背後を脅かすこともなくなり、そしてわが同盟國となる。かくして、われわれは東方の征服に軍を進め、更にその他の方面に進出することが出来よう。このようにして、グァツァ王のために全土を覇ちえよう。われわれが努力しさえすれば、王は嘗て天上の聲が宣べたとおりに世界を統治するに至るであらう。」

大宰相ヤウガンダラーヤナからこの言葉をききますと、ルマンジャットはその計畫が餘りにも向うみずなのを怖れて、彼に言いました。

「パドマーヴァティー姫をうるために計略をめぐらすとしても、それが他日われわれの破滅と

なるかも知れぬ。今の場合、こういう話がある。聴きなさい。」

〔偽善者であつた苦行者の物語〕

ガンジス河の岸に、マールカンディカー<sup>\*</sup>という都市がある。その都市に、むかし、無言の戒行をまもる或る苦行者がいた。彼は数多くの弟子に取巻かれて、神殿の境内にある庵室に住み、乞食して暮らしていた。あるとき、食物を乞うために或る商人の家に這入っていった。そのとき、彼は施しの食物を持って出てきた美しい娘を見た。この悪者はこの世にも稀な美しい娘を見ると、途端に情慾の虜となつて、思わず「ハー、ハー、アー」と叫んだ。その聲を主人の商人が聞いた。この苦行者はその施物を受取ると、自分の住居にかえつていったが、商人は驚いてひそかに彼のところに行つて、

「何故、今日、あなたは突然に無言の戒行を捨てて、ものを言つたのか。」と尋ねた。その言葉をきくと、その苦行者はかの商人にこのように答えた。

「貴方の娘さんには不吉の相が現われている。貴方が娘さんを嫁がされるならば、貴方は必ずや妻子ともども破滅するであらう。貴方は私の熱烈な信者なので、私は娘さんを見て吃驚したのです。それで、貴方のために私は無言の行を破つて、あの様に言つたのです。ですから、貴方は娘さんを夜間に籠に入れ、籠の上には燈火を置いてガンジス河に流しなさい。」

商人は「では、そう致します。」と云つて家に歸り、恐怖の念から夜になると萬事言われたとおりにした。まこと、臆病というものは思慮なるものである。

さて、苦行者はその頃自分の弟子たちに

「ガンジス河へ行け。そして、河中を流れているものを探せ。上側に燈火の置いてある籠を見つけたならば、それを祕かに此處に運べ。若しお前たちが籠の中に聲がするのを聞いても、決して開けてはならない。」

と言いつけた。彼等は「そう致します。」と云つて出かけたが、彼等がガンジス河に行き着かないうちに、或る王子がたまたま水浴をするためにその河に行つた。商人が投げこんだ籠を、その上に燈火があつたので彼は見つけ、従者にそれを引き上げさせ、好奇心に驅られて直ぐに開いて見た。そして、その中にあの心を魅惑するような美しい娘がいるのを見て、彼はすぐさま彼女とガールズ式の結婚をした。しかも、彼は籠の中に怖ろしい狼を入れ、以前の通りにその上に燈火を置いてガンジス河に流した。

さて、王子がこの寶石のような娘を連れて立去ると、かの苦行者の弟子たちが籠を探しにやつて來た。彼等は籠を見つけて引き上げ、それを庵室に持つて歸つた。すると、苦行者は喜んで、彼等に

「私はこれを階上に持つて上り、獨りで呪いを行ひゆえ、お前たちは今夜は靜かに寝むがよい。」

と語った。彼はこう言つて、その籠を座の階上にかけて上り、あの商人の娘を見ようとしてそれを開いた。すると、彼の不倫な行爲の報復とも言ふべき怖ろしい姿の狼が飛びだしてきて、彼に跳びかかり、あたかも熟練した刑吏が罪人の鼻や耳を削ぐように、齒で彼の鼻をくいぎり、爪で彼の耳を引きちぎった。散々な目に遭つた苦行者は階下に轉げ落ちた。彼の弟子たちは彼を見て、笑いをおさえることが出来なかつた。そして、翌朝、その凡てを知つて、町の人は皆嘲り笑つた。かの商人は大いに喜んだが、彼にもまして彼の娘は好い夫をえてうれしかった。

「このように、この苦行者は自ら嘲笑を招いたが、われわれも策略をめぐらして、しかも失敗したときには必ずや嘲けられよう。それに、王とヴァーサヴァッターを引き離すことは極めて困難である。」

ルマンヴァットがこのように言うのを聞いて、ヤウガンダラーヤナは答えました。

「このようにするのでなければ、われわれの計畫は決して成就するものではない。しかも、われわれがこの計畫を■行しないならば、逸樂に耽るわが王は現在の領土をさえも失うであろう。また、われわれが今日までにかちえた政治家としての名聲も汚されるであろうし、われわれは主君に忠誠を盡す人間とは言われなくなるであろう。何故なれば、王が自ら經綸して成功したときには大臣は王の智慧の道具と考えられて、その成功・不成功に特に責任を問われることはないであろうが、王が大臣に經綸を委ねるときには、その目的を成就させるのは大臣の智謀による

ものであり、大臣に手腕のないときには王者の繁榮は永遠に去つてしまふからである。しかし、若し貴方がお妃の父君チャンダ・マハーセーナ王を怖れているとすれば、かの王も、太子も、またお妃も、『わたしの言葉に従う』と仰せられている。」

大膽不敵な人々の中でも最も豪膽なヤウガンダラーヤナはこのように言いましたが、ルマンヴァットはなおも心中に不測の失敗を怖れて、彼に再び言いました。

「聰明な貴公子でさえも愛しい女との別離には心を傷ませるものである。ましてわがヴァツァ王に於いてはなおさらのことである。こんな話がある。聴きなさい。」

### 〔戀の焰に焼かれて死んだデーヴァセーナ王の物語〕

むかし、デーヴァセーナという王がいた。聰明のきこえ高い王で、シュラーグアステイ\*が彼の都城であつた。その都に非常に裕福な一人の商人がいて、彼にまことならぶ者のない程に美しい娘が生れた。この娘はウシマーディニー\*という名で知られるに至つたが、それはこの娘の容色を見た人は誰でも氣が觸れたからである。父の商人は

「わたしは娘を王さまに話さないで誰にも嫁がせてはならない。さもなくば、王さまは激怒せられるだろう。」

と考へて、デーヴァセーナ王のところへ伺候して

「王さま、わたしに賛といしむ娘があります。若しお目にとまりますならば、何卒お召し下さい。」

と申上げた。王はその言葉を聞くと、信任深い大臣である婆羅門たちに

「行って、その娘が吉祥の相を有するか否かをしらべよ。」

と命じた。婆羅門たちは

「御意。」

と答え、行って商人の娘を見た。ウンマーディニーを見ると、彼等は途端に惚れこみ、全く惱殺されてしまった。

「王がこの娘を召されるならば、王はこの娘に溺れて國事を忘れられるであらう。そして、萬事はお終いだ。」

と、我にかえった婆羅門たちは互いに相談をして

「あの娘は不吉の相を有しています。」

と、偽りの復命をした。

かくて、商人はウンマーディニーが王からことわられたので、王に對して心中に憤りを抱くに至った彼女を王の將軍に嫁がせた。

さて、ある日、王が邸前の道を通るのを知って、彼女は邸宅の露臺に上って、自分の容色を王に誇示した。王は愛の神(カ)が用いる世間惱殺の薬にも似た彼女を見た瞬間に、精神が錯亂し

たかのように思われた。王は宮殿に還御して、彼女が嘗て召さなかつた娘であることを知り、悲しみ嘆き、遂に激しい熱病にかかった。彼女の夫である將軍は王に

「彼女は奴隷です。他人の正妻ではありません。お召しになられるのでありますれば、私はあの女を捨てて神殿に仕えさせます。そのとき、王さまには御意のままになされませ。」

と申上げて、王を熱心に慰めたが、王はこのように答えた。  
「余は人妻を召しはせぬ。若し汝があつた女を捨ててなれば、汝は人としての道を踏みはずすであらう。そして、汝は余の手によって所罰せられよう。」

この言葉を聞いて、他の大臣たちは一瞬も言えなかつた。かの王は戀の焰に燒き盡されて次第に弱り、遂に死んで仕舞つた。

「この王は心猛き方ではあつたが、ウンマーディニーを失つて、このように亡くなった。ウァーサヴァッターを失つたとしたら、ヴァツァ王はどんなことになるであらうか。」

ルマンヴァットからこの言葉を聞きますと、ヤウガンダラーヤナは再び言いました。

「國事に専念する王者には、悲痛は堪ええられるものである。ラーヴァナを仆すために干戈に訴えねばならなくなつて、神々がラーマに凡てを委ねたとき、彼は妃シターとの別離の悲しみを堪えたではないか。」

この言葉を聞きますと、ルマンヴァットは再び言いました。

「ラーマのごときはまこと神である。彼等の心は一切に堪えることが出来る。併し、人間に与っては堪えられないことである。」

と言って、ルマンヴァットは心配のほどを顔に浮ばせるのでした。しかし、冷静な決断力の海にも驚くべき賢明なヤウガンダラーヤナは言いました。

「私は凡ての計畫を取計った。王者の経験にはこのような手段も必要である。こういう話もききなさい。」

# 「大臣の智謀によって國を回復したブニヤセーナ王の物語」

むかし、ウッジャイニーにブニヤセーナという王があった。あるとき、有力な他王に襲撃せられた。賢明な彼の大臣たちは敵のうち破りたいことを知って、ブニヤセーナ王をかくまひ、偽って、王が死去したという噂を諸方に擴がらせ、しかも他人の屍を王者に相應らしい儀式を営んで焼いた。そして、使者の口を通じて、「われわれは現在王を有していないから、来てわれわれの王となって貰いたい。」と、敵王に申入れた。敵王は喜んで、それに同意した。そこで、彼等は集って、兵をあつめ、敵王の陣を次々にうち破った。敵軍を滅すと、彼等はブニヤセーナ王を連れ出してきて勢力を回復し、敵王を殺したのである。

「このようなことは王事には屬し見られることである。従つて、われわれは王妃が焼死したという噂を擴らせて、堅い決心をもつてこのことを斷行しよう。」

ヤウガンダラーヤナからこの言葉を聞きますと、ルマンヴァットも遂に決心して

「それではお妃の敬愛せられる兄王子ゴーパーラカに使をだして来て貰つて相談し、彼と萬事手落なく手筈をきめよう。」

と言いましたので、ヤウガンダラーヤナは

「そう、しょう。」

と答えました。そして、ルマンヴァットが信賴せられて一切を取計うべき旨の決定をしました。

その翌日、この善謀の二人の大臣は、ヴァーサヴァダッターが會いたがっているという口實で、ゴーパーラカを連れてくるために使をだしました。ゴーパーラカは丁度急用のためにそれ以前にウッジャイニーを出發してしましたので、使者の願を聴くとすぐ到着しました。彼は二人の大臣にとつてあたかも待ち設けていた祭典の化身のように思われました。王子が到着しましたその日の夜、ヤウガンダラーヤナはルマンヴァットと一緒にゴーパーラカを自分の邸に招いて、ルマンヴァットと豫め相談していた自分の計畫を話しました。ゴーパーラカはそれが妹に悲しみを與えることは知っていましたが、ヴァッア王のためを思つて、その計畫に賛成しました。まこと、勝れた人々の言葉は實行すべきことであるからです。

そのとき、ルマンヴァットが

「これで萬事うまく相談はまとまったが、お妃さまが焼死されたと聞いてヴァツア王は生命を捨てようと思われよう。それをどうしてとめるか、よく考えねばなるまい。勝れた手段が好都合に運ばれるとしても、國家統治の基本策は不幸を未然に回避することである。」

と言いました。すると、萬端に至るまで考慮していましたがウガンダラーヤナは

「その點に心配はない。ヴァーサヴァダッターさまはゴーパーラカ太子の妹姫で、太子にとっては御自分の命よりも愛しい方である。ヴァーサヴァダッターさまが焼死せられたと聞かれても、太子がさほど悲しんでいられないのを見られたならば、ヴァツア王は『いずれにせよ、妃は生きている』とお察しになって、平靜になられるであろう。それに、王は氣性勝れた方である。バドマーヴァティー姫との結婚がすみやかに行われよう。そのときはお妃をすぐにお連れすることが出来よう。」

と答えましたので、彼等三人は更に相談をしました。

「ラーヴァーナカはマガダ國に近い國境の土地であるから、われわれは王と王妃と一緒に其處に行くという策をとろう。それに、あの土地は狩獵に好適の土地であるから、王は獵り宮殿を離れられるであろう。そのとき内宮に火を放って、計畫通りに事を運ぼう。そして、計略を用いてお妃をバドマーヴァティー姫の宮殿に連れてゆき、バドマーヴァティー姫をお妃が置かれている間の貞節の證人にしよう。」

その夜彼等はこのように相談をしまして、翌朝ヤウガンダラーヤナを先頭にして王宮に参入し

ました。そのとき、ルマンヴァットが

「陛下、われわれが前にラーヴァーナカに参りましてから、かなり経ちます。あそこは景勝の土地であるばかりでなく、狩獵に好適の土地であります。また、周によい青草をたべさすことも出来ます。それに、あの土地はマガダ國に近いので、マガダ國王はあの土地全體に垂涎しています。従って、われわれの遊び楽しむためではなく、あの土地を守るためにも参りましょう。」と言上しました。この言葉を聞きますと、ヴァツア王はいつも逸樂を心がけていましたので、ヴァーサヴァダッターと一緒にラーヴァーナカに行くことにしました。

その次の日、行幸が決定せられ、占星者が出發に吉祥な時間を占ひ定めたとき、突然にナーラダ仙が王を訪れてきました。彼は輝きであたりを照らし、あたかも子孫を嘉するため中天から降臨して、あたりの人々の目を喜ばしめる月輪のようでありました。賓客としての挨拶を受けました聖仙は、前にひざまずく王に親しく天國に咲くパーリジター樹の花環を授けました。仙はまた彼を鄭重にもてなしたヴァーサヴァダッター妃に、彼女は愛の神の分身ともいふべき王子を得て、その王子はジイディヤラ族の王となるであろう、と祝福の言葉を述べました。そして、ナーラダ仙はヤウガンダラーヤナの侍立しているところでヴァツア王に

「王よ、ヴァーサヴァダッターを見て、奇しくも余は思い出したことがある。古昔、そなたの祖先にユディシュティラ並びにその四人の兄弟があった。彼等五人に、ドラウパディという妃がひとりいたのみであった。彼女はヴァーサヴァダッターのように、美しさに於いては他になら

ぶ者がなかった。そこで、彼女の美しさが災いの基となるのを怖れて、余は彼等に『そなたたちは嫉妬を慎まねばならぬ。嫉妬はまこと災いの種子である。このような話を聴くがよい。』と言ったことがある。それを今そなたに話して聞かせよう。」

### 「戀の虜となったスングとウバスングの物語」

スングとウバスングという二人の兄弟がいた。彼等二人はアスラで、その臂力は三界を抜いでいたので、誰も彼等を打ち破るをえなかった。梵天は彼等を滅ぼそうと思って、ヴィシシュディアカルマン（通一切天、天上の族、術者にして藝術家）に命じてティロッタマーという天女をつくらしめた。彼女が歩き廻っているときにいつも彼女の美しさを見ようとして、シヴァ天さえ四つの顔を有するに至ったというほどに、彼女は美しかった。そして、彼女は梵天の命令によりカイラーサの遊園に遊んでいたスングとウバスングを誘惑するために、彼等のところへ行った。二人のアスラは彼女を見て戀の虜となり、彼女の兩腕を同時に握んだ。彼等は互いに彼女を引張りあったので忽ちに息が喘ぎ、そのために二人は破滅してしまった。女という人目を惹くものは、如何なる人にも破滅の原因となるものである。

「『そなたたちは多勢でドラウパデーただひとり愛している。従って、そなたたちは間違

つても彼女を争ってはならぬ。そなたたちは余の忠告に従って、彼女については次の掟をまもるがよい。即ち、彼女が長兄と一緒にいるときは、末弟は彼女を母と思うべきである。また、彼女が末弟といるときには、長兄は彼女を嫁と思うべきである。』と、余は彼等に言ったのであるが、王よ、そなたの祖先の者たちは余の言葉を遵奉して互いに睦く心をあわせたのである。彼等は余の親友であった。余が今茲にそなたに會いに來たのはその友情からである。ヴァツァ王よ、余はそなたに忠告しよう。聴くがよい。そなたは彼等が余の忠告に従ったごとく、そなたの大臣たちの言葉に従うべきである。そうすれば、遠からずそなたは大成功をおさめるであらう。暫くの間は悲しみを忍ばねばならぬかも知れぬ。しかし、それは必ず結果に於いては幸いとなるものゆえ、その際そなたは決して悲しみをすぎてはならない。」

ナラダ仙は未來の繁榮を巧みに諷してヴァツァ王に告げ知らせた後、たちまちに消えうせました。ヤウガンダラーヤナを始め大臣たちは、この大仙人の言葉によって、彼等の計畫が成功することを知り、それを遂行しようと非常に熱望するに至りました。

## 八

そこで、ヤウガンダラーヤナたちは、前に述べた策謀に従って、愛妃とともにヴァツァ王をラーヴァーナに案内しました。王がその地に到着しましたとき、軍勢のあがる歓聲はあたかも大

両たちの目的が成就することを告げるかのようにありました。マガダ王はヴァツァ王が多くの人に従をとらなつてその地に到着したことを聞きますと、來襲を豫期しておのきましました。しかし、賢明な彼はヤウガンダラーヤナの許に使節を派遣しました。この大臣は職務を知っている人でありましたので、使節を快く引見しました。ヴァツァ王はというと、その地に滞留すると毎日毎日狩獵のために廣い森林を駆けまわっていました。

ある日、王が狩獵に出御していましたが、賢明なヤウガンダラーヤナは相談をしてゴーパーカを連れてルマンヴァット及びヴァサンタカと一緒に、ヴァーサヴァダッター妃の許にひそかに伺候しました。彼はそこで淑かな彼女に、王の霸業を成就せしめるために、色々と苦衷を述べました。彼女は既に兄ゴーパーカから凡てのことを聞き知っていましたので、王と暫くでも別れていることは悲しいことでありましたが、その申出に同意しました。夫に貞節を捧げる貞淑な女として、夫のために堪えられないことがありませんか。そこで、世故に長けたヤウガンダラーヤナは、彼女の姿を變える祈願を念じて、彼女に婆羅門の姿をさせました。また、ヴァサンタカを片眼の婆羅門の若者に變装させ、しかも自らも同じく老婆羅門の姿に變装しました。このような姿に身をやつした王妃を連れて、志の高いヤウガンダラーヤナはヴァサンタカとともに悠々とマガダ國にむかつて出發しました。このようにしてヴァーサヴァダッターは自らの家を出しましたが、身體は道を歩んではいまでも、心はいつも夫の許に飛んでいていました。

ヴァーサヴァダッターたちが出發しますと、ルマンヴァットは彼女の宮殿に火を放つて、

「嗚呼、お妃さまとヴァサンタカは焼死した。」

と、大聲で叫びました。すると、其處に、火焰と同時に悲しみ嘆く聲があげられました。火焰は次第におさまりましたが、泣き悲しむ聲はなかなかにおさまりませんでした。

さて、ヤウガンダラーヤナはヴァーサヴァダッター妃とヴァサンタカと一緒にマガダ國王の都城に到着しました。彼等は王女パドマーヴァティー姫が遊苑にいるのを見まして、近づいてゆきますと、彼等が王女に近づくのを警護の者たちが阻みました。パドマーヴァティー姫は婆羅門の姿をしましたヴァーサヴァダッター妃を見ると、一目見ただけで親愛の情が湧いてきました。王女は警護の者たちを退けて、婆羅門の姿をしたヤウガンダラーヤナを傍に案内させました。そして、彼女が

「婆羅門さま、貴方が連れていられる方は誰方ですか。また、貴方は何故に此處に來られましたか。」

と尋ねましたので、彼は彼女に答えました。

「王女さま、この女は私の妹で、アーヴァンティカーと申します。この妹の夫は惡業に溺れ、この女を捨てて何處かに行つてしまいました。それで、私とその男を探しに行つて参ります間、お姫さま、暫くの間のこの女を貴女さまの御手許において下さるようお願いしと存じます。そして、この片眼の若者も兄弟でございますが、この女がひとりになって歎き悲しみませぬよう、ここに留まらさして頂きと存じます。」



ヤウガンダラーヤナが王女にこのように申し述べますと、王女は彼の申出を許しましたので、彼は王姫をのこして急いでラーヴァーナナに歸りました。そこで、バドマーヴァティーはアーダアンティカーという名で呼ばれることになりました。ヴァーサヴァダッターと片眼の若者の姿で彼女に附添うたヴァサントカを連れて、彼女たちを親切にあつかい、愛情濃かにもてなして、自らの華麗な宮殿に歸りました。ヴァーサヴァダッターがバトマーヴァティー姫の宮殿に這入りますと、壁登にラーマ物語のシーター姫の姿が描かれているのを見まして、自分の悲しみを堪え忍ぶことが出来ました。

バドマーヴァティーはヴァーサヴァダッターの容姿といい、彼女のしとやかさといい、彼女の坐ったり食事したりするさまの優雅さといい、また蓮華の香のように芳ばしい體臭といい、凡てがひとときを勝れていることから、彼女が高貴の生れであることがわかりましたので、自分と同じ贅澤な生活をさせて、彼女の端みのままにさせました。そして、

「あの方はたしかに身を隠してここに居られるのに相違ない。グイラータ<sup>★</sup>王の宮殿に隠れたあのドラウパデーではないのだろうか。」

とさえ考えました。ヴァーサヴァダッターは以前にグアッア王から教えられました不凋花の花環と眉飾を造って、敬愛のしるしに姫に差上げました。バドマーヴァティーの母は彼女がこれらの飾をつけているのを見まして、この花環と眉飾を誰が造ったのかとひそかに尋ねましたので、バドマーヴァティーは

「妾の宮殿にアーダアンティカーという方が住んでいます。その方が造ってくれたのです。」と答えました。この言葉を聞きますと、バドマーヴァティーの母は

「姫、その方にこのような知識があるとすれば、その方はきっと人間ではありません。鬼神です。鬼神や仙人が善良な人々を迷わすために、こういう人々の家によく滞在するものです。姫、こういう話をお聞きなさい。」

### 「ドゥルヴァーサス仙に苦しまれたクンティー姫の物語」

むかし、クンティボージャという王がいました。彼の王宮に、人を迷わすことが非常に好きなドゥルヴァーサスという仙人が滞在していました。王は仙人をもてなすように王女クンティーに命じたので、王女はまめまめしく仙人に給仕しました。あるとき、この仙人は王女をためそうと思つて、王女に

「私が水浴している間に、速かに、牛乳と砂糖のはいいた御飯を煮いて貰いたい。水浴して歸つて、すぐ頂戴致したい。」

と言いつけました。彼は急いで水浴して、それを食べようと歸ってきました。クンティーはその食物の一杯になった器を彼の前にもってきました。その器は煮えた食物のために熱くなつていまして、クンティーが彼の食事の間それを持っていることが出来ないと考えて、彼女の背に眼を注

ぎました。彼女は仙人の意中を覺て、器を自分の背に載せました。仙人は心ゆくばかりそれを食べましたが、クンティの背はそのために灼けただれてしまいました。彼女は火傷を負いましたけれども、少しも姿勢をくずさずにいましたので、仙人は喜んで、食後彼女に贈物を恵みしました。

「この仙人はどのように其處に滞在していたのですが、同じように貴女の宮殿に滞在しているアーヴァンティカーもきつと普通の人間でない誰かです。ですから、貴女はあの方を心から慰めるようになさい。」

と言いました。母の口からこの言葉を聞きますと、バドマーヴァティーは姿をかえているヴァーサヴァダッターを一層心してもてなしました。ヴァーサヴァダッターは夫と別れて、あたかも夜間に花を閉じた蓮華のように、別居の悲しみに顔色が勝れませんでした。それでも、ヴァサンタカが演ずる子供らしい数々の可笑しい仕草に腹、顔をほころばせるのでした。

話かわって、グアツァ王は遠くまで狩獵に出かけて、その日の夕方遅くラーヴァーナカに歸還しました。そして、内宮が火事のために灰塵に歸したのを見ただけでなく、王妃がグアサンタカと一緒に焼死したことを大臣たちから聞かされました。そのことを聞ききました途端に、彼は氣を失つて地上に倒れてしまいました。そのさまはあたかも悲痛の念を忘れ去ろうと欲しているかのようでありました。彼はすぐ正氣を取戻しましたが、彼の心の中には悲しみの焰が燃えさかり、

心に刻まれている王妃の姿を焼きつくそうとする火焰にさいなまれているかのようでありました。王は悲しみ嘆いて自殺のことのみを考えましたが、不圖ナーラダ仙の豫言を思い出して考えました。

「妃からヴィディヤードラ族を統治する王子が生れるであろう。これはナーラダ仙が余に語った言葉で、偽りであるべき筈はない。更に、かの仙は余が暫く悲しみに堪えねばならぬと告げた。それにゴーパーラの悲しみは妹を失ったというにしては、それほどでない。ヤウガンダラーヤナたちもそれほど悲しんではいない。いずれにしても、妃は生きていると思われる。大臣たちはこれで何等かの政治的手腕を揮おうとしているのであろう。だから、余はいつかつと妃と再會できるであろう。兎に角、この場合、結末を見てみよう。」

と、王は思案して、大臣たちに慰められるままに、氣を取直しました。ゴーパーラは直ちに誰にも知られずに秘密の使を妹の許に遣わし、事態を正しく報らせて彼女を慰めました。ラーヴァーナカに於ける状況がこのようでありましたので、その地にいましたマガダ王の密偵は王の許に還つて、凡てを報告しました。この報告を聞きますと、王は嘗てグアツァ王の大臣から懇請せられた王女バドマーヴァティーをグアツァ王に嫁がせようと焦りました。そこで、彼はグアツァ王並びにヤウガンダラーヤナの許に使節を送り、このことに關して自分の希望するところを申述べさせました。グアツァ王はヤウガンダラーヤナの助言によってこの申込を承諾しましたが、これが恐らく妃がかくまわれた理由に相違ないと考えました。

そこで、ヤウガンダラーヤナはすぐさま吉祥の日をたしかめて、マガダ國王に答禮の使節を遣わし、

「貴方の御申出は委細われわれの承諾申上げるところであります。今日より七日目に、ヴァツア王はバドマーヴァティー姫と御結婚のために貴宮庭に到着せられるであります。王はこれによってヴァーサヴァダッター姫のことを忘れられることではありません。」

との口上を披露されました。使節はマガダ王の許に行つて、命ぜられた通り申述べました。マガダ王は非常に喜んで使節を引見しました。

そこで、マガダ王は王女に對する■情、自身の希望並びに自分の財産に相應わしい婚禮の祭典の準備を進めました。また、バドマーヴァティーも宛み通りの夫を得ることになりましたので非常にうれしく思いました。しかし、ヴァーサヴァダッターはそのことを聞くところのつづける思いでありました。この報せを聞きましたとき、彼女は顔色を變えましたけれども、姿を變えていたために誰にも覺られませんでした。

「このようにして敵は盟友となるのです。王さまのお心が貴女を離れることは決してありません。」

というヴァサンタカの言葉は、親しい幼友達の言葉のように、彼女に安心と勇氣を與えました。

そこで、慎み深く分別のある彼女はバドマーヴァティーの結婚式のために神々しいばかりに美しい不開花の花環と眉飾とを再びつくりました。

こうして、七日目の當日になると、ヴァツア王は結婚のために大臣たちを伴ない軍勢を率いてマガダ國に到着しました。ヴァーサヴァダッター姫と別れている王があつたのを何とかして取戻したいと願わなかったのであつたならば、どうして彼はこのような企てを敢てなしたでありませんか。マガダ國王は喜んで急ぎヴァツア王を出迎えました。そのさまは大海が昇りゆく月を迎えに踏みゆくようでありました。

ヴァツア王がマガダ國王の都城に遣入りますと、到るところに市民の心は歡喜にどよめきました。ヴァツア王は王妃との別離のために憔悴していましたが、町の女たちは愛妃ラティーと別離した愛の神(カ)にも見紛うばかりの彼を惚れ惚れと仰ぎ見るのでした。

ヴァツア王はマガダ國王の宮殿に遣入つて、結婚式の行われる大廣間に進みました。そこには夫と未だ死別していない婦人が満堂に溢れていました。その大廣間に遣入つて、王は結婚の装いを纏らして満月の月輪にも勝つて輝くばかりの顔容のバドマーヴァティー姫を見ました。そして、彼だけしか造りえないような花環と眉飾をしているのを見まして、彼女がそれらを何處から手に入れたのか、と王はいぶかしく思いました。彼は壇上に登つてバドマーヴァティーの手を把りましたが、これこそ實に彼が世界の寶物を受取る第一歩でありました。壇上に燃える聖火の煙はヴァーサヴァダッターを愛する彼がこの光景を見るに堪えられないと察するかのように、彼の眼を涙で曇らせるのでした。聖火を燃える儀式のときにバドマーヴァティーは顔をあからめましたが、それは新夫の心の中を知つて怒っているかのようにありました。

結婚の式典が終ると、ヴァツァ王は新婦の手を離しました。しかし、ヴァーサヴァダッターのことは瞬時たりとも心から離しませんでした。マガダ王はヴァツァ王に、あたかも大地がその凡ての寶石を奪われてしまったかと思われるほどに、夥多の寶石を贈りました。そして、ヤウガンダラーヤナはそのとき結婚の聖火を證としてマガダ王が彼の主君の舊戚とならないように誓われました。花環や飾がまき散らされ、勝れた樂人が音楽を奏で、美しい舞姫が踊るうちに、豪奢な大饗宴はすすめられました。その間、夫の繁榮を祈りつづけるヴァーサヴァダッターは、あたかも日中に於いては月の美しさが睡っているように、誰にも覺られませんでした。

ヴァツァ王がバドマーヴァティを通して内宮に進入しますと、世事に長けたヤウガンダラーヤナは、そこで王がヴァーサヴァダッター妃を發見して策謀が失敗してしまうのを怖れて、マガダ國王に

「ヴァツァ王は今直ちにこの御殿を出發しなければなりません。」

と言いましたので、マガダ國王はそれを了承し、ヴァツァ王にその旨を告げさせました。ヴァツァ王もそれを承諾しました。

そこで、ヴァツァ王は扈從の者たちの飲食が終ると、新婦バドマーヴァティを伴ない、大臣百官を従えて出發しました。そして、ヴァーサヴァダッターはバドマーヴァティが提供した心持のよい車に乗り、彼女が命じた扈從を従えて、姿を變えたヴァサンタカを嚮導として、軍勢の後から祝かに隨行しました。ヴァツァ王は新婦をともなつて遂にラーヴァーナカに到着し、自身

の營舎に進入しましたが、心はいつもヴァーサヴァダッター妃のことで一杯でした。ヴァーサヴァダッターもその後からこの地に着き、夜になってからゴーパーラカの宿所に進入し、その周圍には扈從の者たちを立ててかためさせました。彼女は喜んで迎えてくれる兄のゴーパーラカ太子を見まして、涙を流しながら兄の頸に抱きつきました。太子もまた眼に一杯涙をためていました。丁度そのとき、以前の約束に忠實なヤウガンダラーヤナがルマンヴァットと一緒にやって來ました。王妃は彼等を喜んで迎え入れました。

さて、王妃が王との別離のために堪え忍ばなければならなかった悲しみをヤウガンダラーヤナが慰めていました間に、ヴァーサヴァダッターに扈從していました者たちがバドマーヴァティのところへ行って

「王妃さま、アーヴァンティカーさまも到着されましたが、どうしたことがわれわれを退けられて、ゴーパーラカ太子さまのお館に入られました。」

と申上げました。バドマーヴァティはこのことを聞きますと非常に愕いて、ヴァツァ王の面前で

「行って、『貴女は妾がお預りしている方です。何用あって、其處に居られるのですか。妾の居るところにお出でなさい。』と王妃が言っている、とアーヴァンティカーに傳えなさい。」

と、彼等に命じました。この言葉を聞きまして扈從の者たちが退去しますと、ヴァツァ王はバドマーヴァティに祝かに彼女の着けている花環と周飾は誰が造ったのかと尋ねました。これは

或る婆羅門が妾の家に預けていったアーヴァンティカーという婦人が造ったものだと言えました。このことを聞きますとすぐ王はその婦人こそヴァーサヴァダッターに相違ないと考えて、ゴーパーラの宿舎に急ぎました。その入口には扈從の者が立っていました。王が宿舎の中に這入りますと、そこにはヴァーサヴァダッター妃とゴーパーラ太子と二人の大臣とヴァサンタカとがいました。王はそこに逃避の旅から歸ってきましたヴァーサヴァダッターの姿を見ました。彼女はあたかも月蝕から逃れた月輪のようでありました。すると、王は悲しみの毒のために氣を失って倒れてしまいました。ヴァーサヴァダッターの心にも動悸がきて、別離のために生色のなくなった四肢をふるわせながら、地上にくずおれました。そして、自分の行爲を責めながら泣きつづけました。こうして夫と妻とが悲しみ嘆いているのを見まして、ヤウガンダラーヤナの顔にも涙が流れました。

バドマーヴァティはそういう場合に相應わしくない泣聲を聞いて、不思議に思つてその場へやつて來ました。そして、王とヴァーサヴァダッター妃とのことがだんだんと判つてきまして、貰ひ涙にむせぶのでした。まこと、善良な婦人は愛情深く、心やさしいからであります。ヴァーサヴァダッターは泣きながら

「夫に悲しみしか興えることの出来ない妾の生命などどうなつてもよい。」

と、たびたび言いました。そのとき、冷靜なヤウガンダラーヤナがヴァツツア王に

「王さま、貴方がマガダ國王の王女と結婚せられることによつて貴方が大王となれることを

冀つたわたくしが萬事をとり計らうたのであります。王妃にはいささかの過もありませぬ。それに、

王妃の御不在中の貞節のほどはこのバドマーヴァティさまが證人です。」

と言いました。バドマーヴァティも、もはや嫉妬の氣持など全くなくなり、

「この方の無實を證すためには妾は火の中にでも這入りましょう。」

と言いました。王も

「余こそ間違つていた。余のために妃はこの大きな悲しみを堪え忍んでくれたのだ。」

と言いましたが、ヴァーサヴァダッターは

「王さまのお心からお疑いを取除くためには、妾は火に■入らねばなりません。」

と、堅く決心して言いました。そこで、有徳な人々の中で最も勝れた賢明なヤウガンダラーヤナは、口を漱ぎ、東方を向いて、清淨な聲で

「われこそ王のためを思ふ者であり、また王妃に汚れなければ、おお饒世の神々よ、言葉を垂れたまえ。若し然らざれば、われは生命を捨てん。」

と言いました。彼がこう言い終ると、天から聲が聞えてきました。

「王よ、ヤウガンダラーヤナを大臣とする汝は幸いなり。前世に女神たりしヴァーサヴァダッターを妃とする汝は幸いなり。彼女に一點の汚れなし。」

と言うと、その聲は聞こえなくなりました。そこに居ました凡ての人々は、四方に■くその聲を聞きますと、雨雲が初めて來て雷が鳴りはじめたときに長い間暑さに苦んだ孔雀が頸をのびして

喜ぶように。喜びにつつまれて思わず孔雀の真似をしました。そして、王とゴーパーラカとはヤウガンダラーヤナの所行を賞讃しました。ヴァツァ王は全世界を掌中に収めたと考えました。

そして、王は、歡喜と安樂とが化身して訪れてきたかのように、彼と起居をとともにすることによって彌まじに愛情濃かとなった一人の妃と一緒に、この上ない幸福を楽しみました。

## 九

そして、次の日、ヴァツァ王は近侍の者たちを選ばせて、ジャーサヴァダッター及びバドマーヴァティと饗宴を開いていましたが、ヤウガンダラーヤナ、ゴーパーラカ、ルマンヴァット及びヴァサンタカの許に使を遣わして召集し、款談しました。そのとき、王は愛妃との別離について耳を傾けて聴く一座の人々に次の物語をしました。

### 「ブルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語」

むかし、ブルーラヴァスというヴィシュヌ神の敬虔な信者である王があつた。彼は何の妨げもなく天界並びに地界を席巻した。あるとき、彼が神々の遊苑ナンダナを散歩していたとき、愛神カーマの第二の魅惑の武器であるウルヴァシーという天女が彼の姿に目をとめた。彼女は彼の姿

を見た途端に氣を失ってしまったので、彼女の友達のリムバーたちの臆病な心を驚かせた。かの王もまた彼女を見て、彼女が美の甘露の奔流であることを知ったが、彼女が天女で人間である彼にとっては彼女を抱擁することが不可能なので、渴望のために氣が遠くなりそうであつた。すると、乳海の真中に坐したまう全知の神ヴィシュヌは丁度伺候のために参殿した聖仙ナラダに

「神仙よ、いまナンダナ苑に滞在するブルーラヴァス王はウルヴァシーに心を奪われて、戀慕の情から、別れることが出来なくなつたままでいる。それ故に、仙人よ、汝はインドラの許に行き、余の言葉傳えて、ウルヴァシーが速かにかの王に與えられるようにせよ。」と命じた。ヴィシュヌ神からこの命令を受けたナラダは

「よろしゅう御座います」

と言つて、櫓に述べた状態のブルーラヴァスのところへ行つて、王に告げた。

「王よ、立ち上りなさい。私は貴方のためにヴィシュヌ神から遣わされた者です。かの神に偽りのない誠を捧げる者たちの苦惱を、かの神は見るに忍びられないからです。」

ナラダ仙はこのようにブルーラヴァスに告げて彼を慰め、彼を連れて神々の王(イン)のところへ行き、ヴィシュヌ神の命令を告げた。インドラはそれを恭しく承諾したので、仙人はウルヴァシーをブルーラヴァスに與えさせた。

ウルヴァシーをブルーラヴァスに與えたことは天界に住む者から生命を奪うものであつたが、ウルヴァシーにとってはそれはまこと死人を甦えらす仙薬であつた。そこで、ブルーラヴァスは

彼女をともなつて地界に歸つたが、彼女の姿は人間の眼に天界の花嫁の神々しい美しさを暗示するものであった。その後、ウルヴァシーとこの王の二人は互に睦みかわすまなざしの鎖に結びつけられたかのように、互に片時も離れることは出来なかつた。

ある日、ブルーラヴァスはインドラとダーナヴァ族(天の悪魔)との戦にインドラに援助のために招かれて天國に行つた。その戦に於いてアスラ族の王マヤーダラが殺されたので、インドラは大祝宴を催し、天女の群は踊を舞つた。そのとき、師匠トゥムブルを介添としてラムバーがチャリタと稱する表情舞踊を踊るのを見て、ブルーラヴァスは笑つた。すると、ラムバーは「人間よ、さては貴君はこの天界の踊を知っていませんね。」と皮肉に言つた。ブルーラヴァスは

「ウルヴァシーと一緒に暮しているの、私は貴女方のお師匠トゥムブルさえ知らない踊を知っている。」

と答えた。この言葉を聞くと、トゥムブルは怒つて、ブルーラヴァスに

「汝がクリシュナ天を宥める祭祀を行うまで、汝はウルヴァシーと別れるべし。」

という呪詛をかけた。この呪詛の言葉を聞くと、ブルーラヴァスは急遽歸つて、非時の雷のように怖ろしい、自分に振りかかった出来事をウルヴァシーに語つた。すると、突如ガンダルヴァの群が王の知らぬうちに天から舞い下りて、ウルヴァシーを何處かに攫つていった。そこで、ブルーラヴァスはこの不幸が呪詛によることを知つて、パダリカーの庵所に行つてヴィシシュヌ神を宥

めるために苦行を行つた。

しかし、ウルヴァシーはガンダルヴァ族の國に留められたが、愛する夫との別離を悲しんで、死んでゐるかのように、ねむっているかのように、また繪に描かれた女のように、全く意識をなくしていた。それでも彼女は呪詛の終るのを期待して生きていたのであつて、それは少しも不思議ではなかつた。彼女はあたかも夜間には雄と別れていなければならない雌のチャクラヴァーカ鳥のようであつた。ブルーラヴァスは苦行によつてヴィシシュヌ神を宥め、ヴィシシュヌ神が彼を嘉したもうたので、ガンダルヴァ群はウルヴァシーを彼にかえした。王は呪詛の終ることもに再び天女ウルヴァシーと會うをえて、地上に住みながらも天上の快樂を享受したのであつた。

と、ヴァツァ王が話し終つて口を閉じると、ウルヴァシーの夫に對する愛著の心ざしを聞きましたヴァーサヴァダッターは、■い間に亘つて本意なくも夫との別離を堪え忍んだことを思いだして、顔にはじらいの色を浮べるのでした。

ヤウガンダラーヤナは王妃が王に暗に諷刺されてはじら■たのを見まして、彼女にそんな思ひをさせないように、王に向つて言いました。

「陛下、こういうお話をお聴きになったことがありませぬならば、私のお話をどうかお聴き下なう。」

# 「大臣の謀で生命の助かったヴィヒタセーナ王の物語」

この世にティミラー<sup>※</sup>という都城があり、青群の女神<sup>（リ）</sup>の住處でありました。この都城にヴィヒタセーナという有名な王がいました。彼に地上の女神ともいふべきテージョーヴァティーという妃がいました。この王はいつも王妃の頸に抱きついていまして、彼女の抱擁に身を委ね、暫時も鎧を身にまとうに堪えられませんでした。あるとき、王は長引く熱病に罹り、日ましに衰弱してゆきましたので、醫者は王に王妃との交りを禁止しました。ところが、妃との交りを絶たれると、彼の心の中に薬も手當も何の効果もない病が生じました。醫者は大臣に

「王の病氣は恐怖か悲しみの發作で治るかも知れない。」と、ひそかに言いました。大臣たちは

「王は、嘗て大蛇が頸筋に落ちかかったときにも懼えず、また敵軍が内宮に侵入したときにも恐れなかった、あの勇敢な王にどうしてわれわれは恐怖の念を起しえようか。」

と考えて、王妃と相談して、王妃を匿し、王に

「王妃は亡くなられた。」

と告げました。王が非常な悲しみにさいなまれていました間に、痛心の王の心の病は潰えてしまいました。王の病苦が癒えましたとき、大臣たちは第二の幸福の女神のような王妃を王にかえしました。

王は王妃が身を隠したことに怒ることなく、むしろ誕生の恩人として彼女を大切にしました。

この物語の後に、ヤウガンダラーヤナは

「王妃の王妃たる所以は夫のためを思うということにあります。夫の單なる楽しみとなるといふだけでは王妃という名は得られないのです。そして、宰相としての實務は王事の重責に専念することであつて、王の氣まぐれの心に服従するのは僕人の特徴であります。そのような譯ですから、われわれは敵マガダ王と和睦し、且つ陛下が全世界を征服せられるようにと努力をしたのであります。従つて、陛下、お妃さまが陛下に對する深い愛情から堪えられない別居を敢えて堪え忍ばれたに拘わらず、それが陛下に對して惡事をなしたことになるというのはあたりません。むしろ、非常な利益を齎らされたのです。」

と言いました。ヴァツァ王は宰相のこの眞情を吐露した言葉を聞きまして、自分の誤っていたことを覺り、そして非常な満足を感じました。そして、

「そなたたちの策略に従い、妃があたかも政略の化身であるかのように振舞つて、余に全世界を贈つて呉れたことは余も知っている。余が圖つた實業はあたらないことだったが、妃に對する深い愛情の言わたことだ。だが、愛情のために心が腐つた人々はどうして冷靜に考えることが出来ようか。」

と言ひ、互に色々と談りあつて、王妃の恥じらしい贅を暗らし、ヴァツァ王はその日を楽しく過



しました。

その次の日に、事の真相を知りましたマガダ王の使節がヴァツァ王の許に到着し、「われわれは貴國の大臣たちに欺かれた。従って、今後われわれの住む世界が不幸の場處とならぬように協定をしよう。」

というマガダ王の言葉を傳えました。この言葉を聞きますと、ヴァツァ王はこの使節を懇にもてなし、バドマーヴァティから直接に返事を聞かせるために彼女の許に行かせました。ヴァーサヴァッターに深く傾倒しているバドマーヴァティは使節を親しく引見しました。謙譲は善良な婦人の美德であるからであります。使節は

「娘よ、そなたは策略によって嫁がされた。しかも、そなたの夫は他の女に愛着している。かくて、余は悲痛の念を以てかかる娘の父であるという果報を刈らねばならなくなった。」という父王の言葉を傳えました。しかし、バドマーヴァティは使節に申しました。

「歸つて、父君母上に妾の言葉を傳えて頂きたいと思ひます。『何もお悲しみ下さいますな。わが王は妾を深く愛していられます。それに、ヴァーサヴァッター妃は妾には愛情深い姉上とも言ふべき方です。ですから、父上が御自身の固く誓われた信實と妾の生命を一度に害うようなことをお望みにならないかぎり、わが君に憤りを持たれてはなりません。』」

バドマーヴァティに相應しいこの返事を聴きますと、ヴァーサヴァッターも使節を懇にもてなし、マガダに還らせました。使節が出發しますと、バドマーヴァティは父の宮殿を憶い

出して、果郷の念に堪ええないかのように、少し茫然としていました。そこで、ヴァーサヴァッターはヴァサンタカに命じてバドマーヴァティを慰めさせました。参殿しましたヴァサンタカは次の物語を話しました。

### 「人間の妻となつた天女ソーマブラバーの物語」

大地の飾りともいふべきパールプトラという都城があります。そこに、ダルマグプタという大商人がいました。彼の妻はチャンドラブラバーといひましたが、あるとき妊娠して、容姿美しい娘を生みました。この娘は生れるや否やその美しさで部屋を輝かし、はつきりと言葉を發し、しかも起き上つて坐りました。彼女の生れた部屋に居ました女たちが驚き怖れているのを見まして、父のダルマグプタ自身も驚いてしまいました。そして、直ちに、その娘に恭しく禮拜して、秘かにたずねました。

「尊いお姫さま、わが家に驅化したもうた貴方はどなたさまですか。」  
すると、彼女は

「貴方は妾を誰にも嫁がせてはなりません。妾がこの家にいるかぎり、妾は貴方にとって祝福となりましょう。父上さま、その他のことをお聞きになつてはいけません。」

と答えました。この言葉を聞きましたダルマグプタは畏怖して、世間には娘は死んだと言つて、

彼女を家の奥深くに隠して育てました。

こうして、ソーマブラバーと名づけられましたその娘は次第に大きくなってゆきました。彼女は人間の姿をしていましたけれども、神々しいばかりの美しい容姿でありました。ある日のこと、彼女が春の祭典を露臺から眺めて愉んでいましたとき、グハチャンドラという商人の息子が彼女を見染めました。彼は心臓を戀の矢で射貫かれたかのように気が遠くなり、家に歸るのさえも困難なほどでありました。彼は戀病に悩まされたのです。彼の両親が彼の病の原因を再三再四たずねますと、彼は友達の名を通して打明けました。そこで、彼の父グハセーナは息子に對する愛情から、その娘を貰いにダルマグブタの家にかけました。ダルマグブタは娘を息子の嫁に貰いにきましたグハセーナに

「私の娘とは何處に居るのです。馬鹿な！」

と言いました。グハセーナはこの言葉で娘を嫁入らすのを■つたと考えて家に歸りましたが、戀病に責めさいなまれている息子の姿を見まして、考えました。

「そうだ、このことを王にお頼みしよう。以前にお役に立ったこともあるから、王の力で何とかして戀病で死にかかっている伴にあの娘が嫁入してくるようになしてやろう。」

と決心して、王のところへ行き、この上ない寶玉を献上して、王に自分の願いのほどを申出でました。王はこれを嘉せられて、警察長官にグハセーナを援助するよう命じましたので、グハセーナは警察長官とともにダルマグブタの家に赴きました。しかも、家の周圍を軍勢で包圍しました

ので、ダルマグブタは一家の破滅が到來したと思つて、喉が呼吸でつまってしまいました。

すると、ソーマブラバーがダルマグブタに言つた。

「お父さん、妾を嫁入らせて下さい。妾のために貴方を不幸に陥入らせはいたしません。妾はどんなことがありましても夫と同食はいたしません。とにかく、このことについて先方の方々の同意を口頭でえて下さい。」

この言葉を聞きますと、ダルマグブタは娘を夫と同食させないことを條件として結婚に同意しました。グハセーナは

「まあ、私の息子のところへ嫁入りさせなさい。」

と考え、心の中で笑いながら、この■件に同意しました。こうして、グハセーナの息子グハチャンドラは結婚式を擧げて、花嫁のソーマブラバーを自分の家に連れ歸りました。その夕方、父は息子に

「伴よ、花嫁を床入りさせなさい。自分の妻と同食しない人が何處にある。」

と言いました。この言葉を聞きますと、花嫁のソーマブラバーは男を怒ったまなざしで見つめて、あたかも死の判決を言いわたすかのように、人差し指をまわしました。すると、この嫁の指を見ました瞬間に、商人は息絶えてしまいましたので、他の人々は怖れおののきました。グハチャンドラも父が死んだのを見まして、

「死の女神が花嫁となってわが家に舞いこんだのだ。」

と考えました。その後、ソーマブラバーはグハチャンドラの家に来たとして暮らしてはいましたが、彼は彼女と夫婦の契を結ぶことが出来ず、白刃の上に立つような苦難の戒行をまもりつづけました。彼はその悲しみに心中を焼きつくされ、あらゆる快楽に對して無關心となり、戒行をまもりつづけて、毎日婆羅門を饗應しつづけました。天上の美しさを持つ彼の妻は終始口を開きませんでした。婆羅門たちを饗應した後にはいつも彼等に布施を與えました。

あるとき、老齡の婆羅門が饗應に招かれてきまして、天賦の美貌を具えて世間の驚嘆をあげている彼女を見ました。この婆羅門は好奇心をおこしてグハチャンドラにひそかに

「貴方の若奥様は一體どういふ方ですか、私に話して下さい。」

とたずねました。そこで、婆羅門に再三再四たずねられましたグハチャンドラは悲痛な心で彼女のことをすべて物語りました。この勝れた婆羅門はそれを知ると彼に同情し、彼の望を遂げさせるために、心中の火焰を鎮める呪文を彼に授けました。そこで、彼がこの呪文をひそかに唱えていますと、祭壇の聖火の中から一人の婆羅門が彼の前に忽然と現われました。婆羅門の姿に化身した火神は、その前に額くぐグハチャンドラに

「今日、余はそなたの家で御馳走になり、今夜はここに留らして貰おう。そして、そなたに眞實を教示してから、そなたの頭をかなえてとらそう。」

と言ひまして、彼の家に這入りました。この婆羅門は他の婆羅門と同様に饗應を受けて、その夜はグハチャンドラの傍に臥床を設けて、夜番を被れることなくつとめました。

そして、その夜更けて、家人が寝しずまると、グハチャンドラの妻ソーマブラバーは夫の家から出て行きました。婆羅門は直ちにグハチャンドラを起して、

「さあ、行つて、お前の妻のすることを見よう。」

と言ひました。そして、呪力で自分とグハチャンドラを蜜蜂の巣に變えて出かけ、家を出ていった妻を彼に見せました。その美しい女は都城の外に出て、かなり遠くまで行くのでした。婆羅門はグハチャンドラと一緒に彼女の後をつけてゆきました。すると、藪蒼と茂つて美しい榕樹の大木が見えました。しかも、その樹下から、琵琶や笛の伴奏で美しい天上の音楽の奏でられているのが聞えてきました。そして、その樹上に自分の妻に似た天女が玉座に倚つているのをグハチャンドラははっきりと見ました。彼女の天賦の美しさは月光を凌ぎ、白いチャーマラ<sup>\*</sup>であおがれている彼女は、月輪の美しさのすべての寶を主宰する女神のようでありました。しかも、グハチャンドラは彼の妻がその樹に登つて、彼女とならんで玉座の片側に坐っているのを見ました。このように同じ美しさの二人の天女がならんで坐しているのを見ますと、彼にはあたかもその夜三つの月が照り輝いているかのように思われました。

そこで、彼は好奇心に驅られて、そのとき考えました。

「まこと、これは夢か幻か。いや、そのいずれでもない。これは善業の幹に萌え出る賢者との交わりの芽から花の咲くことである。そして、この花は私に相應わしい果實を約束するものだ。」  
このように彼が想像を逞しくして考えています間に、かの二人の天女は彼女等の生れに相應わ

しい食事をして、花蜜酒を飲みました。そして、グハチャンドラの妻は別の天女に「今日神々しい一人の婆羅門が妾どもの家に参りました。そのため、姉上さま、妾の心はふるえました。ですから、妾はもう歸ります。」

と言いました。別れを告げて、その樹から下りました。それを見ましたグハチャンドラと婆羅門の二人は蜜蜂の姿をしたままで彼女に先立って歸り、その夜のうちに家に歸ってきました。その後から天女であるグハチャンドラの妻もまた歸ってきて、離れにも無づかれずに自分の部屋に這入りました。そこで、婆羅門はグハチャンドラに穩かに語りました。

「貴方が見られたとおり、貴方の妻は天女であつて、人間ではない。また、もう一人の女も貴方が今日見たとおり天女である。天女がどうして人間と契ることを望もうか。それで、彼女が貴方と契るようになるために、彼女の部屋の戸に書くべき呪文を私は貴方にお授けしよう。また、その效驗を増大するために戸外で行う術策をお教えしよう。火は煽られずとも燃え上がるが、風で煽られるときは一層燃えたものである。同様に、呪文もそれだけで望ましい効果を擧げるけれども、術策を用いるときその效驗は一層あらたかである。」

この勝れた婆羅門は、このように言つて、グハチャンドラに呪文を授け、また術策を教えて、夜の明けがたに妾を消しました。

グハチャンドラは妻の部屋の戸にかの呪文を書き、そして夕方に彼女の愛情を啖る術策を教えられたとおりに實行しました。彼は立派に磨飾つて出かけ、彼女の面前である遊女と語り合つた

のです。それを見ると、天女は妬ましくなつて彼を呼び、呪文のために呪縛された聲で

「あの女は誰ですか。」と尋ねました。彼は

「あの女は遊女で、私に惚れています。今日、私はあの女の家に行こうと思つています。」と、伴つて答えました。すると、彼女は肩毛に皺をよせて、流し眼に彼を睨んで、左手で彼を引留めて言いました。

「ああ、判りました。それで貴方はおめかししたのですね。行つてはなりません。貴方はあの女と何の關係もありません。さあ、妾と一緒に寝ましょう。妾は貴方の妻なのですから。」

興奮のために心が動搖し、彼女が人間と契るのを引とめていました鬼靈は呪文によつて退散させられていましたが、彼女はなお憑かれていたかのように、このように言いましたので、この言葉聞きまして彼は歡喜のために身がふるえる思いでした。彼は直ちに彼女と一緒に部屋に這入つて、人間ではありませんけれども想像を絶するような天上の快楽を樂しました。このように、グハチャンドラは呪文の神通力によつて天女の身分を捨てた愛妻をえまして、其後幸福に暮しました。

「このように、天女たちも善業者の呪文に打負かされて、祭祀の執行とか慈善などの徳行の報酬として、彼等の妻となつてその家に住むのであります。神や婆羅門を尊崇することは徳行のす

ぐれた人々に凡ゆる望を満さしめる牛と考えられているからです。それによって得られぬものは何もないのです。呪文による懐柔などというような他の術策は單なる補助手段に過ぎません。これに反して、悪業はあたかも大風が花を散らす原因であるように、非常に高貴な生れの夫人たちがその地位から墮ちる唯一の原因でさえあるのです。」

ヴァサンタカはこのように王妃に物語った後、更に言葉をつづけました。

「この場合、アハリヤーの身に起ったことをお聴き下さい。」

### 「インドラ神とガウタマ仙の妻アハリヤーの姦通の物語」

昔、ガウタマという過去・現在・未來の三時に通曉する大仙人がいました。彼の妻はアハリヤーと言ひ、その美しきは天女をさえ凌ぐほどでありました。あるとき、天帝インドラは彼女に■想して、祕かに彼女を誘惑しました。まこと、支配者の地位にある者の心は、自己の勢威を過信して、不法な目的を追求するものであります。愚かな彼女は、情熱の虜となつて、シャチーの夫（インドラ神）の意に従いました。しかし、ガウタマ仙は神通力でそれを知り、その現場に赴きました。インドラは怖れて直ちに猫の姿となりました。ガウタマはアハリヤーに

「ここに居たのは誰だ。」

と詰問しました。すると、彼女は俗語で

「ここに居たのはまさしく猫ですよ。」

と、言葉の眞意を保ちながら、ごまかして答えました。すると、仙人は笑いながら

「お前の情夫がいたのが本當だ。」

と言つて、彼女が眞實を遵奉した場合に解ける呪詛を彼女にかけました。

「悪性の女め、お前が森林の中を妃を探して歩き廻るラーマ王子の姿を見るまで、長い間岩石の姿となれ。」

ガウタマ仙は、また、そのとき

「汝の身體に汝の望んだ女陰が千箇つけられるであらう。造一切主がいつか天女ティロッタマ-Iをつくられるであらうが、汝が彼女を見ると、それらは千眼となるであらう。」

と、インドラに呪詛をかけたのです。呪詛をかけますと、ガウタマ仙は望みのままに苦行をしました。アハリヤーは無慘にも岩石の姿となり、インドラもまた全身が女陰で蔽われてしまいました。不義は如何なる人にも屈辱の原因となるものであり■す。

「このように、如何なる人にも惡業は常にその人自身に報いるものであります。人が種子を蒔くとき、彼はその果實を自ら收穫するのです。従つて、氣高い心の持主は他人の嫌厭することを爲そうとはしません。このことたるや勝れた人々の當然遵奉すべきことで、聖法の定めるところであるからです。貴女がたお二人は前年に於いては姉妹の天女であられたのですが、呪詛のため

に此の世に生れたのです。ですから、貴女がたのお心の中にはいささかも争いのお氣持はないのですし、お互いの幸福を願ひ合つていられるのです。」

ヴァサンタカからこの言葉を聞きますと、ヴァーサヴァダッターもバドマーヴァティーも嫉妬心の一片も残らず消えてしまいました。しかも、ヴァーサヴァダッター姫は夫を二人の共有とし、バドマーヴァティーの幸福を冀つて、自分自身と同様にいとしましました。

マガダ國王はバドマーヴァティーの遣わした使節からヴァーサヴァダッターの非常に雅量のあることを聞いて大いに満足しました。次の日、大臣ヤウガンダラーヤナはヴァツァ國王の前に伺候し、王妃のいられるところで、他の近侍の侍立の下に王に奏上しました。

「陛下、經綸のために何故にカウシャームビーに還御せられませぬか。マガダ國王は歸されましたけれども、最早かの王に對して懸念すべきことは何もありませぬ。かの王は、『娘を嫁入りさせることによる姻戚關係』という政略によつて、完全にわが味方となつたからです。自分の生命よりも愛する娘を捨てて、かの王はどうしてわれわれに戰を挑むことがありえましょう。かの王は約束を守るであります。それに、かの王は貴方によつて購されたではありません。あれは私だけでやったことです。それに、かの王に不平等をもたらすことではありません。私が隣者どもから知りえたところでは、かの王は決してわれわれに敵對は致しません。われわれがここに數日滞在していたのはまさしくそれを知るためでした。」

自らの掌中にある事業を達成しましたヤウガンダラーヤナがこのように王に奏上していました

とき、マガダ國王の使節がそこへ到着しました。使節は番兵によつて取次がれて、直ちに王宮に入り、挨拶をして座につき、ヴァツァ王に

「マガダ國王はバドマーヴァティー姫の報ぜられた消息に満足せられ、貴王に次のごとき思召を傳えさせられました。『多く申述べる必要はない。余は一切を知り、貴王に満足するものである。されば、ここに緒につかれたところを遂行せられよ。われわれは貴王に服する。』」

と、口上を傳達しました。ヴァツァ國王はこの使節の明確な言葉を聞きまして、あたかもヤウガンダラーヤナの植えた政策の樹木に花の咲いたかのように、大いに喜んでこの言葉を嘉納しました。王はバドマーヴァティーをヴァーサヴァダッター姫と一緒に連れてこさせて、使節に贈物をし、厚く接待して歸らせました。

また、ヴァーサヴァダッターの父チャンダ・マハーセーナ王からの使節もそこに到着しました。使節は王宮に進入して、禮式に則つて王に禮して

「陛下、王事の眞實を知るチャンダ・マハーセーナ王はこの度の事件の始終を聞こしめされて満足せられ、この思召を傳えさせられました。『貴王の傑出せらるることは、貴王の大臣にヤウガンダラーヤナがいるという一事によつて、明かに知られた。これ以上の多言は無用である。ヴァーサヴァダッターもまたまことに殊勝である。彼女は貴王に對する貞節からあの難事をなしたわけたのであるが、彼女の所業によつてわれわれは永く善業者の真中に於いて頭を高く上げるをうる。余にとつて、ヴァーサヴァダッターもバドマーヴァティーも何等差別はない。彼女等二人は同じ

心であるからである。従つて、貴王は速かに經倫のために努力せられよ。』

と、使命の趣を語りました。ヴァツァ國王は岳父の使節の口上を聴きましたとき、喜悅がたちまちに心に満ち溢れました。また、王妃に對しては深く温い愛情が改めて増し、同時に勝れた大臣に對しては更に深い尊敬の念が湧いてきました。そこで、王は心中喜びに絶えず、王妃たちとともに、賓客の禮を以て使節を款待して歸らせました。王は速かに經倫の大業にたずさわろうとして、大臣たちと相談して、カウシャームビーへの還御を決心しました。

## 一〇

そして、次の日、ヴァツァ國王は大臣並びに妃たちを伴つて、ラーヴァーナカからカウシャームビーに向けて出發しました。還御の途上には、あたかも時ならず湧き溢れる大海の水のように、■が彼の軍勢から湧き起り、平原に■き渡りました。大象に乘つて進むかの王の威容は、もし太陽が東方の山々を伴つて天空を行く場合があるとすれば、まことそれに譬うべきものでありました。白い傘蓋を騎されている王は、あたかも太陽の光耀を凌いだことを喜んでゐる月に扈從せられているかのように、輝きました。一切の上に燦然と屹立する王の周圍には、あたかも北極星のまわりを群星が軌道によつて運行するように、高官顯臣たちが扈從していました。そして、王の後から雌象に坐御して續く二人の妃は、あたかも愛情から王に隨行する大地の女神と吉祥の

女神が此の世に化身したかのよう<sup>（註）</sup>に、光り輝いていました。彼の通過する路上の大地は躍り跳ねる軍馬の蹄の尖端で振がつけられましたが、そのさまはまこと王の愛好した愛情の爪痕のようでありました。

このようにヴァツァ國王は威容堂々と進んで、絶えず樂隊の讚嘆するうちに、日ならずして、正の還御を祝うカウシャームビーに到着しました。赤色の絹の旗に埋まつた都城は、彼女の夫ともいうべき君主が巡狩から還御しましたので、燦然と光り輝きました。城壁の■窓は彼女の大きく開いた眼であり、城門の前の廣場にある水の満ちた水郷は、彼女の膨らんだ二つの乳房でありました。民衆の歡喜の叫聲は彼女の楽しい嘆きであり、白い宮殿は彼女の微笑でありました。王は二人の王妃を伴つて都城に進入しました。都城の女たちにとって、王の姿を見ることは無上の歡喜でした。天は華麗な宮殿に立つ數百の服人の顔に滿たされ、あたかも王妃の美しい顔容のまえに光を奪われた月輪の兵士が侍衛のために幾候したかのようでありました。窓邊に立つて歸きもせず王の一行を見まもる婦人たちは、あたかも好奇心に驅られて天上の車に乗つて見物に來た天女のようにありました。長い睫毛の眼を窓格子に押しつけて見まもる婦人たちは戀の矢を容れる艱を作っているかのようでありました。王を見ようと冀つて眼を障った一人の女の目は耳のそばまで達するかようでありましたが、餘りにも障つたために王を見ることが出来ませんでした。急いで走つてきました一人の女の激しく波うつ兩乳房は、王を見ようと焦るあまりに、上衣から跳びでんばかりでした。他の女の頸飾は興奮のために切れ、散亂する眞珠の珠は喜びのあ

まりに彼女の心臓から溢れ落ちる歡喜の華さがらでした。また、ヴァーサヴァグター妃を見て、彼女が焼死したという嘗ての夢を思いだし、

「もしもラーヴァーナに於いて榮火がお妃さまを焼つたのであるならば、太陽さえ暗くなり、此の世は暗黒に包まれたことであらう。」

と、まだ心配しているかのように語る女たちもいました。また、バドマーヴァティーを見て

「お妃さまはバドマーヴァティーさまのために恥をかかれることもなく、お二人はまこと親友のようなので、姿はうれし。」

と、親しい人々に語る女たちもありました。また、他の女たちは二人の妃をまのあたりに見て、歡喜に陸つた、青蓮にも似たまなざしの花環を彼女等に投げかけて

「まこと、シヴァ神もヴィシュヌ神もお二方の美しさを御覽になったことはないに相違ない。さもなければ、あのように妃のウマー(シヴァ神妃バ)やシェリー(ヴィシュヌ神妃、蘇美と榮の女神)を崇め大切にせられはしないであらう。」

と、互いに語り合うのでした。

このように、ヴァツナ國王は郡民の目を娛ませながら、入城の嚴肅な祭典を執行しましたのちに、妃たちをともなつて宮殿に入りました。そのとき、王宮の美しさは夜明けに於ける蓮華の池のように、また月の昇るとき海ののように輝きました。王宮は忽ちに王の殊遇を冀う藩侯からの贈物で満されましたが、このことは更に數多くの王侯から貢物の來ることを豫想せしめました。

ヴァツナ王は藩侯を引見し、大饗宴を開いて、そこに出席したすべての人々の心に深い感動を與えた後、内宮に退りました。内宮にて二人の妃の間に座りました王はあたかもラティとブリーティとの間に坐つた愛の神(カ)のようでありました。そして、王はその日の残りを飲酒など數數の歡樂のうちに過しました。

次の日、大臣たちの陪侍の下に王が政廳にいましたときに、一人の婆羅門が參候して、入口のところで叫びました。

「おお、王さま、婆羅門に對する非行です。兇惡な牧者が森で何の理由もないのに私の子の足を切斷しました。」

この言葉を聞きますと、王は直ちに二三人の牧者を逮捕して連行せしめ、訊問しました。すると、彼等は答えました。

「王さま、われわれは牧畜を業としていますので、人の住まぬ地方を遍歴しています。われわれの間にデーヴァセーナと申す一人の牧人がいますが、その男は森の或る處で石の座に坐つて、『俺はお前等の王だぞ。』と言ひまして、われわれに命令を下しています。そして、彼の命令に従わない者はわれわれの間に一人もおりませぬ。このように、この牧人は森に於いて統治しているのであります。王さま、さて、今日、この婆羅門の息子があの道をやって來まして、牧人の王に敬禮をしませんでした。王の命令で、私どもが『王さまにお辭儀しないで行かないで下さい。』と言ひますと、かの若者はわれわれを押しのけて、われわれの忠告にも拘わらず笑ひながら行つ



てしまいました。そこで、牧人の王はこの傲慢な若者の足を切斷して罰するように私どもに命令しましたので、私どもは彼のとを道いかけ、彼の足を切斷したのであります、王さま。われわれのような者で誰が支配者の命令に背くことが出来えましょう。」

このように牧人たちが釋明しますと、賢明なヤウガンダラーヤナはこの言葉を驚と考へ、王に秘かに

「確かにその場所には財■が埋藏されております。その威力によって、その男は牧人でありながらも勢力をもっているのです。そこへわれわれも行きましょう。」

と語りました。大臣の言葉を聞きますと、王は牧人たちを案内として、軍勢と扈從をともなって、森のその場所へ出かけました。

その土地を調査して、土方たちがそこを掘ってみますと、山のよな姿をした一人の夜叉が大地の下から出てきました、

「王さま、私が永らく守護してきたこの財寶は、貴方さまの御祖先が埋められましたものゆへ、何卒御自由になさって下さい。」

と、ヴァツァ王に言いました。王の禮拜を受けて、夜叉は姿を消しました。そして、財寶が發掘されました。しかも、その中から寶玉を鑲めた無價の王座が得られました。繁榮のときには幸運な出来事が引續いて起るものであります。ヴァツァ王は喜び勇んで財寶をすべて手中に納めて、牧人たちを懲らしめたのち、自らの都城に歸りました。都城の人々は王が持歸りました黄金の玉

座を見ましたが、それに鑲めた血のように赤い寶玉から發する輝きは、その流れによって王の四方に於ける征服を前兆するかのように見えました。また、銀の釘の尖端につけられた眞珠の鎖は、大臣の驚くべき智慧を思つて再三再四微笑んであらわす彼の齒並のようでありました。都城の人々はそれを仰ぎ見て大いに喜び、喜悅の太鼓を打ち鳴らして喜びのどよめきを擧げました。大臣たちも王の勝利を確信して大いに喜びました。■を始める最初にあたつて吉祥なことの起るのはその窮極の成就を豫示するものであるからです。天空が稲妻の閃きに似た旌旗に滿されたとき、王は雲が雨を降らすように臣下の者たちに黄金の雨を降らせました。

その日を大饗宴のうちに過した翌日、ヤウガンダラーヤナはヴァツァ王の心の中を知ろうと思ひ、王に

「王さま、貴方が繼承によつて得られたこの大王座に登つて、それを飾つて頂きとう存じます。」

と言上しました。しかし、王は

「世界を征服して榮光を得たときに、余はこの王座に登るべきである。四方を征服することなく余が登るとき、如何なる名聲が得られようか。四方の海に■まれ、豊かに飾られた世界を征服したときにこそ、余は祖先たちの遺してくれたこの大寶座に登つて、それを飾るであらう。」

と言つて、王はその王座に登りませんでした。生れの貴い人々は精神の眞の氣高さを持つてゐるからであります。

そこで、王の言葉に満足しましたヤウガンダラーヤナは王に言いました。

「陛下、よくぞ仰せられました。では、まず、東方征服を企てましょう。」

この言葉を聞きますと、王は大臣に熱心にたずねました。

「急所ともいふべき地點が他にあるにも拘わらず、諸王は何故にまず東方に進撃するのであらうか。」

この言葉を聞きますと、ヤウガンダラーヤナは再び王に言いました。

「陛下、北方は富裕ではありませんが、蕃族との往來によつて汚されております。また、西方は太陽などの没する方角であります故に敬われておりません。また、南方も羅刹が住み、死の國の據る方角で汚れております。これに反し、東方に太陽は昇り、また天帝インドラは東方を支配しております。また、ガンジス河は東流しています。従つて、東方が好まれるのであります。しかも、南方のジンディヤ山脈と北方のヒマラーヤ山脈の間に挟まれ、ガンジス河の水の洗う中原の地が最も勝れていると考えられています。従つて、成功を望む王者たちはまず東方に進軍し、更に神の河（ガンジス河）の流れる地方に居を定めます。まこと、御祖先の方々もまず東方へ進出して諸方を征服し、ガンジス河の岸にあるハステイナー・プラに居を定められました。しかし、嗣王たるは人間によるものであつて、土地に因るものでないことを覺つて、シャターニーカ王はカウシャームビーが環境が勝れていますので、その地に據られたのであります。」

と言つて、ヤウガンダラーヤナが口を閉じますと、王は彼の殊勳に對する尊敬の念から

「この世に於いて土地の條件が嗣王たるの原因でないということは眞實である。勇氣ある人間にとつて、自己の勇氣が成功の唯一の原因であるからである。勇氣のある人は、唯一人で支援がなくても、繁榮を獲得するものである。」

と、話りました。

## 一一

そこで、ヤウガンダラーヤナがヴァツマ王に言いました。

「陛下、陛下は運命の恵みとともに勇氣を持ていられます。われわれもまた政治の常道に於いていささか爲すところがありました。従つて、遠巡することなく、速かに、諸方の征服を遂行なされませ。」

大臣の口から、このように言われましたヴァツマ王は語りました。

「そうであるとしても、吉事の成就には常に多くの障礙がある。されば、余はそのために苦行をして、シヴァ神を慰め奉らうと思う。かの神の恩顧なくして、何として所期の望を成就することが出来る。」

この言葉を聞きますと、あたかもラーマ王子が海上に橋を架けようと焦つていましたときに、猿族の王（スグリーヴァ）たちが王子に進言しましたように、大臣たちは王が苦行を行ずることに賛

意を表しました。

そして、王が妃たち並びに大臣たちと三夜の閑苦行を行いましたとき、シヴァ神が夢の中で王に教を垂れました。

「余は汝に満足じゃ。さあ、立ち上るがよい。汝は何等の障礙なく勝利を勝ち得よう。また、汝は間もなく將來一切のヴィディヤードラ族の王者たるべき王子を得よう。」

王が眼を覺すと、彼の疲勞はシヴァ神の恩寵によって全く去り、彼はあたかも太陽の光によって輝きを増した新月のようでありました。そして、その翌朝、大臣たちや戒行を果すために苦行を行じて疲れ果てた、優美な花にも似た二人の王妃に、その夢を話して喜ばせました。耳を傾けて聴くに値する夢の話は王から聴きまして、二人の王妃は元氣を回復しました。その話は王妃の體力の増進にはまこと良藥のごとき效驗があらりました。王は苦行によって祖先の人々と同じ威力を得ました。また、二人の妃は夫に貞淑な婦人の殊勝な名聲を得ました。

翌日、苦行の終了を祝う祝宴が催されて、市民が歡喜に湧き立っていましたとき、ヤウガンダラーヤナが王に言上しました。

「陛下、シヴァ神がこのように満悦したもうとは、まことに幸先よき次第であります。されば、今や敵を征服して、わが君の腕によって勝ちえた繁榮を享受せられよ。まこと、王者が自らの徳によって繁榮を得たとき、それは永劫に續き、自己の徳によって征服した人々の光耀は消ゆることはないからであります。祖先の方々が集められた財寶が永く地中に埋れて見失われていたにも

拘わらず、陛下によって得られたのはまこと如何なることでありますでしょうか。この點に關して、こういう物語をお聴き下さい。」

### 「商人デーヴァダーサの物語」

むかし、バートリプトラの市街に、大富豪の家に生れたデーヴァダーサという商人の息子がいました。彼はバウンドラヴァルダナの親戚から或る富貴な商人の娘を妻に娶りました。彼の父が死にますと、デーヴァダーサは次第に身持がくずれ、全財産を博奕でなくしてしまいました。そこで、彼の妻は貧乏の苦しみに堪えられなくなりましたので、彼女の父がやって來まして、彼女をバウンドラヴァルダナの實家に連れ歸つてしまいました。彼も次第に自らの失敗に苦しみ、正業に立ちかえろうとして、その資本を欲し、舅に頼むためにバウンドラヴァルダナに行きました。その市街に夕方に到着しましたが、塵埃にまみれ體徳を潰した自分を見まして考えました。

「このような姿で、どうして舅の家に行けよう。まこと、路をもつ人間にとっては、親族の前に貧乏を曝すよりは死ぬ方がましである。」

このように考えました彼は市場に行き、夜分には花を閉じる蓮華のようにわが身をうずくまらせて、とある店の外にいました。すると、そのとき、一人の若い商人がその店の戸を開けて、その中に這入るのを見ました。間もなく、一人の女が足音を忍ばせて近寄り、素早くその店に這入

ってゆきました。燈火のともされている店の内部を窺見しました彼は、その女が自分の妻であることに気がつきました。デーヴァダーサは自分の妻が他の男の許に走って戸に閉をしているのを見まして、苦惱の稲妻にうちめされて、考えました。

「財産を失った男は自分の肉體をさえ失う。まして、どうして女の愛情を止めることが出来る。女たちにはその本来の性質からして稲妻のような浮氣心があるものだ。墮落の海に陥ちた男たちに振りかかる不幸はかくのごときものだし、また夫と別れて實家に歸った女の行狀もまたかくのごとくだ。」

このように考えながら戸外に立っていますと、彼の妻が情夫となれなれしく話し合っている囁きが聞えたように思いました。そこで彼は戸に耳を密せて耳を飲ていますと、そのときその悪い女が情夫である商人にひそかに語っていました。

「まあ、お聴きなさいよ。妾は貴方に惚れてるんですから、貴方に秘密のことを話して上げましょう。妾の亭主にむかしヴィーラヴァルマンという曾祖父さんがいたのです。この人は屋敷内に黄金の鑲を四つ、四隅の各々に一つずつ埋めておいたのです。そして、そのとき、彼はその一つを妻の一人に知らせておいたのです。彼女が死ぬとき、そのことを嫁に知らせ、この人がまた自分の嫁に、言いかえれば妾の姑に話したのです。そして、姑が妾にそのことを話して呉れました。これが妾の亭主の家で姑から嫁に順次口傳されていることなんです。妾の亭主は貧乏でしたけれども、妾はそのことを話してませんでした。あの人は博奕に溺れていましたので、妾には■

かったからです。でも、貴方は妾の本當に好きな方です。ですから、妾の亭主の町へ行つて、あの人に金をやって家を買いとり、あの黄金を手に入れたら此處に歸つてきて、妾と楽しく暮らしましょう。」

この陰險な女からこのような話を聞かされた情夫の商人は、造作なしに財寶が得られると思つて、彼女が氣に入りました。デーヴァダーサは彼の性惡な妻の槍のように鋭い言葉に心臓を突き刺されたかのような思がしましたが、そのとき突然に財寶の希望が心に浮びました。そこで、彼は急遽バートリプトラの市街に引返し、わが家に歸つて財寶を掘りだしてわが物にしました。また、彼の妻の内緒の情夫の商人もその財■を手に入れようとして、商賣に名を借りてその土地に行きました。彼はデーヴァダーサからその家を買いました。デーヴァダーサは非常に澤山の金でそれを彼に賣つたのです。デーヴァダーサは他に住居を構えて、策略を用いて妻を實家から急いで呼びもどしました。このようにしましたとき、彼の妻の情夫である性惡な商人は財寶が得られませんでした。彼のところに來て、彼に

「お前の家は古くて、私の氣に入らない。だから、私に金を返して、自分の家を買戻してくれ。」

と言いました。

このようにその男は要求しましたが、デーヴァダーサが拒みましたので、二人は互いに言い争つて王の前に行きました。デーヴァダーサは王の前で、彼の胸中にある毒のように有害な自分

の妻の行狀を逐一洩らさず吐き出しました。そこで、王は彼の妻を召喚して真相を料明し、人妻と姦通した商人の全財産を没收して處罰しました。デーヴァダーサは彼の惡妻の鼻を切り落し、他の女を娶って、得た財寶によつて幸福に暮しました。

「このように、徳によつて得ました財寶はその人の繁榮のときに至つても變ることはありません。しかし、そうでない財寶は雨が降りだすと溶け去る雪片のごときのものであります。従つて、人は正道によつて財寶を得るよう努力すべきです。まして、財寶は王國という大木の根でありますゆゑ、王者は更に一層これに努めるべきです。従つて、大業達成のために、慣習に従つてまず凡ての大臣に榮譽を授けられ、然る後に徳に勝る裕福を顯ち得るために四方の征服を遂行なさいます。陛下が結婚によつて二大國の王を舅にもつていられますことを無視して陛下に敵對する者はなく、多くの王者は陛下に加勢するであります。しかし、パーラーナシーのブラフマダッタという王は常に陛下の敵でありますゆゑ、かの王をまず征討しましょう。この王を征服しました後に東方を征服し、漸次に全土を征服して、翬華のように輝くパーリンドゥ王家の名聲を高められよ。」

大臣のこの言葉を聞きますと、征服を熟望するジャツァ王は直ちに同意して、臣下の者たちに征討の軍の準備を命じました。王は彼を援助した義兄弟のゴーパーラカの功を嘉して、ゴーパーラカをジャイデーハの王位に即け、また軍勢を率いて彼を援けたパドマヴァティーの兄シンハヴァルマンを敬つて彼にチュエーデイ國を與えました。また、前期に雨雲が天を蓋うように四方に軍勢を配置して彼を援けようとした盟友のピツラ族の王プリンダカを王は呼び寄せました。この大王の領土に於いて遠征の準備が進められていましたとき、敵どもの心中には奇妙な不安が萌しはじめました。

ヤウガンダラーヤナはブラフマダッタ王の意圖を探るためにまず間諜をパーラーナシーに派遣しました。こうして、吉祥の日をえらんで、勝利を豫言する前兆に喜びいさんだジャツァ王はまず東方のブラフマダッタ王に對して軍を進めました。傘蓋を高くかかけて背高い勝利の軍象に乗りました彼は、あたかも満開の花をつけた一本の樹木のある山に猛々しい獸王が登つたかのようでありました。大業達成の使者であるかのように秋が來ましたので、彼の遠征は好都合に進捗し、河川は減水して、彼の進撃の路を極めて容易にしました。彼は大地の表面を雄たけびする軍勢で満しましたが、あたかも雲のない空に突然に雨季を出現せしめたかのようにありました。そして、そのとき、四方は彼の進軍を互いに語り合っているかのように、彼の軍勢の雄たけびの反響で轟き渡りました。また、彼の軍馬は黄金の馬飾に太陽の輝きを集めて進み、そのさまはまこと彼の執行した軍隊の不淨拂いの祭典を喜んだ祭火が隨行しているかのようにでありました。白いチャーマラのごとき耳をもち、顧顧からは船舟のように赤いマダを出しながら路上に輝く彼の軍象は、彼の進撃を怖れた山々が彼の征討の軍に加わらせるために遣わした子が秋の白雲をたなびかせて、鐘分を含んだ赤い水を進しらせているかのようにありました。塵埃はこの王が敵どもの威光に堪

ええないと考えているかのように、太陽の光輝を蔽い隠しました。二人の王妃は彼の政治的手腕に心惹かれて彼に随行した名譽の女神と勝利の女神のように、一步一步路上を彼に随行しました。風にはためく彼の軍旗の絹は敵軍に「降服せよ、さもなくば逃げよ。」と語っているかのようにありました。このように、この世の破滅を怖れた龍蛇<sup>シニ</sup>エーシヤ<sup>ガ</sup>が高く舉げた頸部の斑紋のように見える満開の白蓮の咲きみだれる四方を睥睨しながら、彼は進軍しました。

さて、話かわって、ヤウガンダラーヤナの命を受けました間諜は髑髏を捧持するシヴァ行者に身を變装して、グァーラーナシーの市街に到着しました。ト占の巧みな一人がその手腕のほどを示しながら先生の役劇を演じ、他の者たちはその弟子を装いました。これらの弟子たちは諸方を行乞しながら

「われわれの先生は過去・現在・未來の三時に通じていられる。」

と、賈の先生を褒めたたえてまわりました。そして、未來に關して彼にたずねる人々に彼が火などで占って語ったことを、これらの弟子たちが秘かにその通りに計らいましたので、彼は右右になりました。其の地に住む王族で王の龍臣の一人が彼の下らぬ手腕に深く惚れこんで、彼はその愛顧を受けるようになりました。そして、グァツァ王との戦が始まりますと、ブラフマダッタ王はこの龍臣の口を通じて、彼に相談をしましたので、彼は機密に通ずることが出来ました。

さて、ブラフマダッタ王の宰相ギーガカンダカはグァツァ王の進路に罣を設けました。進軍の道沿いの樹木、花の咲いた蔓草、水や草に毒などを塗りました。また、彼はグァツァ王の軍勢

の中に毒娘<sup>サ</sup>を娼婦として送り、夜間に暗殺を行う刺客を放ちました。占師を装うかの間諜はそれを知ると直ちに仲間の口を通じてヤウガンダラーヤナに報告をしました。そのことを知りましたヤウガンダラーヤナは毒を塗られた進路沿いの草や水などを解毒劑で清め、また陣中に於いて見知らぬ女との交歡を禁じました。また、ルマングアットの助けをえて、刺客を捕えて殺しました。このことを知って計略の失敗しましたブラフマダッタ王は全土を大軍で包めるグァツァ王に到底勝つことが出来ないと考え、大臣等と相談をし、使節を派遣したのちに、降服のしるしとして組合せた手を頭上において、親しくグァツァ王の幕營に赴きました。グァツァ王は貢物を携えて到着しましたブラフマダッタ王を懇に迎えました。英雄は降服を喜ぶからであります。

このようにブラフマダッタ王が屈服しましたので、グァツァ王は更に軍を進めて、屈服する者どもはこれを従え、抵抗する者どもはあたかも風が樹木を薙ぎ倒すようにこれらを根こそぎにして東方を平定しました。そして、遂に、グァンガ<sup>現在の</sup>地方が征服せられましたので、怖れおののいているかのように波立つ東海に達しました。その海岸に王は戦勝の記念碑を建てましたが、それはパーターラ<sup>(地下)</sup>の征服をしないように王に懇請するため出てきた龍王のようでありました。次いで、カリンガの民衆が彼に服して貢物を捧げ、しかも彼の嚮導となりましたので、グァツァ王の名聲は高くマヘーンドラ山の頂上にまで登りました。更に、王は、マヘーンドラ山の征服によって彼の威勢に怖れ露いたヴィンディヤ山脈の諸酋長のように見える軍象により、諸王の據る森林を征服して、南方に軍を進めました。この地方に於いて、彼は敵どもの遠吠を屏息せし

めて、無力で蒼白となった彼等を、あたかも秋の季節が雨季の雨雲を拂うように、山地に潜む者としてしまいました。征戦をつづける彼がカーグエーリー河を渡り、また彼の威勢はチョーラ族の王の光榮を凌駕しましたので、二つとも同時に汚されたのでした。ムーラジ族の者たちは最早頭を擡げることを許されませんでしたし、その女たちが身内の者たちの死を悼んで手で乳を叩いて嘆き悲しむのも許されませんでした。彼の軍象は七つの流れに分れたゴードグアリー河の水を飲みましたが、水は象の鼻から香液となって再び七筋に分沁するかのようでありました。かくて、グアツァ王はレーヴァー河を渡って、ウツジャイニーに行きました。彼は舅のチャンダ・マハーセーナ王に導かれて都城に遷入りました。彼は其地で編んだ髪をとき花鬘を飾って二重の美しさに輝くマラーダ地方の女たちの好色なながし目的となりました。彼は舅に欽せられて非常に楽しく其地に逗留したので、長い間未練を残していました故國の樂しさをさえ忘れるほどでありました。グアールサダダッター妃は始終父の側について子供の時代を憶いだして懐しがっていました。この幸福にも拘わらずなお失墜しているかのようでありました。

チャンダ・マハーセーナ王はバドマーヴァティーに會つて、自身の娘に再會したのにおとらずうれしく思いました。グアツァ王は樂しく數日の間休息した後に、舅の軍勢の加勢をえて、西方に軍を進めました。彼の細身の長剣はまこと彼の勇氣の火から出る煙でありました。それはラータの女たちの眼を流れ出る涙で曇らせました。マンドラ山の樹木が彼の象に踏み倒されたとき、マンドラ山は彼が海をかき廻すために自分を根こそぎにするのではないかとおののいているよう

でありました。彼はたしかに太陽や其他の天體を凌ぐ發光體でありました。征服者たる彼は西方に於いてさへも赫々たる昇天を享受したからでした。ついで、グアツァ王は、クベーラ神(財寶を飾りとし、そのアラカー城に對する執着を賞讃し、カイラーサ山の微笑によつて美しい方向)<sup>(北)</sup>に軍を進めました。彼はシンドゥ王を征服して、あたかもラーマ王子が猿軍を率いて羅刹どもを討伐したように、騎兵を率いてムレッチャ族を討ちました。トルシュカ族の騎兵國は海濱の樹林が湧き立つ海波にうち倒されるように、彼の象軍の大集團のために蹂躪せられました。また、彼は敵の貢物を受納して、あたかもヴィシュヌ神が惡魔ラーフの頭を刎ねたように、バーラーシカ族の兇惡な王の頭を刎ねました。フーナ族を敗退せしめた彼の名聲は四方に轟き渡り、ヒマラーヤ山中を第二のガンジス河のように流れ回した。彼の軍勢が關の聲を擧げると、敵は恐怖のために靜まってしまいました。なお岩の洞穴の中のみには時に敵對の聲が聞えました。カーマルーバの王がそのとき傘蓋を捨てて彼に頂禮し、光耀のない者となりましたのも不思議ではありません。この王の献上した象軍を従えて副王は軍をかえしましたが、その象群は貢物として山がグアツァ王に捧げた岩が動くさまにも似ていました。

このように大地を征服して、グアツァ王は都下を通れてバドマーヴァティーの父マガダ國王の都城に到着しました。王が二人の妃と一緒に到着したとき、月が夜を照らすとき愛の神の喜ぶように、マガダ國王は大満悦でありました。嘗て人知れずマガダ國王の王廷にいましたグアールサダダッターは茲に改めて國王にひきあわされましたが、國王は彼女を見て尊敬に値する婦人

だと思いました。

かくて、勝利赫赫たるヴァツア王はマガダ國王並びに全都城の人々に厚くもてなされたのち、彼に對する愛情から彼に隨行した全ての人々の忠誠心に感服せられて、彼の有力な軍勢によって全世界を併吞して、自己の領土のラーヴァーナカに歸還しました。

## 一一

かくて、軍勢の休息のためにラーヴァーナカに留っていましたが、ヴァツア王は秘かにヤウガンダラーヤナに語りました。

「卿の明智によつて余は全世界の王者を征服した。政略によつて余に服屬した諸王は決して余に叛かないであろう。しかし、あのヴァーナーナシー王ブラフマダッタは陰險な男である。あの男一人が叛くと思う。悪意ある人間にどうして信頼がおけようか。」

と、ヴァツア王から言われましたヤウガンダラーヤナは答へました。

「陛下、ブラフマダッタは二度と謀反をしないでしよう。何故なれば、かの王がわれわれに征服せられて服屬しましたとき、陛下はあの王を非常に鄭重に取扱われました。心ある男ならば、誰が好遇する人に害を與えることが出来ましようか。或はそれを敢てする人がありましても、その者はそれが結局自己を害することを知りましよう。この點について、こんな話があります。お

聴き下さい。お話申し上げましよう。」

### 「婆羅門バラブーティの物語」

嘗てパドマ國に、アグニダッタという聲名高い勝れた婆羅門がありまして、王の贈與した土地に住んでいました。彼に二人の息子がいましたが、長子はソーマダッタといい、次子はヴァイシュヴァーナラダッタといいました。長子は容姿が勝れていましたけれども、馬鹿で素行が治まりませんでした。しかし、次子は賢明で、素行よく、また學問が好きでありました。彼等が結婚してから彼等の父が死にましたので、彼等は母領の土地や其他の財産を半分ずつ分けました。彼等のうちで、次子の方が主に尊敬せられました。長子のソーマダッタは行狀がおさまりませんでしたので王に重用されず、農耕に従っていました。

或るとき、父の友人であつた一人の婆羅門が、ソーマダッタがシュードラたちと戯談しているのを見まして

「馬鹿者め、お前はアグニダッタの子であるに拘わらず、シュードラのような振舞いをする。

しかも、お前の弟が王に重用せられるのを見て、恥じるところもない。」

と言いました。この言葉を聞きますと、ソーマダッタは怒つて、相手は長上であることを忘れて、その婆羅門に飛びかかつて彼を蹴とばしました。そこで、婆羅門は蹴られたのに激怒してすぐさ



ま他の婆羅門たちを呼んで證人とし、王のところへ行つて訴えました。王は兵を派遣してソーマダッタを捕縛しようとした。兵士等は出かけて行きましたが、武器を持った彼の友だちのために殺されてしまいました。そこで、王は改めて兵を派遣して、彼を捕えました。怒りに盲目となり、王は彼の磔刑を命じました。この婆羅門が磔刑のために柱に上げられますと、誰かに放り投げられたように突然に地上に落ちました。しかも、まこと運命が彼の將來の輝かしい福德を守護したのでありましたか、彼を再び柱の上にあげようとした刑吏たちは盲目となつてしまいました。

そのとき、王はこの一部始終を聞き、また彼の弟からも懇願せられて心が和ぎ、彼を助命しました。こうして死を免れましたソーマダッタは、王の侮辱を避けるために家族と一緒に他國に行こうと欲しました。しかし、彼の親族の者たちが擧つて彼の行くのに反對しましたので、自分が相續した拜領の土地の半分を捨てて生計を立てることにしました。けれども、他に生計の手段もありませんでしたので、農耕をしようと思い、適當な土地を探すために吉祥の日を選んで森に行きました。其處で彼は豊かな收穫の見込のある繁華らしい土地を見出しましたが、その真中に巨大なアシユヅアッタ樹を見ました。耕作を望む彼は、その樹が幸にも繁茂した蔭で太陽の光線を遮つて雨期のように涼しくしてくれるのを知つて、非常に喜びました。彼は

「どなたがこの樹に宿りたもうとも、私はその方の熱心な信者です。」  
と云つて、右邊をして、そのアシユヅアッタ樹を禮拜しました。彼は二疋の牝牛を轡につけ、事

業達成のための祈願を誦し、その樹に供物を供えて、其處で耕作を始めました。彼は夜となく晝となくその樹の下にいまして、彼の妻がいつも其處へ食物を運んだのです。時経て、穀物が實りましたとき、運命のしからしめるところか、その土地が敵國の軍勢によつて荒されました。しかし、敵軍が引上げると、勇氣ある彼は穀物が害われましたけれども、泣き悲む妻を慰めて、彼女に残っている僅かばかりを與え、自分は以前のように樹に供物を供えて、同じ場處の同じ樹の下に留まりました。まこと、忍耐心が不幸によつて増大するということは志操の堅い人々の特性であります。

さて、ある夜、心配のために睡れなくて獨り考えこんでいましたとき、アシユヅアッタ樹から聲がきこえてきました。

「おお、ソーマダッタよ。余は汝に満足じゃ。されば、汝はシュリーカンタ\*の土地にあるアーディティヤブラバという王の國に行け。其の地で、夕方のアグニホートラ祭の祭に用いる祈呪を唱えた後に、王の戸を絶えず叩いて、次の宮集を繰返せ。『私はバラブーティという婆羅門です。私の言ひ「善因善果・惡因惡果」という言葉を聞き下さい。』このように語るとき、汝は非常な繁榮を得るであらう。夕方に於けるアグニホートラ祭の祈呪を今余より學べ。余は夜叉である。」

と言ひ、その威力によつて直ちに彼が夕方のアグニホートラ祭の祈呪を教わりますと、その聲は消えてしまいました。

その翌朝、夜更から授けられたパラブーティという名を貰い、まゝ賢明なソーマダッタは、妻と一緒に出發しました。彼は彼の不運のように平坦でなく、しかも錯雜した森を通過して、シュリーカンタの土地に到着しました。其處で、彼は王の戸口で夕方に於けるアグニの祭祀の際の呪詛を誦えて、命ぜられた通りに自分の名をパラブーティと述べ、

「善因善果・惡因惡果」

という言葉を唱えて、世間に好奇心を起さしめました。彼が繰返してこの言葉を語っているのを知りまして、アーディティヤブラバ王は好奇心を起してパラブーティを王宮に連れてこさせました。彼は王宮に赴き、王の面前で同じ言葉を繰返して語りました。そのとき、王は傍の廷臣たちと一緒に笑ひだし、王や大臣たちは彼に衣服、裝飾品及び村落を與えました。偉大な人々の喜びは無敵に終ることはないからであります。このようにして、貧乏なパラブーティはグヒヤカ(夜叉の別名)の恩寵によって忽ちに王から授けられた財寶を得る身となりました。そして、彼はいつも櫛に述べた言葉を唱えて、王の寵臣となりました。王者の心は慰めを愛するからであります。彼は漸次に王宮に於いても、王國內に於いても、また後宮に於いても、王の寵臣として親愛と尊敬を受けるに至りました。

或る日、森の狩獵から歸ってきましたアーディティヤブラバ王は急いで後宮に這入りました。そのとき、戸口に立つ侍衛が狼狽しましたので、彼は疑惑を抱きました。王が後宮に這入りますと、クヅアラヤーヴァリーという王妃が一心不亂に神に祈念しているのが見えました。彼女は丸

裸で、頭髮を逆立て、眼を閉じ、前額部に鰐舟でティラカ\*を置き、唇を震わせて呪文を唱えながら、血、酒及び人肉をならべた怖ろしい供物を供えて大きな曼荼羅の真中に坐っていました。彼女は王が這入りますと、狼狽して衣服を脱ぎました。彼がそのわけをたずねますと、彼女は憎悪を請うて直ちに答えました。

「王妃クヅアラヤーヴァリーが神通力をえた物語」

「妾は貴方が繁榮せられますようにとこの祭祀を行いました。妾がこの祭祀を知りました次第と妾の神通力のはどを、王さま、どうぞお聴き下さい。」

嘗て、妾が父の家にいましたとき、春の祭典のときに庭にいました妾に友達たちがこのように申しました。

「この遊苑の中の木造の亭の真中に、神々の神であらせられるガネーシャ(ガネの王の意、象頭の靈驗あらたかな神像がありまして、わたしたちの願は何でもかなえて下さいます。わたしたちの祈願をかなえて下さるこの神像に誠信を捧げてお祀りすれば、あなたは難なくあなたに相應わしい夫を得られましょう。)」

この言葉を聞きますと、妾は何も知りませんでしたので友達たちにたずねました。

「ガネーシャを祀れば、娘は何故夫を得ることが出来るのですか。」

すると、友達たちは

『あなたはどうしてもしてそのようなことをたずねるのですか。かの神を祀らないとき、この世では如何なる人も成功を得ることは出来ないのです。この神の威力がどのようなものか、あなたにお話ししましょう。お聞きなさい。』

と言って、次のような話をしてくれました。

### 「軍神カールッティケーヤの誕生物語」

むかし、インドラ神がターラカ(悪名)に壓迫せられましたとき、神王たる威光を示そうと欲して、シヴァ神から息子を得かりたいと望みました。そのとき、愛の神はシヴァの眼から發した火で焼きつくされてしまったので、ガウリー(シヴァ神妃パールヴァティの別名)は夫をもとめて非常に長い間苦行を行じて、嚴しい禁欲を守っていました。三眼の夫をえたのです。彼女は息子を得ることと愛の神の蘇生を望みましたが、目的成就のためにガネーシャを祀るのを忘れていました。そのとき、願望の聴き届けられることを望みました美しい彼女に、シヴァは次のように語りました。

「愛する女よ、愛の神はむかしブラジャーバティ(劇名)の心から生れた。彼は生れるや否や傲慢から『俺は誰を狂わしてやろうか』(Kam darpayam)と語った。そのため、梵天は彼にカンドルバ (Kandarpa) という名を與えたのである。そして、『息子よ、お前は自信があろうが、

シヴァ神のみは襲撃することを止めなさい。彼から死を與えられないようにな。』と言った。創造主がこのように言っただけでも、性悪な彼は私を惱ますためにやってきた。そのため、彼は私のために焼きつくされた。そして、彼は二度と身體を具えて生れかわることはないのである。しかし、私は自分の威力によってそなたに息子を生ませよう。私は子孫を得るのに世の人間のするように愛慾の力を必要としないからである。」

牝牛を標識とする神(アツ)がこのようにパールヴァティに言っていましたとき、梵天がインドラを連れて彼の前に現われました。彼等が彼を讃嘆して阿修羅ターラカを滅ぼすことを懇願しましたので、シヴァは女神に自身の子を生ますことに同意しました。また、彼等の懇願により、生物の破滅を防ぐために、生物の心の中に形のない愛の神を生れさせすことにも同意しました。そして、自分の心にも愛慾の這入りこむことを許しました。このことに満足して、創造主は去り、パールヴァティは非常に喜びました。

こうして、日を経た或るとき、シヴァはひそかにウマー(神妃パールヴァティの異名)と愛慾の遊戲に耽りました。彼等の愛の戯れは果しなく、かくて數百年が過ぎ去りましたが、その摩擦のために三界は震動しました。そこで、世界の破滅を怖れて、梵天に教示せられた神々はシヴァの愛の戯れを止めさすためにアグニ(火神)を思い出しました。彼等がアグニのことを思い出した瞬間、アグニは愛の神を滅したシヴァの敵すべからざることを考えて、神々から逃げて水の中に這入りました。火神の熱に焼かれた蛙たちは、彼を探している神々に「火神アグニは水の中にいる」と告げました。

そこで、アグニは呪詛によって忽ちに蛙の聲を不明瞭にして、再び姿を消してマンドラ山に逃げました。しかし、象と鸚鵡にあばかれて、蝸牛の姿をして樹の穴の中に居ました彼は神々に見つけだされ、仕方なく神々の前に姿を現わしました。彼は呪詛によって鸚鵡と象の舌を明瞭な言葉の言えないようにし、神々におだてられて彼等の乞い願うことに承知しました。そこで、彼はシヴァのところへ行き、自己の火焔でシヴァの愛慾生活を止めさしましたが、かの神から呪詛せられるのを怖れて、彼に恭しく禮して神々の委命を述べました。シヴァはそのとき憤怒が昂進しましたので、その火の中に射精してしまいました。火神もウマールもそれを受けとめることが出来ませんでした。女神は憤怒が満足出来なかつた怒りと妊娠しえなかつた悲しみから心亂れて

「妾は貴方から子を得られませんでした。」

と言いましたので、シヴァは彼女に

「そなたが障礙の支配者たるガネーシャを祀らなかつたために、今障礙が生じたのだ。だから、火中にわれわれの子が速かに生れるように、かの神を祀りなさい。」

と言いました。シヴァからこのように言われました女神はガネーシャを祀りましたので、火はシヴァの種子によって姪りました。そして、シヴァの種を姪りました火は、あたかも太陽がその中に遁入ったかのように、日中でさえも七色の光を發して輝きました。しかし、彼はその種を姪っていることが出来なくなつて、ガンジス河に排出しました。ガンジス河はシヴァの命によってメー<sup>★</sup>ル山の火坑にそれを捨て置した。其處でこの胎兒はシヴァの従者ガナたちに守護せられ、千年を経て六つの顔をもつ小兒となりました。

こうして、ガウリーに命ぜられてこの小兒を養育する六人のク<sup>★</sup>ッタイカーたちの乳を六つの口で飲んで、この小兒は日ならずして成長しました。彼此する間に、神々の王が阿修羅タラカに打負かされて、戦を捨てて、近づき難いメー<sup>★</sup>ル山の山嶺に逃げてきました。神々は神仙たちとともに六面のカールッタイケーヤの保護を求めたのです。彼は神々を保護して、彼は彼等に取巻かれていました。インドラはそのことを知って、彼の王國がカールッタイケーヤに奪われたと考え、心亂れ嫉妬して、カールッタイケーヤのところへ行つて戦を挑みました。インドラが彼の雷電でカールッタイケーヤを打ちますと、そのときカールッタイケーヤの身體からシャーカとヴィシャーカという無敵の威力を持つ二人の息子が生まれました。

シヴァは威力の點でインドラに勝る自分の息子のカールッタイケーヤのところに行つて、戦を止めさせました。そして、

「お前はターラカを殺してインドラの王國を護るために生れたのである。従つて、お前は自己の義務を果せ。」

と命じました。インドラは大いに喜んで、直ちに恭しく禮して、カールッタイケーヤを彼の軍將に任ずる灌頂式を始めました。インドラがカールッタイケーヤの頭に水を灌がうとして腕を上げますと、彼の腕は動かなくなりましたので、彼は落膽しました。すると、シヴァが彼に

「お前が軍將を望むときに、象面の神(神の王ガウリーヤカ)を禮拜しなかつたからこの障礙が生

じたのである。だから、お前は彼を祀るべきである。」

と言いました。シャチーの夫(マンド)はこの言葉を聞き、言われた通りにしましたので、腕は自由となり、將軍任命の盛大な灌頂式が正しく執行せられました。そして、間もなく、この軍將は阿修羅ターラカを殺しましたので、目的を果たした神々も、また彼を子に持つガウリーも、ともに喜びました。

「ですから、姫君、神々でさえガネーノヤを祀らないでは成功を勝ち得られないのです。あなたが恩寵を願われるならば、この神をお祀りしなさい。」

と、友達たちから言われました妻は、貴方、庭の一隅にあるガネーシャ像のところへ行って拜みました。禮拜が終りましたとき、妻は不圖友達たちが自身の神通力で天空に飛び上り遊び戯れているのを見ました。妻は好奇心に驅られて彼女等と呼ばひ下ろし、神通力のことについて尋ねますと、彼女等は直ちに

「この神通力は魔女の呪文から得られたのであって、人肉を食べたことによるものです。妾たちこれを教えたのはカーラトリという女性の婆羅門です。」

と答えました。友達からこのように言われました妻は空中を飛ぶ神通力を得たいと思いましたが、けれども、人肉を食べるのが怖ろしくて、一瞬ためらいました。しかし、どうしてもその神通力が得なくて、妻は彼女等と

「貴女がたは妾にそれを教えて下さい。」

と言ったのです。そこで、妾から慇懃せられました彼女等はカーラトリのところに行つて、物凄く醜い彼女を其處へ連れてきました。彼女の眉毛は交叉し、眼はしよぼつき、鼻は平べったく、頬は大きく、唇は度く裂けており、齒は突出て、首は長く、乳は垂れ下り、太鼓腹で、足は平たくて擴がっていました。まこと創造主が醜態さを造りうる技能の標本として彼女を造られたかのようにありました。妾が水浴をしましてガネーシャを祀つて彼女の前に平伏しますと、妾の衣服を脱がせ、曼荼羅の中で怖ろしいバイラダ(バクシダ)を祀らせました。妾に灌頂しましたのち、彼女は自分の知っている數々の呪文を妾に教え、神を祀るために供えてありました人肉を妾に食べさせました。妾が數々の呪文を習い人肉を食べますと、妾は忽ちに裸のまま友達たちと一緒に天空に飛び上りました。遊び戯れました妻は先生の命で天から下り、妾はもとの娘の妾となって自分の部屋に歸りました。このように妾は娘のときに魔女の仲間に加わり、妾たちは集つて薄山の人間を食べました。大王さま、この話の途中ですが、こんな話を聴いて下さいませ。

# 「スングラカと魔女カーラトリの物語」

かのカーラトリにディシヌ・スヴァーミンという名の婆羅門の夫がありました。ヴェー

ダの學問に通曉していました彼はその土地に於いて學原として諸方から集まってきた弟子を教えていました。弟子の中にスンダラカという一人の若者がいましたが、彼の端麗な容姿は方正な品行によって一層引立っていました。あるとき、先生の妻カトラトリがこの若者に惚れこみ、夫が何處かに外出した留守に彼に言い寄ったのです。彼女が自分の姿も考えないでスンダラカに惚れこんだとは、まことに戀の神も醜い者を笑い草にして樂んだものです。彼も一度は心を動かしましたがけれども、師の妻を犯すという大罪を精魂を盡して排撃しました。女が如何に誘惑しましたが、善人の心は動かされないものです。こうして、彼が逃げだしたので、カトラトリは自分の身體に自分で齒痕や爪痕をつけ口惜しがり、夫のグイシュヌ・スヴァーミン先生が家に歸ってくるまで、落物も髪も振り亂して泣いていました。夫が家に道入りますと、彼女は

「あなた、見て下さい。スンダラカが妾を手籠めにしようとして、こんなにしたのです。」

と言いました。この言葉を聞きますと、グイシュヌ・スヴァーミンは忽ちに怒りの焰を燃え上らせました。まことに、女を憎みますと、■明な人々の反省力さえ無くなるものです。夕方、スンダラカが先生の家に歸ってきますと、グイシュヌ・スヴァーミンは彼に飛びかかり、弟子たちと一緒に彼を足蹴にし、拳骨で打ち、棒で叩きました。彼が毆打されて氣を失うと、グイシュヌ・スヴァーミンは弟子たちに命じて、遠慮會憐なく彼を夜の間に外の道路に捨てさせました。

さて、スンダラカは冷い夜風にあたって次第に正氣にかえり、このように辱かしめられた自分を顧みて考えました。

「嗚呼、女の煽動はまこと風が池の靜かな水面に波だたせるように、情熱を抑えた人々の心をさえ惱ますものだ。齡を重ねられ、また■明な方にも拘わらず、先生が無思慮にも私に無類な仕打をせられたのは、全くそのためだ。事實、愛慾と憤怒とは賢明な婆羅門たちにとっても生れたとき以來運命の定めるところによって免れえぬものであり、彼等が解脱に達する戸にある二つの門である。また、事實、嘗て自分たちの妻が墮落するのを怖れて、仙人たちがデーヴァ・ダール樹の森でシヴァ神に對してさえ怒ったことがあったではないか。しかも、そのとき、この神は妃ウマーに聖仙でさえも克己心をもっていないことを示そうとして、佛僧の姿をしていたために、彼等は彼が神であるとは知らなかった。彼等は彼を呪ったが、彼が三界を震憾せしめる支配者たる神であることを知り、彼等は忽ちに宥恕を請い、彼の保護を求めた。このように、聖仙たちでさえ愛慾及び憤怒など人間の敵である六種の缺點に欺かれて他人を害うことがある。ましてやダエーダの學匠など尙更のことである。」

と、考えましたスンダラカは、夜間に於ける盜人の難を怖れて、近くの空の牛小屋に道入りこみました。人に見つからないように、その片隅に蹲っていますと、その小屋にカトラトリが近づいてきました。彼女は拔身の劍を手にし、ブーッと音を發して形相物凄く、眼と口から風と火焰を迸らせ、魔女の群を従えていました。このような怖ろしい姿でカトラトリの近づいてくるのを見まして、怖れおののきましたスンダラカは羅刹を續ふ呪文を思ひ出して、それを唱えました。この呪文のために恐ろされて、恐怖のために四肢を縮こませて小屋の片隅にひそかに蹲

っている彼を、カーララトリは發見することが出来ませんでした。カーララトリはそこで仲間ともども天空に飛び上る呪文を唱えて、牛小屋もろとも天に飛び上りました。

スンダラカはその呪文を聞いて憶えてしまいました。カーララトリは牛小屋とともに天空を飛び、忽ちにウッジャイニーに行きました。其處に着きますと、彼女は呪文を唱えてそれを菜園に下ろし、自分は醜女たちに取巻かれて焼屍■に行つて遊び戯れました。スンダラカは空腹を覚え、直ちに菜園に下りて、根を掘つて食べました。彼が腹を満して牛小屋に歸りますと、カーララトリが夜中に墓場から歸ってきました。そして、彼女は牛小屋に乗り、前と同様に呪文の力によつて天空を弟子たちとともに驅つて、その夜のうちに自分の家に歸りました。彼女は乗物とした牛小屋をもとの場所に置き、驅逐した醜女たちを退散させて、寢室に進入しました。

さて、スンダラカは彼の経験した難儀に驚き果ててその夜を過し、翌朝になりますと牛小屋を去つて友達の下に行きました。彼は自分の身に振りかかった一部始終を物語り、他國に行くことを望みましたが、友達たちに慰留せられて彼等の間で生活することになりました。彼は先生の家を去つて、波羅門への施行處で食事をし、友達たちと密みのまゝに交際して、其處で暮しました。

ある日、カーララトリは家庭用品を買いに出かけて、市場でスンダラカを見ました。戀病に取憑かれていました彼女は再び彼に近づいて

「スンダラカよ、今日こそ妾を樂んで下さい。妾は貴方に百つたけなんです。」

と言いました。彼女からこのように言われますと、高潔なスンダラカは彼女に

「そのようなことを言わないで下さい。それは正しくありません。あなたは私の先生の奥様ですから、いわば私の母上です。」

と言いました。すると、カーララトリは

「若しあなたが正しいことを知っているなら、妾の生命を救うて下さい。生命を救うことより

偉大な正義はないでしょう。」

と、言いました。そこで、スンダラカは

「母上さま、そのような考を抱かれてはいけません。先生の圖を犯すということに何處に正義がありましようや。」

と、答えました。彼にこのように拒絶されますと、彼女は憤然として彼を脅迫し、自ら自分の上着をずたずたに引裂いて、家に歸り、夫に上衣を見せて

「見て下さい、スンダラカが妾に襲いかかつてこのように引裂いたのです。」

と、告げました。彼女の夫は怒つて施行處に行き、

「スンダラカは死に値する惡漢である。」

と言つて、其處で彼に食物を供することを止めさせました。そこで、スンダラカは空腹に堪えかねてその■を去ることを熟望しましたが、牛小屋で教わつた空中飛翔の呪文は覚えていましたけれども、空中から降下の呪文を聞きながら忘れていましたので、それを學ぶためにその夜の空

の牛小屋に再び行きました。彼が其處に居ますと、前と同様にカーラトリがやって來まして、牛小屋に乗って前の場合と全く同様に天空に飛び上ってウッジャイーに行きました。彼女は其處に着きますと呪文を唱えて牛小屋を菜園の中に降下させ、再び藪場での夜會に出かけました。スンダラカは降下の呪文を聞きながらも、それを記憶に留めることが出来ませんでした。事實、先生から教えられるのではなくては、神通力は決して完全に達しえられるものではありません。そこで、彼はいくつかの根を食べ、持って歸るために他の根を牛小屋の中に置き、前と同様に其處にいました。すると、カーラトリが歸ってきたとして牛小屋に乗り、その夜のうちに天空を驅って歸り、乗物を止めて自分の家に進入りました。スンダラカはその翌朝牛小屋を出て、食物を購う金を得るために根を賣りに出かけました。彼が根を賣っていますと、マラーヴァ生れの廷臣たちがその根が郷里の産であることを見まして、金を拂わずに奪い取りました。彼がそれを拒みますと、彼等は彼が石を投げつけたという謾で彼を捕縛して、王の面前に引立てましたので、彼の友達たちは彼について行きました。この愚者どもは王に

「われわれはこの男に『お前はどうしてマラーヴァから根を持ってきて、このカニヤークブジャ\*でいつも賣るのか。』と、尋ねましたが、この男は一言も返事をせず、われわれに石を投げつけました。」

と奏上しました。王が彼にこの不思議なことについて尋ねますと、友達たちは

「われわれともども彼を宮殿に留めおかれるならば、王さま、その珍奇な話をすべてお話し申

し上げましょう。そのようになさるなければ、お話しは出来ません。」

と答えました。王がそれに同意し、彼を王宮に上らせますと、彼は呪文を唱えて衆人環視の中で忽ちに天に飛び上りました。彼は友達と一緒に天空を飛翔して、遂にブラヤーガ\*に着きました。渡れた彼は其の土地の王が其處で水浴をしているのを見ました。彼は其處に宮殿を留めて、皆のものが驚嘆の眼をみはる中を天からガンジス河に飛び降りて、王に近づきました。

「貴方はどなたですか。また、どうして天から降下せられたのですか。」

と、王が恭しく尋ねますと、スンダラカは

「余はムラジャカというシヴァ神の従者である。かの神の命により、人間の快樂を望んで汝の許に來たのである。」

と、このように申しました。この言葉を聞きますと、王はそれが眞實であると思い、寶主が満ち溢れ、穀物が豊かに貯えられた都市に女と道具とを添えて、彼に贈りました。彼はその都市に這入って、従者たちともども天空に飛び上り、貧困を免れて永く思いのままに飛び廻りました。黄金の臥床に横たわり、チャーマラであおがれ、美しい女たちにかしずかれて、彼はインドラと同じ歡樂をたのしみました。

或るとき、彼は天空を飛翔していました或るシッダ\*に出會って親交を結び、天空から地上に降下する呪文を學びました。スンダラカは下降の呪文を會得して、自分の郷土のカニヤークブジャに天空の道から降りました。



彼が夥多の財■を携えて都市もろとも天幕から降りてきたことを知りまして、王は好奇心に驅られて親しく彼のところへ出かけました。彼がまさしくスンダラカであることを認めて、王が彼に仔細を尋ねますと、彼はカーラトリのために惹き起された事件の一部始終をすべて王に物語りました。そこで、王はカーラトリを召喚して訊問しますと、彼女は怖れることなく自分の不倫の行爲をすべて白状しました。王は怒って、彼女の耳を削ごうとし、彼女を捕縛しましたけれども、彼女は衆人環視の中で姿を消してしまいました。そこで、王は彼女が自分の王土内に住むことを禁止しました。スンダラカは王から厚くもてなされて、再び天空に還った。ということです。

クヴァラヤーヴァリー妃はこのように夫のアーディティヤブラバ王に物語りましたのち、更に言葉を續けました。

「王さま、魔女の呪文によるこのような神通力はまさしく存在します。そして、このことは妾の父の國に起ったことで、到るところ有名なことです。それに、はじめに申し上げましたように、妾はカーラトリの弟子です。しかも、妾は夫に貞淑でありますから、妾の神通力はカーラトリのよりも一層すぐれています。妾が今日あなたさまの繁榮を祈って祭典を行い、犠牲として捧げる人を呪文によって引寄せようとしていましたとき、あなたが妾を見られました。ですから、あなたも妾どものこの祭儀にお遣入り下さい。そして、神通力をふるって征服した諸王を足

下に從えて下さいませ。」

この言葉を聞きますと、王は

「人肉を食うとは何ということだ。魔女の祭儀の何處に王たるの本務があろうか。」

と言って、王妃の申出を斥けました。しかし、王妃が自殺をしようとしたので、王は止むをえず同意しました。憤怒の對象に引きずられた人々がどうして善き道にとどまることが出来ましょうか。そこで、王妃は以前に成い済めていました曼荼羅の中に王を這入らせ、王が誓言を述べ終りますと、王に語りました。

「あなたの信任厚いバラブーティという婆羅門を此處へ誘い寄せて犠牲として神に供える準備を調えました。しかし、彼を誘い寄せることは難かしいことです。従って、彼を殺して料理する料理人をわれわれのこの祭儀に加わらせましょう。しかも、彼の肉を供物にして食べることについて、あなたは良心の呵責を感じてはなりません。彼は最上の種姓の出ですから、祭祀を終えた瞬にはあなたの神通力は完全でありましょう。」

と、愛する妃から言われました王は、罪障を怖れましたけれども、再びその言葉に同意しました。嗚呼、女に服従することはまことに怖ろしいことであります。そこで、王と王妃はサーハシカという料理人を呼び寄せて、彼をなだめて祭儀に加わらせ、ともどもに彼に語りました。

「明朝、誰かがお前のところへ来て、『今日、王さまはお妃とともに食事をせられる。急いで食物を調理せよ。』という人があれば、その人を殺し、その肉で祓かにわれわれのためにおいし

「料理をつくって貰いたい。」

と命ぜられました料理人は、それを承知して家に歸りました。そして、その翌朝、パラブーティが伺候しますと、王は彼に

「行って、臺所にいる料理人サーハシカに『今日、王さまはお妃とともにおいしい料理を食べさせられる。されば、急いで素晴らしい料理を調理せよ。』と言って貰いたい。」

と言いました。パラブーティは

「承知しました。」

と答えて出て行きました。彼が外に出ますと、チャンドラプラバという王子がやってきて、  
 「あなたが以前に私の父のために作ったと同じ一揃の耳環を、この黄金で私に作って下さい。」と、彼に言いました。王子から仕事を頼まれましたパラブーティは快く承知して、耳環を作りに行きました。王子はパラブーティから話されました王の命令を傳えに自らすすんで獨りで臺所に行きました。王子が其處に行つて王の命令を傳えますと、約束に忠實な料理人サーハシカは忽ちに王子を庖丁で殺してしまいました。そして、彼の肉で料理をつくりました。王と王妃は何も知らずに祭祀が終ると、それを食べました。王はその夜を肉を食べたという後悔のうちに過しましたが、その翌朝耳環を持ってパラブーティのやつて来るのを見まして、王は驚きあやしみ、耳環について彼に尋ねました。パラブーティが仔細を話しますと、王は大地に倒れ

「嗚呼、太子よ。」

と叫び、王妃とわが身を責めたのです。大臣たちが尋ねますと、王はすべてをありのままに物語り、パラブーティが毎日語っていました「善因善果・惡因惡果」という言葉を述べて、

「あたかも壁に投げつけられた毬が跳ね返るように、他人に害を加えようとするとき、それは自身に跳ね返るものだ。婆羅門殺しをたくらんだ性惡なわれわれは、自分の子を殺したばかりでなく、その肉さえ食べてしまった。」と語りました。

王はこのように言いますと、うなだれた大臣たちに萬端の處理を命じ、パラブーティを自分の王國の王位に即けました。祖先を祀るべき子のなくなりました王は罪障消滅のために布施を行ったのち、後悔の焰に既に焼きつくされていましたけれども、遂に王妃とともに火中に身を投じました。パラブーティはこうして王位を得て、大地を支配しました。このように、善惡のいずれにもせよ人がある行爲をしましたとき、その結果は自身に還着するものであります。

このようにヴァツァ王の前でヤウガンダラーヤナは物語りました後、更に言葉を續けました。  
 「親王よ、従つて、ブラフマダッタは貴方に征服せられました後も貴方から好遇せられたのでありますから、若し貴方に反抗することがあれば彼を殺すべきです。」

ヴァツァ王は首相からこの言葉を聞きますと、それに賛意を表し、座から立上つて毎日の宗教上の義務を果たすために出かけました。

そして、その次の日、四方の征服をなし遂げて大事業を果しましたヴァツァ王は、ラーヴァーナカを出發して目らの都城カウシャームビーに向いました。程なく、大地の支配者たるヴァツァ王は臣僚を従えて、舞姫の羣草のような腕に似て空にはためく旗幟を高く掲げて歡喜に踊っているかのような都城に到着しました。彼は一步一步都城の女たちの眼の咲きそろう蓮池に微風を吹かせて入城し、樂人の歌い、吟唱詩人の讃え、諸王の平伏する中を宮殿に這入りました。

そこで、ヴァツァ王は彼に隣いた全土の諸王に勅語を發し、祖先の遺した財寶の中から嘗て得ました先祖傳來のかの獅子寶座に凱歌高らかに登りました。その時の祝典に際して打鳴らされた太鼓の音の高い響や低い響が天に轟き渡りました。その音はあたかもヴァツァ王の首相に満悦せられた世界の守護神たちがそれぞれの方角で同時に賞讃の歡聲を擧げるかのものでありました。

貪慾の念のなくなりました王は世界の征服によつて應ちえた財貨を婆羅門たちに分ち、また大饗宴を催して諸王たちや自身の大臣たちの願望を満足させました。そのとき、王はインドラが雨雲の轟き渡る中に雨を田畑に降らすように、太鼓の音の轟く中にそれぞれの功績に應じて臣下に恵みを授けました。都城の人々も、將來に於ける豊かな收穫を豫想して、家ごとに饗宴を催おして祝ったのでありました。

このようにして、世界を征服しました勝利者ヴァツァ王は國事の責任を將軍ルマンヴァットと宰相ヤウガンダラーヤナの二人に委ね、自らは安樂にヴァーサヴァダッターとパドマーヴァティと日を送りました。彼は勝れた吟唱詩人に讃仰せられて、名聲と吉祥の女神のような二人の妃の間に座をしめ、彼自身の名聲のよりに輝く月の昇るのを樂しみ、敵の威力を呑みつくすかのよりに絶えず燕歡をこころしました。

## 譯註

一四 カイラー山——インド神話に著名な山。ヒヤラヤ山脈の中にあると考えられている。富の神クペーラの住所、シヴァ神の■のあるところ。

カ ヴィディヤータラ族——ヒマラヤ山脈中に住み、シヴァ神に仕え、神通力(ヴィディヤー)を持つ(ダラ)という■紙上の種族。

カ ヴァツァー——ヴァンサとも書く。ジュームナー河の中流地方に勢力を振うた古代の王国の名。

カ カウシャームビー——現在のアッラハーバード州の Koshi に比定せられる。■神像裏には補遺欄と記される。

カ ペーリダヴァ王家——「マハーバータ」に於いてカウフヴァ王家とならぶ王家。ペーリドゥ王の子孫。アルジュナはペーリドゥ王の第三子。

カ トゥリ・ブラ——三つの(トゥリ)郡城(ブラ)の■。シヴァ神が滅亡の三城を破壊した神話は「ハリ・ヴァンシャ」に詳し。

一五 アスラ族——(Asura)とは元来「アス(怪物、妖術上のマナを意味する)を喰えらる者(ウ)」の意で、デーヴァと並んでアトリヤ族の神靈の一つ■となっていたが、後にア(毒)スラ(天)と解釋せられて、神に對立する惡魔とされた。わが「阿修羅」はこの語の音譯である。

カ ナンダナ園——天帝インドラの御園。

一六 月種族——日■と並んで、インドの神話に傳えられる王家の名。

カ アローディヤ——サラニ河に臨む現在の Allahabad に比定せられる。コーサラ國の首都で、日種族の郡城。

一八 ガルダ——インド神話に於ける巨鳥。ヴィシヌ神の乗神で、■族の敵とせられる。

- 二一 シヤヴァツ族——ジャカン地方に住むの。
- 二三 マーラヴァ——西インドの地方。ガンジス川の支流チャムバル川の上流一帯。
- 廿 マーリブトラ——古代に於いて東インド第一の都會。現在の Patna にその遺跡がある。前五世紀の頃よりマガダ國の首都であった。
- 二四 ビーヤとドゥルローダナ——ビーヤはパーンドウ王の第二子。パーンドウ王が夭折したので、兄のドゥリタラーシュト王の目王が即位し、パーンドウ王の王子たちを引き取って育てた。ドゥルローダナはドゥリタラーシュト王の子である。ドゥルローダナとパーンドウ王の王子たちの争いが「マハーバータラ」に述べられる大戦争の原因となった。
- 廿 アヴァンティ——マーラヴァ地方の古名。
- 二六 ダイティヤ族——神話的種族で、悪魔の一とされる。
- 廿 ヤクシャ——クペーラ【の従者である半神的存在。夜叉。
- 二七 アナンター——千眼をもち、大地を支えるという神で、ヴィシュヌ神の狀。
- 二八 ウツジ、イニー——マーラヴァ（アヴァンティ）地方の首都。現在の Ujjain。
- 二九 ムークシャ——ムークシャ（蘇利）の女性形。
- 三〇 ムークラ——シローセーナ地方の首都。現在の Muttra。
- 三一 チタラヴァーカ鳥——時の「Anas Casarea」夜間には雌雄が離れて、互いに【】暮らして信ぜられた。
- 三二 ガンダルヴァ式の結婚——鬼の許諾なしに戀入同席が自由に行う結婚。
- 三三 プリンダ族——ヴィンディヤ山中に住む蠻族の。
- 三九 ヤクシニー——ヤクシャ（夜叉）の女性形。
- 四二 喜悅に逆立つ頭髪——インドの古典文藝では、「頭髪が逆立つ」という表現は非常な喜びを表現するときのみ用いられる。

- 四二 耳の根元に寂靜の使者たる老翁が到着する——頭髪が白くなる意。
- 四六 マハーカラー——護國者としてのシヴァの神格化の。従って、色は黒く、怖ろしい姿で表現せられる。
- 五二 人工の泉——「トロヤの馬」と同じモティーフである。奥地の動物を人間をかくすことは文學に於いては通である。Mahabero: Stories of ancient Egypt, pp. 108-114. 「一夜物語」の「ア・ペバと四十人の奇談」の中に、同巧の計略が用いられることは周知の事實である。
- 五五 身のための處方——古代インドには醫藥の指南書として「ステータ・シャーストラ」があり、及びこむ穴のあけ方などを載せたことが知られる。その原典は傳わっていないが、戯曲「土の小車」(ムリッチャカタイカ)の中の、商人シャルヴィタカの獨白の中に、その幻影が見られる。それに依れば、魔法の歌書を身體に塗ることが知られ、これを塗れば夜夢にも見つからず、鬼物が落ちかかっても、かすり傷さえ負わない、と記されている。
- 五九 拜の神前に於ける遊女の姿——古代インドに於いては、遊女はゲイヴァ・ダーシー「神の奴隷女」として、【】殿で歌をうたい、踊るのを業とした。
- 廿 遊女に對する女將の警め——八世紀の終にカショミールのジャヤ・ビダ王の大臣で詩人のダーモータラグプタの作品に「クッタニー・マタ」(女將の警め)というのがある。それによれば、遊女が富貴な若者に對して眞の愛を装うて、金を得るためであることを覺られぬように毒を技巧手段などが説かれている。
- 六三 クラマ——故事詩「ラーマヤナ」の主主人公。妃シターを奪はれた悪魔クラーヴァナを征伐するために、軍隊の指揮をえて、ランカー島(セイロン)に渡って、敵を仆し、妃を奪いかえした。
- 六五 棍、鐵錘、輪寶——これらはすべてヴィシシュナ神の武器である。
- 廿 由旬——距離の單位ヨージヤナ yojana の音。「由旬がどれだけの距離を正確に表わすかは明確でない。或は四クローシヤ(約九マイル)と云ふ、或は八クローシヤとも云ふ、また四マイル乃至五マイルと云ふ。

六七 半身に油煙を塗り、半身を赤粉で塗り——シヴァ神は妻と神像としては、右半身は男、左半身は女として表現せられて安置せられている。即ち、ナリー・ナラ神はアルダナリシシュヴァラという。

六九 王命によつて自由の身とする——古代インドに於いては、遊女は王に屬し、王の許可がなければ自由の身となれなかつた。戯曲「土の小車」の女主人公ヴァサントセーナーは教養高い富裕な娘であつたが、なお自由の身でなく、最後に新らしく即位したアトリーヤカ王によつて、遊女の身分、を解放された。

七四 タムラリプティ——ガンジス河口に臨む海港。現在の Tarulik. この地は古くから東南アジア方面に對する重要な港であつた。

七六 カターハ・ドヴィーバ——ライ中島にある商業地。現在の Kotah.

八二 五大——肉體を形成する地、水、火、風、空の五要素。

八三 五感——感覺を司る眼、耳、鼻、舌、身の五器官。

八四 ダットウーラー——ちよせんあきがお。産院露花ともいう。白色——白く咲く花を咲かし、果實は球形、刺がある。アトロピン、ヒオスチアミン、スコパミンなどを含み、運動中樞神経を最も初期に侵し、ついで知覺及び意識の消滅を來す。

八九 マダ——殺情期に氣が衝動から分節する海。

九五 ハステイナー・ブラ——現在の Deol 北東五十七哩の地にあつた都。ガンジス河——古來に臨み、月種族の王家の都域であつた。

九七 マガダ國——ガンジス河南岸の現在のビハール州及びベンガル州西部に勢力を有した王國。

九八 マーカンディカー——比定不詳。

一〇一 ショタラヴァステイ——コーサラ國の首都。現在 Oudh の Ayodhya 北五十八哩の Satek-Mahet に比定せられる。灌漑佛典に記される舍衛城はこの都である。

ハ ウンマデニー——この名は「人を魅了する女」「人を征服ならしめる女」の意。

一〇三 ラーヴァナ——叙事詩「ラーマヤナ」に於ける魔王。

一〇六 ラーヴァーナカー——位置不詳。

一〇七 バリージャータ——天國の雲間に咲く五輪の一。

ハ ユディシュティラと四人の兄弟——パーンドラ王の五王子で、「マハーバータ」の主人公。ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァの五人。なお、ヴァツァ王はアルジュナがヤダヴァ族のクリシュナの妹スバドラと結婚して生れた王子アビマニユの子孫である。

ハ ドラウパディ——パンチャラ王ドラウパダの王女。パーンダヴァ族の五王子に嫁し、古代インドの多夫婚の例として著名である。

一二 ヴィクラタ王——ヴィクラタはインドの北西部にあつた國。現在の Punjab と推定せられる。パーンダヴァ族の五王子はドラウパディに嫁つて遠征生活を送らねばならなかつたとき、ドラウパディとともに十三年間この王廷に姿を隠して忍ばねばならなかつた。

二三 ブルーラヴァスとウルヴァシー——ブルーラヴァスとウルヴァシーの神話説話はインド神話に名高く、数々の書に種々の形で傳へられている。インド最古の聖典「リグ・ヴェーダ」を始め、「シタタパタ・ブラフマナ」、「カータカ・サンヒタ」などのヴェーダ聖典、大叙事詩「マハーバータ」及びその附録「ハリ・ヴァンシャ」、ヒンズー教の聖典「ヴィシュヌ・プラーナ」及び「マツヤ・プラーナ」などに、兩人が別れるに至る原因も、或は結婚の際の約束の不履行、或は聖仙の呪詛により、種々傳へられていて、「致差見なす」。この説話の最も發達した形といへべきものは、インド古典文藝の源泉カリーダーサの戯曲「ヴィクモルヴァシーヤ」(勇武によつて得たウルヴァシー)である。

二四 クリシュナ天——クリシュナはヤダヴァ族の勇士で、「マハーバータ」に於いてはパーンダヴァ——五王子の味方。然し、神格化せられ、ヴィシロタ神と同一視せられ、またヴィシヌ神の十變化の一とせられた。

ハ バダリカー——ガンジス河の水源の一。

「二六」 タイミラー——比定不詳。

「二三」 チャーメラ——ヤグ(チャム)の毛で作った一種の服。

「一三六」 人々に凡ゆる望を満さしめる年——ゾアシムカ仙に憑るといふ神話上の年。

「一三六」 インドラとアハリヤーの物語——数種の傳承が傳へられてゐる。「ターマヤナ」では、インドラ神が夫の妾をしたとき、アハリヤーがだまされたと記してゐる。別の所傳では、ソー「(月神)がインドラ神を援助し、驕となつて夜中に鳴らした。ガウタマ仙は何も發せずして起き出て、朝の勅行を始めた。その間にインドラ神がアハリヤーの腹中に怒びこんだ。」  
「三七」 篇——「*mañja*」は「類」と「博法」の二義をもつ篇類である。

「一四一」 千眼となるである——インドラはこの故にサハストラ・サートラ、サハストラ・ナヤナ、サハスワークシ、と呼ばれた。いずれも「千眼を有する者」の意である。

「一四一」 愛憎の爪痕——古代インドに於いては、性愛の技巧の一として爪痕をつけることが愛好された。詳しくは、「カーマ・スートラ」第二篇第四章を見よ。

「一四三」 ラタイとグリータイ——愛の神カーマの二人の妃の名。

「一四四」 王による勅問——見、インドに於いては、王者が直接に勅問を置き、裁断をするのが慣例であつた。

「一四四」 財寶による威力の獲得——五代インドに於いて、或る者が威力を獲得するのは、何卒かの理由でその者が得た財寶の力によると信ぜられた。寓話集「パンチャ・タントラ」には、財寶によつて力を有する物語があり、われわれの「カタ・サリット・サ・カ」六へにも同じモチーフがある。また、ジャータカ(本生譚)三九及び二五七にも同巧のモチーフが物語られてゐる。

「四九」 ベウンドラヴァルダナ——東インドのガウタ地方の首魁。現在ベンガル中部に位する *Padma* に比定せられる。

「五二」 パーラーナシー——現在のヘナレス。

「五二」 ヴァイデーハー——ヴィデーハとも寫す。現在のビハール北部の *Tihart* 地方。

「五三」 チョーディ——現在のブンデルカンド地方。

「五四」 シーシャー——千頭の羅剎アナンタ(上記二七頁を見よ)。

「五四」 胸臑を保持するシヴァ行者——シヴァ派に屬するカーベリーカ派の行者は、現在でも羽の胸臑(カベラ)を保持し、それで飲食する。

「五五」 毒娘——肉體的關係をもつ羽を殺すと考へられた娘。ヴィンヤイカダッタ(五世紀頃か)の戯曲「ムドラーラタシャサ」(ラータシャサの印章指環)にも、この娘のことが記されてゐる。毒娘に關する説話はインドに發し、ヨーロッパ中世にもてやされた「秘密の結婚」*Secretum Secretorum* (マリスコタレスの書とされ、アリストテレスがアレクサンドロス大王に送つたとする書翰を集めたもの)を通じて、ヨーロッパ各國の文學に取り上げられた。ホーレン *Nathan Hawthorne* (1804-1864) の *「Rappaccini's Daughter」* とする短篇は、中世のイタリヤを舞台にして、このモチーフを用いた妖しくも美しい戀と死の物語である。

「五五」 カリンガー——ハナディー河とナーダーヴァリ河の間に位する、ベンガル灣に沿う一帯の地方の古名。

「五五」 マヘンドラ山——東ガーツ山脈の高峯。

「五六」 カウヴェーリ河——現在の *Cauvery* 河。

「五六」 チョラ族——コロンデル海岸地帯の部族。西紀前三世紀の頃からこの部族の處でチョーラ王國の名が知られ、一世紀以後東西貿易の中継地、寶玉の産地として、この王國は富強を誇った。

「五六」 ムーラ族——現在南インドの西岸マラバル海岸地方に據つたケーラタ族の別名。

「五六」 レーヴァー河——現在のナルマダー河。

「五六」 ラータ——現在のグジャラート地方。

「五六」 マンダラ山——インド神話に名高い山。神々の住處とせられ、當て初めに大洪水のあつたとき失われたアムリタ(甘露)及び十三種の貴重な物を採るため、神々とアスラたちが海を撈得した際、この山はその撈得のための棚にせられたといふ。

一五七 アラカール城——クマール神の祠。

シンドロー——インダス河の古名をシンドワ河という。シンドワ地方は現在のパンジャーブ州「帯」の地方の古名。

ムレウチャ——北方の雲族の總稱。

トウルシム族——古代のインド・ヒンディー族のサンスクリット名。

ヴィシシュヌ神がラーフの頭を刎ねた——「大海の攪拌」に際して、ラーフはアスラであったにも拘わらず神に甘駕を齎らした。ヴィシシュヌ神は怒り、その武器の寶をラーフの頭を刎ねた。

パーワールシカ族——パルシア人のサンスクリット名。

フーナ族——中國の史書に見える匈奴即ちフヌ族。

カーマルーパ——現在のアッサム州西部。玄奘は「大唐西域記」に迦摩羅波羅と記す。

一五九 バドヤ調——不明。

シンドラー——インドの四姓の最下位にある賤民。

一六〇 アシヴァツタ樹——無花果の一種。インドに於いては神聖視されている。學名 *Ficus Religiosa*。

一六一 ショーリカンタ——現在のデリーの北西にある不毛地帯の名。

アグ——ポトリ族——火神アグニに牛乳、油、酸漿（米を牛乳で煮て醗酵させたもの）などを捧げる祭儀。

一六三 ティラカ——婆羅門は祭儀の區別のために、前編に於て九印。

最茶羅——マダラとは元來「圓形のもの」を意味する。ヒンディー教の祭儀では圓形の土壇を築いて、諸神を茲に安置して供物を供えて祀る。茲では床に圓形を描いて神を祀っている。

一六四 「眼の夫」シヴァはトリ・ネートク「三眼をもつ者」の異名をもつ。

一六五 愛神は二度と身軀を異えて生れかわることはない——愛神カーマはシヴァの眼から落せられた光明で焼かれて灰となった。この故に、愛神カーマはアナンガ「身軀のない者」の愛」と稱せられるに至った。この神話は「マハーバータ」

に於いては極めて簡単に述べられてゐるに過ぎないが、インド古典文學の劇家カリダーサが跋摩詩「クマール・サンバヴァ」(愛神の誕生)の終端に詳しく述べてゐるので有名である。また、この神話はジャヴァに傳えられ、クディリ朝のカーメーシヨヴァン王 (Chandragupta, c. 300 B.C.) の治世に、詩人ダルマヤが「スマタ・ダハナ」(愛神の總教) という跋摩詩を作した。これは古代ジャヴァ語文學師もカウイ文學の傑作の一である。

一六六 メール山——神話に名高い山。ギリシア神話のオリム波斯に比せられる。

一六七 六人のクリッタイカー——ブレヤダス座の六星をさす。わがスバル(昴)座の六連星。

カールタイケーヤの名は乳母クリッタイカーの名に由来する。この神は愛神であり、また慈愛の神とせられる。

一七一 人間の敵である六種の缺點——饕餮、憤怒、貪慾、食慾、肉慾、自利及び嫉妒の六體をいう。

一七四 カニヤークプジャ——現在の達合州の Farukhabad 縣にある Kanauj の古名。古くは大都會で、七世にはハルシャ王の首都であった。

一七五 ブラ——ガングス河とヤムナー河の合流點に在する Allahabad の古名。  
シンダー——インド神話に於ける半神的存在の。



## 解題

### 一、「カター・サリット・サーガラ」の内容

今、茲に、譯出する「カター・サリット・サーガラ」*Kathasaritsagara* は西暦十一世紀に於けるカシユミールの詩人ソーマ・デーヴァ *Somadeva* の作品である。全篇を通じて格調のあるサンスクリット語の詩で書かれ、十八卷に分たれ、二萬一千三百八十八頌（一頌は二行より成る）の大冊である。文章は流麗で、インドの古典文藝に特有な文飾を構わず、興味渾々たる数々の挿話を包むに外廓物語を以てする。即ち、ウダヤナ王行狀記、ナラヴァーハナダッタ行狀記を梓とし、その中に凡ゆる源泉から流れでた物語の大小の河川が流れこんでいるのである。本書はまさしく物語（カター）の凡ゆる河川（サリット）が注いだ一大海洋（サーガラ）であつて、「カター・サリット・サーガラ」の名に相應わしい作品であり、この意味に於いて世界文學の中に特異な位置を占めるものである。

さて、われわれの「カター・サリット・サーガラ」は、まず本書の成立に關する因縁物語として、インドの固有文藝に特有な神話的な物語を述べる。次いで、カウシャームビーに都したヴァツァ國王ウダヤナの生涯と冒險、特に彼の大臣ヤウガンダラーヤナの智識、マールジャ國の王女

ジャーサヴァッター及びマガダ國の王女バドマーヴァティとの結婚などが物語られる。これは、本書に於いては、ウダヤナ王の王子ナラヴァーハナダッタの行狀記の序篇とも稱すべき位置を占めているが、インド文學史の立場から言えば、ナラヴァーハナダッタ行狀記よりも一層重要であり、且つ物語としても興味が深い。茲に「カタ・サリット・サーガラ」の邦譯の第一巻として採り上げた所以である。ウダヤナ王行狀記に續いて、ナラヴァーハナ太子の行狀記が長々と記される。これは太子の情事の數々と、彼が最後にインド神話に於ける半神的存在のヴィディヤーダラ族の王者となった次第を物語っている。

次に、われわれの「カタ・サリット・サーガラ」には、因縁物語、ウダヤナ王行狀記及びナラヴァーハナダッタ行狀記を緯として、その間にほぼ三百五十篇の長短さまざまな物語が織り込まれている。これらの物語の一部は神物語の挿話と見做されるもの、或は多少なりとも何等かの關聯性のあるものであるが、大部分は神物語とは直接に關係がなく、枠の中に雜然と挿入せられているのである。しかし、これらの物語を物語文學の類型の點から見れば、本書に見られない類型のものはないと言っても、敢て過言ではないであらう。神話あり、神仙譚あり、寓話あり、頓智物語もあれば笑話もある。また、愚者物語あり、惡漢物語あり、貞淑な女の物語もあれば不貞な女の物語もある。従つて、登場する人物も、神あり、女神あり、天女あり、聖仙あり、王者あり、また惡魔あり、魔法使あり、遊女あり、賈掘りあり、社會の上下貴賤を問はず、凡ゆる階層を網羅して枚舉に追ないほどである。更に、われわれの興味を惹くのは、「バンチャ・タントラ」

或は「ヴェニター・パンチャジンシャティカー」(遷屍鬼廿五物語)のごとく、單行の物語集としてインド文學史に著名な作品が、この物語の大洋の中に、或は全篇のまま、或は拔萃の形で、流れこんでいることである。また、挿入された數多くの物語の背景をなす宗教を見れば、婆羅門教があり、佛教があり、ジャイナ教があるのみでなく、陰慘を極めるヒンズー教の祭祀があり、また原始素朴な信仰形態も見られる。かくて、われわれの「カタ・サリット・サーガラ」はインド文學史のみでなく、インドの文化史にも大きな光を投ずるものであつて、その重要性は測り知れないものがあると言わねばならない。

しかも、更に、本書に見られるいくつかの物語なり、そのモチーフが、アラビア或はヨーロッパの著名な物語のいくつかと軌を一にしているのであつて、この點が強くわれわれの關心を惹きつけずにはおかぬ。例えば「笑う魚の物語」(五・一四以下)は「ベンタメローネ」三六話、或は「ストラバローラ」四・一と軌を一にし、「賢者ハリシャルマンの物語」(三〇・九二以下)は「グリム寓話集」の「物識り博士」(岩波文庫本第一二一話)と同巧異曲である。この點に關しては、インドの他の説話文學例えば佛教徒の「ジャータカ」(本生譚)などもその例に洩れない。これら東西軌を一にする説話要素が、異った民族の間に互に獨立して成立したのであるか、或はいずれかの借用に基づくかは、決定の極めて困難な問題で輕々に斷じ難いが、中にはラ・フォンテーヌの「寓話」に「ビルバイ物語」に基づくこと記しているもののように、明かにインドに起源を有するものも數多い。前述の「グリム寓話集」の「物識り博士」も、同じく「物ぐさハ

インツ」などとともに、インドに起源を有することが迎られるのであるが、これらはヨーロッパに於いて民衆の間に賑々と生き永らえ、民衆の心の中に生き、そしてヨーロッパの情緒を養ってきたのである。この意味に於いて、インドの説話文學は世界文學にも極めて重要な意義を有しているのであって、従つてわれわれの物語集はまた世界文學の重要な作品の一であると言つても、蓋し言い過ぎではないであらう。しかも、本書に繰りひろげられる物語の繪巻は、インド的な雰圍氣の中に演ぜられ物語られる、餘りにもインド的なさまざまな姿を描いたものであるが、なお人間追求の厳しい現實の姿がひしひしと感ぜられるのである。茲に、われわれはこの作品を「一夜物語」などと比べて、敢て勝るとも劣らぬ作品の一つと言ひうるであらう。

## 二、作者ソーマ・デーヴァとその時代

われわれの「カタ・サリット・サーガラ」の著者ソーマ・デーヴァについては餘り知られていない。著者はカシュミールの婆羅門で父をラーマといい、本書を書いたのは西暦一〇六三年から一〇八一年までの間である。そして、本書を編述した目的は、ジャランダラの王女スールヤマティーの憐れむる心を慰めるためであつたという。ソーマ・デーヴァに他の作品があつたことは傳えられていない。

十一・十二世紀に於いて、インドの西北對カシュミールは文藝の中心であつた。インドの古典文

藝は八世紀を最後としてインドの中原から姿を消した。爾後、カウヅジ或はダーラー（マールヴァ地方）の宮廷に小さな花の咲いたことはあつたけれども、インド古典文藝の傳統はカシュミールに傳えられ、遺された。既に九世紀にラトナールカガが出て、インド古典文藝の傳統の蔓に花を數輪咲かせたのであつたが、十一世紀になると満開の花が燎亂の美を競つて、十二世紀に及んだ。まず第一に擧ぐべきは、インド文學史上に類例を見ぬ多作家のクシェーメンドラである。

この作家は文學活動のあらゆる面に活動し、敘事詩や劇を書き、古代の偉大な作品の精粹を編述したのみでなく、宗教詩や道德詩を作り、詩論、政治諷刺をも著わした。クシェーメンドラより少し後れて、われわれの「カタ・サリット・サーガラ」の作者ソーマ・デーヴァが出た。當時はカラシャ王の治世（1064-1083）であるが、この王の治世下にはまた詩人ビルハナがカシュミールにいた。ビルハナは、敘事詩や抒情詩或は戯曲の作家として著名で、後にカシュミールを去つてインドの各地を遍歴し、遂に西チャールキヤ朝のグイクラマールディティヤ六世（1076-1127）の許に留まり、この王並びに王家の功業を讃嘆した「ジイクラマールンカ・デーヴァ・チャリタ」を作った。十二世紀になると、ジャヤシンハ王の治世（1128-1155）に詩人マンカが出て、敘事詩「ジュリーカント・チャリタ」を書いた。そして、一一四八年頃には、インド第一の史家といわれるカルハナがカシュミールの年代記「ラージャ・タランギー」（王統史）を著わした。この書は史實と傳説を混合してはいるけれども、文化史の資料としては比肩するもののないほどの價值のあるものである。

このように、ソーマ・デーヴァの環境は彼の教養を深め、彼が活動するのに好都合であった。かくて、サフランの花が咲き亂れ、百合の香の高い山紫水明のカシュミールは、インド説話文學の寶庫であり大洋である、われわれの「カター・サリット・サーガラ」を生み出さしめる豊かな土地となった。

### 三、「ブリハット・カター」とその改稿本

さて、ソーマ・デーヴァが「カター・サリット・サーガラ」を編述するにあたって、彼が巻頭の歸敬偈に

無數のもの照らす燈火なる

管葉の女神をおるがみまつり、

ブリハット・カターが精粹を

撰み集めしこの書をわれは編む。

と記しているのによつて、ソーマ・デーヴァのこの作品の根源に「ブリハット・カター」という書のあったことが知られる。しかも、作者は本書の全十八篇の篇名を挙げた後に、

「この書はその根本を正確に踏襲し、それより儼かながらも離れることはない。ただ言語のみは冗長さを短縮するように撰び、この點のみが異なる。妥當適切で無理のない順序を守ること、

物語の本筋を害わないように詩文を組立てることとの二つは、出来るるかぎり守られている。」

と述べているのである。これによつて、ソーマ・デーヴァは「ブリハット・カター」を殆んどそのまゝに踏襲したのであらう、と推察される。しかし、事實はそれほど簡單ではないようである。何故なれば、「カター・サリット・カター」の原本は現在亡失しているが、その改稿本乃至は改稿本はわれわれの「カター・サリット・サーガラ」のみでなく、他にかかる作品があるからである。その一つは、われわれの「カター・サリット・サーガラ」より儼か以前の「一〇三七年に編述されたクシエーメーンドラ Ksemendra の「ブリハット・カター・マンジャラー」 Brhatkathā-mañjarī (ブリハット・カターの花束) である。この書は「カター・サリット・サーガラ」と同じく、カシュミール所傳の「ブリハット・カター」に據つたもので、兩者は大體に於いて一致しており、或る學者は「ソーマ・デーヴァは原本の内容を、クシエーメーンドラは原本の結構を忠實に再現したものである。」と推察した (Malikowski: Der Auszug aus dem Pañcatantra in Ksemendras Brhatkathamañjarī, Text, Übersetzung und Anmerkungen, Leipzig 1892, s. 167 f.)。「ブリハット・カター」の他の改稿本はブッダスツマーミン Buddhastūmin の「ブリハット・カター・シュローカサングラーハ」 Brhatkathaslokasaṅgraha だ、これは完本ではない。しかし、ソーマ・デーヴァ及びクシエーメーンドラの作品に比べると、原本に近い形で傳えられている、とされている。これは前世紀の末頃にホパールに於いて發見されたもので、このホパール傳本の發見はカシュミール傳本しか知らなかった學界に非常に大きな問題を提供した

が、「プリハット・カタール」に關する謎は依然として未解決である。また、「ヴァスデーヴァ・ヒンディ」*Vasdeva hindi* という、古形マハーラーシュトリー語（中期インド・アリヤン語の）で書かれたジャイナ教の物語集に、詳細で委曲を盡した所傳のあることが知られた（*The Vasudevahindi, a Specimen of Archaic Jaina-Maharajiri, Bulletin of the School of Oriental Studies, vol. III, p. 330*）。これは亡失した「プリハット・カタール」の再構に極めて重要なことが指摘されている。最近、譯書も出版されたが（*ten Konow: Ein Bunt Indische Eventyr, Oslo 1940*）。問題は依然として残されているのが現状である。かくして、われわれは「プリハット・カタール」の原本を今日に見ることは出来ないが、その改稿本として次の三傳本四書を有するわけである。

一、カシニミール傳本——「プリハット・カタール・マンジャリ」  
「カタール・サリット・サーガラ」

二、ネパール傳本——「プハット・カタール・シュローカサンクラハ」

三、ジャイナ教傳本——「ヴァスデーヴァ・ヒンディ」所收

さて、カシニミール傳本二種の中では、われわれの「カタール・サリット・サーガラ」が早くから學界に知られ、また文藝作品としても遙かに勝れている。「プリハット・カタール・マンジャリ」の作者タシュエーメンドラは前述の如く多作家であり、特にインドの二大敘事詩「マハーバーラタ」及び「ラーマヤナ」の精粹を編述したので有名である。これによって、これらの大文學が

讀者に親しまれ易くなったことは彼の功績であるが、また一面に於いてシルヴァン・レヴィ教授が指摘したように（*Journal asiatique, 1885, s. 8, t. vi, p. 420*）原作の美しさをすべて奪ったことも事實である。従つて、「プリハット・カタール」の精粹を編述したという「プリハット・カタール・マンジャリ」も、時には理解し難いまでに短縮している反面に、或る箇處では極めて多辯となり、特にエローティッシュな場面や宗教的な内容の物語の敘述に於いて甚だしい。これに對し、ソーマデーヴァは上品でしかも美しい言語を用いて、技巧をてらわず、民俗文學の特色とインド古典文藝の特色とを巧みに結合しているのである。われわれの「カタール・サリット・サーガラ」が、その内容と相俟つて、世に珍重せられる所以であり、作者ソーマ・デーヴァが疑いもなくインドで最も愛好せられる作家とせられる所以である。

#### 四、「カタール・サリット・サーガラ」のテキスト並びに翻譯

われわれの「カタール・サリット・サーガラ」のテキスト並びに翻譯について、茲に簡単に述べなければならない。まず、一八三九年に、第一篇から第五篇までのテキストがドイツ語譯とともに刊行された。また、一八三九年に、第一篇から第五篇までのテキストがドイツ語譯とともに刊行された。次に、プロックハウス H. Brockhaus によってライプツヒ及びパリで出版された。次いで、プロックハウスによって、第六篇以後のテキストのみがドイツ東洋學協會發行の *Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes* の第二卷（一八六二年）及び第四卷（一八六四年）として發表

られた。このテキストに依つて「トーニー C. H. Tawney の英譯がペンガル亜細亜協會の「インド文庫」 Bibliotheca Indica 叢書の中に發表せられた。二冊に分たれ、第一冊は一八八〇年、第二冊は一八八四年の■行である。

「一八八九年にテキストがボンベイの Nirnaya Sagara Press から出版された。The Kathasaritsagara of Somadevabhata, ed. by Pandit Durgaprasad and Kāśīnāth Pandurang Parab, がこれで、プロックハウスの出刊に比較して格段の差のある善本である。一九〇三年に第二版、一九一五年に第三版を重ね、われわれが今日用いるテキストはこの版本である。

トーニーの英譯は、彼の死後ペンザー N. N. Penzer が詳細な註をつけ、十巻の大冊となつて限定出版された。The Ocean of Story, being C. H. Tawney's Translation of Somadeva's Katha Sarit Sagara (or Ocean of Streams of Story), new edited with introduction, fresh explanatory notes and terminal essay by N. M. Penzer in ten volumes, London 1924. がこれである。ペンザーの註は民俗學的にも比較文學的にも極めて貴重であり、また興味深いものであるが、稍々繁雜に過ぎる憾がないではない。フランス語譯については、書店の目録にその名を見たが、その詳細については知らない。ドイツ語の全譯は未だない。部分譯としては、第十篇を譯した H. Schacht: Indische Erzählungen. Laysane und Laienzig 1918. があり、拔萃譯として J. Hertel: Brute Geschichten aus dem Himalaya, München 1903. などがあつた。

## 五、「ウダヤナ王行狀記」について

「カタール・サリット・サーガラ」は、前述のごとく二萬頌を越える大冊であつて、到底その全部を邦譯するわけにはゆかない。従つて、本分庫にはその拔萃を収めることにしたのであるが、その第一冊として「カタール・サリット・サーガラ」の粹物語（第九卷から第廿卷）をなす「ウダヤナ王行狀記」を選んだ。この物語はインド文學史上に重要な作品であるのみでなく、物語としても興味深いものであるからである。

まず第一に、「ウダヤナ王行狀記」の後半の部分は、パーサの戯曲「ヤウガンダラーヤナの誓」 Pratiyogandharayana 及び「夢に現れたヴァーサヴァダッター」 Svapnavasavadatta のテーマをなしている。この二つの作品は元來一つではなかったかと思われるが、現存のテキストは明かに獨立した作品であつて、前者は四幕、後者は六幕から成る。

「ヤウガンダラーヤナの誓」は本書五二頁以下に述べられる物語と殆んど同一であり、大臣ヤウガンダラーヤナの政略、智謀とその王に對する忠誠心とがテーマとなつてゐる。茲では、ヴァーサヴァダッターの父マハーセーナ王の大臣バラダローハカとヤウガンダラーヤナとの武技試合が劇的展開に於ける主動的なモティーフとなつており、この點に於いてわれわれの物語と異なる。「夢に現れたヴァーサヴァダッター」は本書一〇九頁以下に述べられる物語を骨子としてい

るが、第五幕に於いてウダヤナ王が■の夢の中でヴァーサヴァダッターを見る條があり、また第六幕ではヴァーサヴァダッターの両親からウダヤナ王とヴァーサヴァダッターの繪像を届けてくるが、これは二人の託落のために結婚式が擧げられなかつたので、繪像で結婚式を擧げたという記念の繪像であつた。われわれの物語では、この繪像については語られず、茲にバーサの劇作家としての手腕が見られる。

「ウダヤナ王行狀記」は更に後世の作家に素材を提供している。マートラ・ラージャ(またアナンガ・ハルジャともいう)はその戯曲「ダーバサ・ガフツアラージャ・チャリタ」に於いて「ウダヤナ王行狀記」をテーマとしているが、茲ではウダヤナ王はヴァーサヴァダッターの死を悼んで、その果に落膽して苦行者になつてゐる。マートラ・ラージャの年代は不詳であるが、九世紀以前であることは明らである。また、十三世紀に於けるジャイナ教の詩人ソーマブラバは、ブラクリット語の詩と散文で「クマラーバラ・プラティボダ」を書き、「ウダヤナ王行狀記」を取扱っている。

「法句經註釋」に傳えられる「ウダヤナ王行狀記」Udenavathu (Dhammapa Jajhaka that ed. Norman, pp. 161—231) は佛教徒の所傳として珍重すべきものである。この所傳の概要は次の通りである。

ウダヤナ王はカウシャームビーのバランタバ王の王子であつたが、母后が臨月のとき鷹にさらわれたので、ヒマラーヤ地方の樹上で生れた。アツラカッパ仙に養われたが、父王の死を聞

き、アツラカッパ仙から象呪を受け、しるしの父の指環を持つて歸國し、王位に即いた。ウツジャイニーの王チャンドバッジョータの謀計に陥り、囚われた。王女ヴァースラダッターが象呪を學びたいと乞うたので教えたが、その教授中に姫と謀つて逃げ、姫を妃とする。後にゴージャタ長者の女サーマーヴァアティ、更にマーガンディヤーを納れて妃とした。これで、ウダヤナ王の後宮には、三妃と千五百人の舞姫がいるに至つた。サーマーヴァアティは佛陀の信者となつたが、マーガンディヤーは佛陀を惡み、サーマーヴァアティを嫉み、佛陀とサーマーヴァアティとの間が怪しい、と王に讒した。王はこの■言によつてサーマーヴァアティを殺そうとしたが、佛陀の威徳に驚き、かえつて許を乞うに至り、サーマーヴァアティの勸めによつて佛陀の信者となる。しかし、その後、遂にマーガンディヤーがサーマーヴァアティを燒殺したのを怒つて、マーガンディヤーを燒殺した。

と。この物語の後半は佛教的であり、佛教徒による潤色と見られるが、前半はわれわれの物語乃至はバーサの戯曲「夢に現われたヴァーサヴァダッター」と殆んど同一で、佛教とは直接に何等の關係も認められない。従つて、この部分は「法句經註釋」の編者が「プリハット・カタ」所傳のとは異なる他の所傳の「ウダヤナ王行狀記」から採つたものと考えられる。ウダヤナ王はまた佛教徒の所傳では「パーカンディカ・ブツァデーナ (The Divyavada, a Collection of Parly Buddhist Legends, ed. E. B. Cowell and R. A. Neil, pp. 515—544) に登場する。この王の妃はシャーマーヴァアティ、アヌバマーとなつており、アヌビヤーがシャーマーヴァ

ティーを焼殺したことを傳えて、「法句經註釋」の後段と軌を一つにしている。佛教徒のその他の所傳ではウダヤナ王は信仰の厚い王とせられ、王の造像供養の傳説は、「大唐西域記」巻五及び卷十二、「增一阿含經」第二十八などに見える。

かくのごとく、ウダヤナ王はインドの文藝傳説に著名であるが、歴史上の人物である。原始佛教經典によれば、佛陀の時代に於けるヴァンサ（ヴァツァの別名）の王はウデーナ（ウダヤナのバリ語形）といい、バランタバ王の子で、王子をボーディ・クマラといったことが知られる。この歴史上の王が如何なる理由で文藝或は傳説の主人公になったかは明らかでない。

インド古典親話集 カター・サリット・サーガラ(一) [全4冊]

1954年1月5日 第1刷発行

1989年3月17日 第4刷発行

定価 400 円

訳者	岩	本	裕
発行者	緑	川	亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 巖波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan  
ISBN 4-00-320661-4